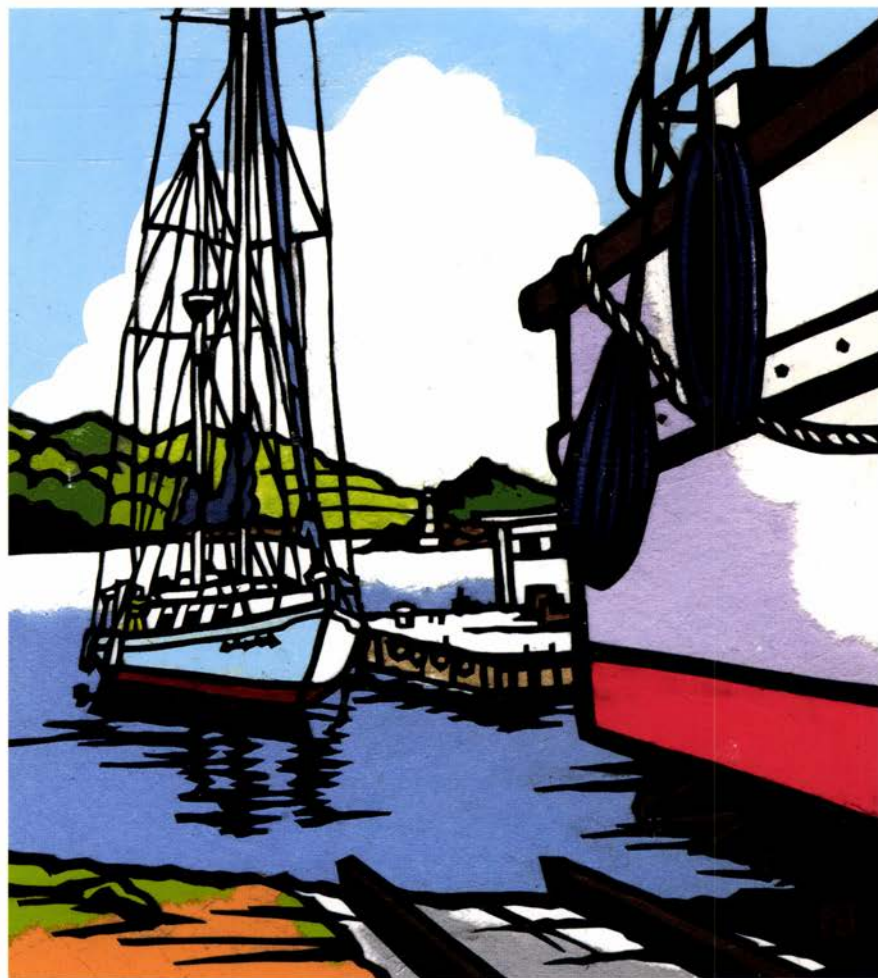


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十六年八月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇四七号



日川協加盟

No.1047

八月号

第20回 川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔90周年記念川柳大会

と き 平成26年10月4日(土)

開場：午前11時、出句締切：正午、開会：午後1時

と ころ ホテル・アウイーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《 同 人 総 会 ・ 議 事 》 午前10時より

平成25年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成26年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

祝 辞 (一社)全日本川柳協会 理事長 大 野 風 柳 氏

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「文化人とは誰を言うのか」『上方芸能』発行人 木津川 計 氏

兼 題 「団 体」 川 柳 塔 社 川 上 大 輪 選

「降 る」 川柳文学コロキウム 赤 松 ますみ 選

「かたち」 びわこ番傘川柳会 徳 永 政 二 選

「ゆっくり」 川 柳 塔 社 西 出 楓 楽 選

「ソフト」 番傘川柳本社 田 中 新 一 選

事前投句 「輝 く」(9月1日必着) 川 柳 塔 社 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 3,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎ 呈 小島蘭幸川柳句集・記念品

《 懇 親 宴 》

と き 平成26年10月4日(土) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウイーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込み 130名様

☆宿 泊 ホテル・アウイーナ大阪 8,000円(朝食付き)

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 00980-4-298479

偶感三話

小島 蘭 幸

6月28日、第38回全日本川柳2014年富山大会

が、富山国際会議場で開催され出席者六二七名の盛会でした。私は都合で欠席しましたので、新家完司川柳塔社副主幹のブログで確認させて頂きました。特筆すべきは、文部科学大臣賞に同人の政岡未延子氏の作品が選ばれたことです。石橋芳山氏は大会賞を受賞、ジュニアの部「風船」の選を牧野芳光氏が務めました。立派な会場で、地元スタッフの心配りも行き届いていて気持ちの良い大会とのことでした。

寺巡る度に鱗を置いてくる
政岡未延子

風船を追いかけて自由人になる
石橋 芳山

7月2日、麻生路郎50回忌句碑まつりを、おのみち川柳会の皆様と一緒に開催しました。路郎が幼少時代過ごされた尾道向島から持参された笹竹に、それぞれ短冊に献句を書いて文学碑の前の広場に飾りました。文学碑にワンカップ5個をお供えて記念写真を撮りました。毎年7月に開催される路郎展は

4月から約一ヶ月との事でしたが、急遽私達のために、2日から開催。文学室では、尾道ゆかりの作家を語る会の高垣氏が、路郎の作品、川柳浴衣、写真、書物について懇切丁寧に説明されました。文学室から尾道水道を見ながら、私はふっと、路郎賞、川柳塔賞への応募が昨年よりも一人でも多くなるようにと願っていました。

文学碑我がふるさとをしょって立つ 小島 蘭幸

7月3日、故森井青居氏の奥様から、合同句集「川柳塔」が届きましたと御礼の電話を頂きました。私を選んだ作品15句を確認してすぐに電話をされたもので、とても喜んでおられる様子がビンビンと伝わってきて、私まで嬉しくなりました。先日、三回忌の法要を済ませたばかりとのことでした。受話器を置いてしばらくすると、私にも合同句集が届きました。その重量感と立派さに、7月7日の路郎50回忌記念句会までには発行するという強い信念を持って、刊行にあたられた皆様の汗と情熱がひしひしと伝わってきて、熱いものが込み上げてきました。

最後になりましたが、全国各地から応募して下さいました七六〇名の皆様に厚く御礼申し上げます。10月4日に開催する、川柳雑誌・川柳塔90周年記念大会もよろしくお願致します。

座右の句

再びのない風景を生きている

(公弘)

私の句

すきま風我が家は愛の目張りする 後藤 美恵子

川柳塔 八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「牛 窓」

■巻頭言 偶感三話

柳派の悪夢

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌 (16)

自選集

温故知新

水煙抄

西尾 葉句抄

新川柳鑑賞 (30)

俳風柳多留一二篇研究 14

英語 de Senryu (32)

江戸を樂しむ (20)

愛染帖

檸檬抄 「世渡り」

小島 蘭 幸 …… (1)

小 西 雄 々 …… (2)

小島 蘭 幸 選 …… (4)

木 津 川 計 …… (43)

川 上 大 輪 選 …… (48)

麻 生 路 郎 …… (71)

吉村 侑久代 …… (74)

小 栗 清 吾 …… (75)

新家 完司 選 …… (76)

竹治 ちかし・大内朝子 共選 …… (80)

柳派の悪夢

小 西 雄 々

最近の各川柳社では、柳派を強調するところは殆ど無いが、私が川柳を始めた昭和23年頃から約20年間は、現在では考えられぬほど他の柳派を無視し、独断的な行為があり私もその渦中に巻きこまれたが、根性で脱出した一人であります。

作句を始めた頃は柳派を気にすること無く、川柳雑誌、川柳番傘及びすげ笠の三冊を購読していた。

戦後、米子地方に川柳会ができたのは昭和23年4月で、課題吟を三題投句すると、番傘同人の柴田午朗氏が選をし、一年後には月例会の開催へと進んだ。

会員は若い二十代が中心で順当に発展したが、約三年後、私の知らない上部の内紛で川柳会は潰れ、句会はできなくなってしまうが、米子市の素封家の後藤至極氏が、米子市から川柳の灯を消してはならぬ、川柳雑誌も番傘も、また個人で川柳をしている人も、全部一緒になっ

一路集「ミレーンク」……………岩佐ダン吉選……………(83)

「おまけ」……………渡辺富子選……………(84)

初歩教室「しつこい」……………原田すみ子選……………(85)

川柳塔鑑賞……………山口光久……………(86)

水煙抄鑑賞……………村上玄也……………(88)

民族の詩歌⁽²⁶⁾……………龍島恵子……………(90)

せんりゅう飛行船⁽⁴⁴⁾……………三好專平……………(91)

■句集紹介「無印笑品」高瀬霜石著……………新家完司……………(92)

「麻生路郎読本」余滴⁽²²⁾……………板垣孝志……………(93)

路郎賞・川柳塔賞 選考規定……………乗原道夫……………(94)

七月本社句会……………井上一箇……………(100)

句会燦爛…………………………(104)

各地柳壇(佳句地十選／石橋芳山・徳山みつこ)……………(105)

八月各地句会案内…………………………(118)

全日本川柳富山大会結果…………………………(120)

柳界展望…………………………(124)

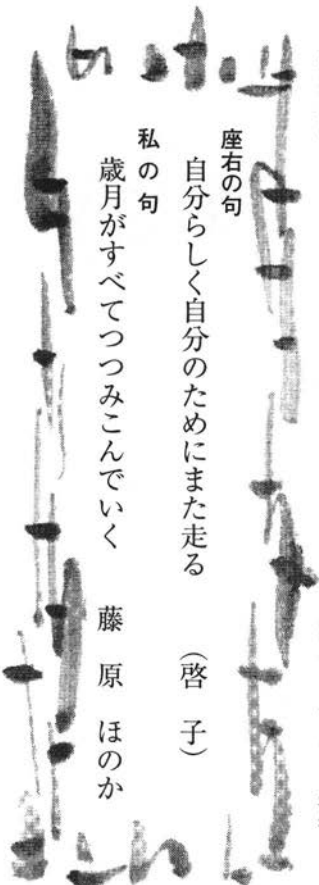
■編集後記(ひとこと／原 洋志)……………朱夏・まつお……………(126)

座右の句

自分らしく自分のためにまた走る (啓子)

私の句

歳月がすべてつつみこんでいく 藤原 ほのか



てやりましよう」と、呼びかけがあり米子川柳金曜会として再出発し会員も増えてきました。昭和29年4月突然「米子番傘」に看板を変えると連絡があった。

その時、私は川柳雑誌の不朽洞会員(同人)になっていたが「不朽洞会員を返上して参加せよ」と、きつい伝言があった。

しかし、私はこれを拒否した。不朽洞会員になるところには、拍手で承認されたのに、辞めよとは何事か、絶対辞めない、と反論し、三鴨美笑氏と松露川柳会を創立し、昭和30年3月には、麻生路郎先生をお迎えして、創立記念大会を開催した。会員も百名を越えていた。

一方、昨日までの柳友の殆どが、村八分的な態度を示したが、私は屈しなかった。あれから60年近く歳月は流れた。その間、紆余曲折はあったが、松露川柳会の灯は消えていない。高齢化で会員は減少したが、句会は続いている。

他方、米子番傘は発足後、数年で内部分裂し大山番傘が誕生し、こちらは発展したが米子番傘は自然消滅した。

現在、周囲を見渡しても皆鬼籍に入りその姿は見えず、冥福を祈るのみです。



小島蘭幸選

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

長生きをしてねと軽く言うておく

ふる里に帰してやろう片想い

潰れてはいるが手作りの味だ

歩きませんか折角の花のみち

ひとつしかない答が眠らせてくれぬ

プライドをたたむと小さい花が咲く

尼崎市 山田 耕治

傘持って行けよと奥で言うている

一日の着ぐるみ脱いで湯につかる

なんのなんの終戦の日も暑かった

掃除屋を頼めば亡妻はなんという

ロゴマーク神のデザインお借りする

まだご本読んでおられる灯がひとつ

大阪市 谷口 義

遠回りしたから見えてきた景色

前歯より少し怒っている奥歯

フランスパンと一緒に通る改札機

ひっくり返るほどびっくりはしない

何でもないことだが空気が澄んでいる

牛乳で育ったようなものである

西宮市 西口 いわゑ

へとへとになってハルカスから帰る

もの思うみどりの風を浴びながら

れんげたんぽぽ遊んだ日日よ風の子よ

これからは出たとこ勝負それもいい

六月の花嫁さんになる孫よ

月よ飲もう酒は天下の灘五郷

大阪市 伏見 雅明

寝たきりの母は年々無垢になり

手のひらに温もり残る木の校舎

からからの喉にしみこむ消費税

匿名でぎょうさん寄付をする仏

へそくりを挟んだままでゴミに出す

子に残す僅かばかりの自尊心

倉吉市 牧野芳光

鎌を休めて古里の山を見る
雨傘も日傘も捨てた母の意地
脈拍がフラットになるこれが死か
延命処置母は幸せだったのか
桐の花の向こうで母が笑っている
夏椿母の喪中はまだ明けぬ

檀原市 居谷真理子

靴べらで自我というものの押し込める
鉛筆を削れば貧しかった頃
盆栽として生かされて生きている
勝たなくていいけど負けるなよ私
父母と出会い子供や孫と会う
老いの胸こんなやさしい音で鳴る

松江市 石橋芳山

悪態が溜まり始めるふくらはぎ
何もない記憶に菜の花の黄色
掛け声で筋肉痛を消しておく
ドクドクドク検査結果がまだ出ない
袋からにやりが零れてて困る
妖怪と言うからたぶんそうなんだ

堺市 柴原道夫

いろいろの緑の中のみどり児よ
路郎ならば真紅のバラを啜えよう
うず潮を見てきて水洗便器かな

うす暗い池でうす暗いもの洗う
市役所を出てしばらくの早歩き
しあわせな地図を描かんとかたつむり

横浜市 菊地政勝

妻の背をピンと伸ばした外出着
腕白を末は大器という評価
親と子の描く未来がずれてくる
あんぱんをがぶり戦後が込み上げる
つまりてみたい女性がひとり居る
お祭りの指示をてきばき出す隠居

大阪市 川端一步

八月ははだしのゲンをもう一度
私がいないと困る人が好き
この暑さ建屋の作業ふと思う
幸せを洗濯したら灰汁が出た
大福を食べてる妻の目は少女
出る時はホロ酔いまでと心得て

河内長野市 山岡富美子

お神輿を物の弾みで担いでる
頰れて牡丹の恋は無残なり
青葉風乳房はつんと上を向く
わたくしの記憶はすぐに初期化する
スマートフォン症候群がねりあるく
パースディケーキがちよっと重くなる

三田市 久保田 千代

同情を嫌う不屈の芯を持つ
伸び縮みしながら生きてきた道だ
ときめきの鼓動に若さまだ残り
不問に付した傷の痛みがつきまとう
やがて火になる蠟芯を燃っている
虹を見た唯それだけのしあわせ度

羽曳野市 三好 専平

万緑に桜一樹の舞を見る
エベレストのはるつもりで生きている
あきらめず嘘をつかずに五月晴
民主主義と民族主義が折れ合わず
おおきにが似合う舞妓の下駄の音
菜の花や井筒を謡う老いの恋

富田林市 中井 アキ

入院も良いないろんな友が来てくれる
掌の微熱はときめきの欠片
半分こ出来ぬ愛です女です
万華鏡女の夢に果てはない
八十路まだまだ欲しいものはある
核心を突かれあたふたする尻尾

寝屋川市 籠島 恵子

どなたにも文句言わさぬあみだくじ
確認のために電池をすりへらす
意に添わぬ人とも組んでホイサツサ

もう母を探しはしないネムの花
空蟬のかたちで歳をとっている
曖昧でゆこうと決めた半夏生

鳥取市 両川 無限

叱る眼の奥に菩薩の母が居る
噴水の虹愛された日の記憶
山ガール山に恋してまだ独り
運命線道に迷った跡がある
いい出会い風が微笑みかけてくる
疑うと針一本が棒になる

堺市 加島 由一

キャンセルが出たので来いと歯医者さん
家事こなす男やもめの昼の酒
ハウツーものの本ばかり読むフリーター
ネコ膝にのせて月見るネックレス
ふる里の来し方想う蛍の夜
人生を川に重ねる歌が好き

篠山市 酒井 真由

ライブバルがしつかり握っているタクト
じわじわと攻めてゆくのも草臥れる
誰ですか真綿で首をしめるのは
年輪だなどとやさしいことを言う
薔薇いろの棘が抜けない恋かしら
うつとりと沈んでひらく水中花

紀の川市 辻内次根

幸せは何かとわかる歳になる

しゃんと背を伸ばせば五歳若返る

人間でありたい悩み深くする

切羽詰まって今はひとりと悟る

愚かさがわかるひとりを包む闇

立ち位置はここでのいかと自問する

堺市 澤井敏治

戦中派言うてもたかが乳幼児

遠めがね逆さに見ればみな小物

星空を消してしまつた都会の灯

明日またと夕陽が背なをほんと打つ

喜怒哀楽凝縮させている涙

亡き父に似ているらしい前屈み

米子市 吉田陽子

しつとりとあじさい寺は雨がいい

羽づくろい悲しいことがあつた日も

ホタルブクロの清しさ我を取り戻す

ケーキ焼くことなくつろぎ欲しかった

落花するかたちで今日を生き延びる

人生も佳境蹊き道連れに

松江市 藤井寿代

キミの笑顔カバンに入れて持ち歩く

きつと来る片道切符握りしめ

探さないで紋白蝶になるところ

見なかった振りをしているジャスミンティー

ウルトラマンのエンジンたまに借りてくる

世渡りをフーテンの猫から学ぶ

長岡京市 山田葉子

ドタキャンもお互いさんになってきた

杖軍団若者に席譲らせる

齢忘れ正面突破くり返す

寝こんだらポジティブ志向どこへやら

終りまで寄り添えたのが拠りどころ

万一に備え有り金使い切る

八幡市 今井万紗子

血族だらうか笑顔がみんな美しい

転ばぬよう確と両手は開けてある

ちっぱけな予定で今日も回り出す

終章を飾る勇気を下さいな

簡単レシピ夫に教えて二三泊

いらん事言うて薬がまた増えた

箕面市 酒井紀華

爽やかにシンブルライフ春の風

手短に誉めるスピーチ忘れない

コマーシャルなら簡単なダイエット

簡単に約束しない正義感

乱筆の恋文のこし天国に

乱世に武將の妻は名をのこす

藤井寺市 鈴木 いさお

うつし世と思う飯の世とも思う

漱石も太宰も龍之介も鬱

やがていつか大樹となつて帰り来よ

カプセルに詰めて未来へ夢飛ばす

ひまわりにだつて悲しい過去がある

他人事とばかり思つていた老化

松原市 森 松 まつお

念のため買つておこうかジャンボクジ

腹八分妻は至難の技らしい

道なりに行くとき飲み屋に着くのです

新調のスーツ気付いてほしい人

カニ食べている時話しかけないで

道の駅三つまわつて旅おわる

枚方市 小林 わこ

孫描く太陽みんな大笑い

水平線にジュジュツと太陽が落ちる

暑い日は絶対辛いカライカレー

お日さま偉い美味しさをくれる笑みくれる

陽を浴びて弾み出したら止まらない

依怙最良しない太陽太っ腹

神戸市 山崎 武彦

コンビニで値切る勇氣はありません

後期高齢まだ半分と思いたい

ほどほどの気儘と気まま仲がいい

お見舞の嘘を見抜いているベッド
相槌を打つとぞろぞろ出る不満
あんたほど気儘に生きてなにご不満

和歌山市 福井 菜摘

摘果する小さな命手に受ける
ふる里の青空という小さな旅
劳いの一言意地が解けてゆく
身の丈を生きて心の荷をおろす
切り取り線ゆれる子離れ親離れ
自分史に余白のページ残しとく

八尾市 宮崎 シマ子

お中元上乘せをして娘に贈る
中元を買うどさくさに服も買い
天井を見つめて一夜友の計に
人の愛欲しくて袋ばかり縫う
娘のように燕我が家へ子を生みに
天神まつり菅公様は遊び好き

東京都 伊勢田 毅

納骨を終えて見上げる青い空
骨壺にキスしてそつと墓の中
そのうちに亡妻と同居の墓の中
カラカラと骨が最後のものを言う
一周忌遺影の妻が微笑んだ
納骨を済ませ疲れがどつと出る

さいたま市 星野 育子

れんげ畑消えて夢が見られない

正論を吐いてからはそれっきり

鉄で魚捌く料理教室

八月の樹海に響く風の私語

オリンピックはふたたびで見たいという

横浜市 小野 旬多留

酸素吸入器酒の規制はないらしい

年金に己の腑甲斐無さがある

朝顔にまた一年の手打式

テレビのみで知る社会の狭い視野

貴方には借りがあるから死ねません

富山市 島 ひかる

朝昼夜三百六十五の緑茶

ショッピングカートを押したことは無い

後期高齢飲み薬にはまだ無縁

わたくしの自然治療力ただ感謝

植木屋へ松が待ってるなどと言う

可児市 坂山 まみ子

眠れない夜に初鳴きホトトギス

鳴き声の他は知らないホトトギス

ファンでもないが気になるW杯

不器用で空気も読めず一人旅

死ぬ前に国産うなぎ食べたいな

愛知県 早川 遡行

クラス会皆んな上手に化けてくる

子の抜けた後のベットの良い躰

何よりのご馳走だった京言葉

喜びが目回復で倍になり

土の上歩く素足も久し振り

犬山市 金子 美千代

うぐいすが近くに棲んでいるうらら

初生りは鳥に御馳走したいちご

脳トレにする税別の目眩まし

日焼け予防に役買っているマスク

ママチャリの意地電動は先延ばし

犬山市 関本 かつ子

病得て友ご夫婦の睦まじさ

百均を楽しみながら雨やどり

リクエストしたいウグイス名調子

風の子を待ちくたびれた遊園地

クールビズだらしない人似合う人

京都市 高島 啓子

定年後ないはずはない一波乱

むつかしい顔でわからぬことを言う

湯舟には飲料水を入れている

梅干しを祖母の仕草で裏返す

ときめいた人と長生きごっこする

京都市 藤井文代

嫌な話今日のアンテナ向き変える
サイズなしと言われ財布はホツとする
身の丈を知っているのに神頼み
音符一つ下げて愉快に立話
なぐさめも貰いすぎたか重くなる

京都市 榑本宏子

神の手も拝んで入る手術室
財産と思てた手足軋みだす
歩くほど煩悩がわく遍路道
若者よ友と未来を語ろうよ
カタツムリとやさしい雨を待っている

亀岡市 井上森生

ちよつとだけ冒険ごろ老いの友
肩や腰痛みは五七五で追い払う
喜寿越えたおまけは川柳好きな日々
生涯の川柳綴りまだ続く
喜寿通過どうやらここらが折返し

大阪府 桑田ゆきの

野火猛る極楽浄土の地図かもと
宅配へ山椒足してる母心
梅雨の雲なおも心を重くする
子に合やす歩幅で花の畑巡る
それからの夏のロマンを促され

大阪府 野田栄呼

おもてなしずい分減って代変り
三世代同居の今を幸せと
厨房へ父も顔出す世の移り
食欲が先走りして生きる八十
品格をただよわせてる譲り合い

大阪府 初山隆盛

かあさんの香りはしない哺乳瓶
好き嫌い老いの一徹我を通す
二次会のお酒は家と決めている
免許証返上できず坂に棲む
人生は軽い喜劇で終りたし

大阪府 米澤俣子

箱のままだやりすたりの記念品
強かなやぶ蚊よ私お婆さん
締めきりが脳細胞をゆすつてる
多すぎる拍手はきつとサクラだな
頼りきるスマホ人間退化さす

大阪府 阿野壽美子

駅弁は旅の情緒に花を添え
母の日とカーネーションに見とれてる
スマホ見て夢中になって下車忘れ
見る程に心安らぐ富士の山
サッカーに期待ふくらむ日本国

大阪市 井丸昌紀

夜が更けるほどにじわじわ湧く疑惑
味がある褒められたのかどうなのか
ジョーカーを上手に隠す国に住み
リベンジは成功したが眠れぬ夜
きのうまでたくさんあったのにお金

大阪市 江島谷勝弘

お人柄腹が立つほどやさしくて
ほんやりの時間あったら僕は寝る
もう少し人の意見も聞きなさい
なんだろう兄弟なのに仲悪い
人はなあ可もなく不可もなくがよい

大阪市 榎本日の出

百人の敵を相手によく遊ぶ
焼芋でほっこり命延ばしてる
好きな人夢で恋する歳となり
負けん気をもらう敵から味方から
人間が悪さ出来ない青い空

大阪市 榎本舞夢

好天気カーテンマット取り替えて
押入れに眠り続けた夏衣装
誘惑に負けじと財布固く締め
久しぶり友と出合いてティータイム
春風にふかれ楽しい旅プラン

大阪市 大川桃花

好調が続きカルテも嬉しそう
団欒に縁がなかった小商い
判子の在り処しつこく息子聞いてくる
旅の宿いりろほっこり聞く民話
ゲリラ雨ビルのジャングル丸洗い

大阪市 奥村五月

午前さま今日は安心妻は旅
喧嘩する金は残さぬ使い切る
早よ行こと諭吉が責める日暮時
同窓会あの世で聞く日も近い
休肝日元氣な父はどこへやら

大阪市 笠嶋惠美

夜明けの風よ今日もよろしく背を押して
ちよつぱり定期恥ずかしい程喜ばれ
甥結婚ニユーヨークまでのし袋
鼓童のリズム興味津津南座へ
増税からか写経もさびし人の数

大阪市 神夏磯典子

天の句を追いかけて一日が終る
家族みな手をつないでる底力
同居する祖母にも仕事置いてある
ちぐはぐな返事阪神勝っている
お隣の嫁さん挨拶がうまい

大阪市 熊代菜月

医者の指示時には反抗したくなり

泡のないビールが辛い話きく

楽も苦も生きた証の八十年

吠えるとも忍び泣くとも虎落笛

手のシワが苦勞の数をきざみます

大阪市 小谷集一

自画像の皺を一本消しておく

人生を一巡りして日向ほこ

下り坂夕日が影の背なを押す

私の弱点妻が攻めてくる

守備範囲ちぢめてゆとりある余生

大阪市 古今堂蕉子

3Dプリンター人はどこまでふざけるの

繫糸つけたまんまで五十年

リストラに合いたい妻の座が重い

分つて承知もしてるでもないやだ

一円が足りず一万円くずす

大阪市 近藤正

八月は語り部になる次世代に

美ら海を生贄にする辺野古基地

防災の訓練ですとオスプレイ

金婚の宴を締めるホテル狩り

消費税ゼロでも不満大企業

大阪市 坂裕之

背負い込んだ約束ごとで肩が凝る

何もかも片付くなんてとても無理

違う道わざと走って目の保養

法事する準備も嬉しおばあちゃん

爺ちゃんの話で弾む食事会

大阪市 佐藤忠昭

本年は夫婦で祝う喜寿と古稀

全員で氏神様で祈祷受け

親持ちで記念のお祝い有馬泊

温泉で一風呂浴びて祝宴だ

孫の守妻に任せて二次会へ

大阪市 澤田定子

期待する体操クラブ計量日

真夏日と気象報告五月晴

人口減あちこちに見る空き家札

顔写真真予想以上のお年寄

根まわしが出来そうもない我が一家

大阪市 田浦實

無我の境にさせてくれます草むしり

ライバルは名軍師だと覚えたり

おもてなしほどだから好きな宿

赤提灯ぶつきらばうもおもてなし

鉦笛太鼓山車の御通り街和む

大阪市 津村 志華子

米を研ぐとても返せぬ水の恩
路地裏も仰げば広い空がある
負けて勝つ言いたい事は畳んどく
一枚はしどろもどろの二枚舌
リュック背に路面電車の小さい旅

大阪市 津守 なぎさ

一泊の旅すつきりと帰路につく
おしゃべりの輪に病人も活気づく
山の日が出来お誘い待つリュック
客寄せの伊勢海老アワビ旬がない
自衛権アホノミクスにされている

大阪市 寺井 弘子

アロハシャツ着た役人のまるく見え
8パーセント馴れ始めてる昨日今日
巡礼の旅立つ朝に風薫る
AKB年甲斐もなくのぼせてる
古里の一本松は道標

大阪市 原田 すみ子

こっち向く呪文そろそろ効いてくる
頼られて線引くことの難しさ
絶好調手ぐすね引いて朝を待つ
神様もきつと一息この夕日
周りみな平穏昼寝長くなる

大阪市 板東 倫子

空の青花の白には嘘が無い
辻斬りや追はぎが出る大都会
消費税増やし年金減らす国
要らぬお世話と承知の上で孫叱る
同じ事考えてない双生児

大阪市 平嶋 美智子

裏街道遺跡みつきり日の目みる
見栄張らず裏をみれば生きやすい
これからは裏や表や考えぬ
窓開けて襖も開けて梅雨晴れ間
さらりとした暑さを連れて好きな夏

大阪市 升成 好

錆止めになつてる筈の一行詩
雑草の種は場所など選ばない
親戚に九十歳が五人居る
好奇心枯らさず老いを先送り
途中下車花が見頃と聞いた駅

大阪市 松尾 柳右子

テレビ欄から考える長い夜
風通し好い部屋猫も昼寝する
五月晴余生二人のティータイム
女性部で鋭気養う食事会
お昼寝が出来ぬたちですでも元気

大阪市 山崎 君子

田植姿昔変らぬ赤だすき

花の色絵筆持ちます日曜日

ウニ食べて田舎の海を想い出す

古里は行けば楽しい遠いところ

子に若さ貰って遊ぶ楽しさよ

大阪市 吉内 タカ子

螢火を見せて上げたい嫁電話

これからは元気を競うパートナー

汗かいた胡瓜戴く嬉しくて

戦中派ひだり団扇が出来憎い

視野広め感謝感謝で日を送る

堺市 奥 時雄

ご祝儀のものはとれない披露宴

子のメール誤字を糺して返信し

温泉の土産よく似て安っぽい

凡庸に見せて薄目を光らせる

女学生降りて各停ひととなる

堺市 柿花 和夫

最後まで位牌が残る形見分け

悪友の噂さかなに悪友と

ひと通りチラシを読んでから二度寝

知らん間に妻とお袋ぐるだった

人間で良かった嘘がつけるから

堺市 源田 八千代

暖簾にもバラと紫陽花季節感

外出へ娘の留守番が有り難い

駄目元と申請したら認められ

生ゴミゲット出来ず阿呆と鳴いて去り

今年もまたお世話掛けますすだれ掛け

堺市 齋藤 さくら

肉だけで身体できてる筈でなし

妻のため長生きしてと言うてます

父ちゃんが多弁になった退院日

酒止める断言せぬが減らしてる

親介護奮闘してる話聞き

堺市 遠山 唯教

名刹の風に感性研ぎ澄ます

再稼動に脱原発のドラがなる

子を憶う親に祈りの夜がながい

めんどいが朝においしいカプチーノ

さびしいさけ廃車の夜には度を過ごす

堺市 内藤 憲彦

テッペンに近くて遠い八合目

あの人に内輪の話はやめておく

一心に蟬の鳴く朝原爆忌

妻が直ぐだめだめだめと堅いこと

空っぱの明日が待ってる早寝する

堺市村上玄也

自慢話聞かされ心萎えてくる

過去形でばかり喋っている哀れ

勝ちたいと思うと手足縮こまる

声援が脅迫じみる絶不調

アイデアが浮かんだ時にメモがない

堺市矢倉五月

ときめいてハイと返事をした指輪

大方の事はケリつけ沙羅の花

亡父さんも歩いた駅へ続く道

孤独死はいやと鰯の群にいる

一冊の出会いで染められたわたし

池田市栗田久子

蟬の抜け殻命の確かさを残す

宵闇にあの日と同じ月見草

経歴に触れると続かない会話

愚痴を言うにもお相手を選ばねば

送り火に亡き人の名を巡らせる

和泉市横山捷也

迷路抜け息をのみ込む初夏の花

喜寿までは馬齢を隠すつもりです

冷奴断酒の誓い崩れだす

残る程財産も無く波静か

矢印の先が幸とは限らない

泉佐野市山本蛙城

蒲焼きの秋刀魚鰻の傍で売る

メードインチャイナイコル偽と見え

この狭い田にも白鷺来る事情

なるようになるさコインをポケットに

聖五月裏にゴマンと五月病

茨木市島田誠一

トラ席と知らずオレンジタオル振る

旨いものみな敵にして医者に媚び

その時に備え死に顔リハーサル

我が家だけ生きる備えの核シエルター

ふっ切れた顔が緞帳上げさせる

茨木市藤井正雄

根回しかいつもと違う低い腰

ときめきに戸惑い混じる新任地

くに訛りコケシと話すワンルーム

気ぜわしく口紅塗っている嫉妬

眼裏に故郷を抱いて遠く住む

大阪狭山市矢野梓

逆転を狙う円陣組み換える

為^い来^{きた}りを守り例外許さない

ニュースから会話広げている二人

自分の名試し書きしてペンを買う

転けぬ様片方の手は空けておく

交野市 森 本 弘 風

今日も無事自動改札通り抜け
腰痛に耐えて傘寿を生きている
兵隊に行けぬ議員の自衛論
ケイタイも電子手帳も俺の友
駅舎ではつばめの子等が親を待つ

河内長野市 植 村 喜 代

まだ昭和よかったこともありまし
吉本の天下でみんな明るいね
増税もなんのそのあの人出
暇が出来たら体悪くなる
辛くなったらお花を見ています

河内長野市 梶 原 弘 光

長生きに各種条件付けて絵馬
2億円当たれば隠し果せない
酔い冷めの水に小言がぶつかぶか
街なかのコンビニ僕のテリトリー
街の灯が恋しくなつて下山する

河内長野市 木見谷 孝 代

甘くみた浅瀬に足をすくわれる
はきはきとし過ぎて声に重みない
決心が揺らがぬうちにポストまで
骨拾う覚悟も要ると思う歳
おいしいのひと言手間が報われる

河内長野市 黒 岩 靖 博

年寄りに甘い囁き落し穴
枕元防災リュックいつも置き
ときめいて恋が芽生えるお歳頃
千鳥足ゆれる満月影法師
ワンマン社長帰宅をすれば道化役

河内長野市 坂 上 淳 司

ゴールド免許返納させた緑内障
憲法は私と豪語する総理
冤罪で幾人露と消えたやら
封印の訛噴き出す電話口
徘徊を隠さず他人の手も借りる

河内長野市 谷 久 美 子

義母の日の花一輪にある絆
泣き笑い越えた白寿の無垢な顔
曇り後湿った心天日干し
酒ビール気ままに過ごす妻の留守
曇りメガネ拭いても明日は見えぬまま

河内長野市 松 岡 篤

子に見せる程の背中か鏡見る
子に代わり答え言いたい参観日
勘定の時は兄ちゃん兄ちゃんと
献立はデパ地下に寄り試食して
青い恋今も引きずるサユリスト

河内長野市 水谷 正子

内閣の支持率フン興味あり
リハビリの御恩返しに自立する
リハビリの部屋の空気は暖かい
リハビリの優し先生好きになる
もう誰も面会来ない月曜日

河内長野市 村上 直樹

木漏れ日を辿りみどりの風に酔う
寄席通い病んだ心の錯落し
家計簿を睨みつ決意する節酒
脱原発手間暇金がかかるとも
人生のエピローグには大花火

河内長野市 山室 光弘

泣き上戸女の武器を何思う
ケータイを忘れ空虚な身がひとつ
同じようなニュースばかりで血も湧かぬ
黄昏の恋にブレーキありますか
一戦を交えるつもり庭の草

岸和田市 岩佐 ダン吉

両拳まだときめきを抱いている
首都にまで基地おかしくはないですか
四面楚歌僕は緩んでなどいない
底に着くさあこれからは空を見る
森を出てヒト科の笑顔消えている

岸和田市 堤 梢代

日差よけ夏が来るのを待っている
カタログにしばしの夢をもらってる
締切が私のお尻をたたいてる
脳トレにクイズ挑戦頑張ろう
曇りです明るい曲をかけようか

四條畷市 吉岡 修

五欲みな未解決ですまだ死ぬん
わずかず地球の唸り声ふえる
第二章闇の世界が興味引く
ふところの広い余白は君のもの
飲みものは各自払いでご自由に

吹田市 太田 昭

デパートの物産店で旅をする
腰痛の俺に歩けというカルテ
愚痴ひとつ頷くだけの聞き上手
飲み仲間逝って残った猪口ひとつ
いい話に頷き合ってコップ酒

吹田市 大谷 篤子

ストレスを断ち切りたくて旅に出る
大きな目がぎよろりと目立つ所作をする
演技ではない優しさが宝です
大声で笑うと毒が抜けてゆく
これからは自分の足で角曲る

吹田市 木下 敏子

神様にひとり勝手なこと頼み
日曜も草と戦う指の先

コーヒーで朝のひととき丸くなり

まだ女らしさ忘れず髪染める

寝室もおんなひとりの彩となる

吹田市 須磨 活恵

手鏡にたるんだ私の顔がある

無駄話いい心のクスリです

探しても未だ自分が見つからぬ

一枚の女のウロコまだ落ちぬ

娘や孫をそつと見守る蚊帳の外

吹田市 野下 之男

凱旋門何はさせおきボンジュール

なでしこが嫁さんだつたら敷かれそう

もう少し優しくしてね桜島

カラスでも小首かしげて熟慮中

蟻さんよそんなに急ぎノルマかい

吹田市 山本 希久子

原点にあった昭和のカルメ焼き

明日は手さぐり今日の絵を画いている

熱入れて聞くピアノから波の音

正直過ぎて私の鉛筆が尖る

飲みに行こうと紙ヒコークが飛んでくる

高石市 浅野 房子

終の章何かいいことないかしら
心得て生きているのに痛みます

心やさしい私が何で痛い目に

こうなるべくしてこうなった怨むまい

べつたら漬け水なすだけで昼がすむ

高槻市 井上 照子

言い勝つてまずい夕食日も暮れた

口だけは達者電話の長話

身辺整理あれもこれもと捨てるもの

長生きは苦しいことの山いくつ

ひいばあと呼ばれて命あといくつ

高槻市 片山 かずお

筆の文字臆せず書けば味がでる

ぼんやりが良い味だしている齢

上ばかり望んで消えた人間味

ささやかにする気に見栄が邪魔をする

背筋をピンと伸ばして老いを遠ざける

高槻市 杉本 義昭

元気かい時々死球投げてみる

遠出したもみじマークが帰らない

子がそつとおねだりをする母の耳

ジャズストリート老いも若きも無垢になり

平凡というレットルを受け入れる

高槻市 島田千鶴子

梅雨冷えに戸惑い見せる夏扇
エルニーニョ地球を変えてみたいのか
まだ夏に馴れぬ身体を持て余す
家計簿の使途不明金問わぬまま
大学が来て駅前が活気づく

高槻市 初代正彦

任せたらきびきび動くシャイな人
自身では若いつもりの身のこなし
幼児にも労られると汗が出る
好評に分譲中と瘦せた旗
韓ドラを出しに温める夫婦愛

高槻市 富田美義

良い子等の遠い記憶にある絵本
転んでもブライドだけは立っている
清獨に夢を重ねて五七五
此処もまた防犯カメラこっち向く
お人好し母の遺伝子損ばかり

高槻市 富田保子

顔色を読んで幹部を引き受ける
眼や耳に肥しをやるか夫婦たび
一粒の飴が休憩やわらげる
医療高歩け歩けと老いの坂
あと幾度お供出来るか遍路笠

高槻市 原洋志

背かれてから地滑りが止まらない
政治家を真似あいまいな返事する
改札を抜けるとそこはもう真夏
逆立ちを忘れてしまう砂時計
天下取る酒ならやめたりはしない

高槻市 安田忠子

朝一番お水供えて母恋うる
また増えた衰え知らぬ好奇心
バスツアー後期高齢花ざかり
手の動き写る影絵の懐かしさ
駅前に温泉出来て寄る至福

豊中市 池田純子

ふる里の波は素直に打ち寄せる
支持率が上がってきたる婆のパン
私かて靴服リユック山ガール
消費税二円切手は何故うさぎ
いつだって元気をもらうハイタッチ

豊中市 江見見清

トラブルが起きて正体見えてくる
亡き友に触れない通夜の帰り道
初恋はあなたと笑われて終る
手作りのお菓子にちくはぐなお世辞
折折の夫婦の仲は不定形

豊中市 藤井則彦

富田林市 片岡智恵子

骨粗鬆症と言うたび舌を噛み

敗戦を終戦という戦中派

僕もいつか純真無垢な呆け姿

トイレでは帽子を脱いで畏まる

自分あてにハガキを出して叱咤する

豊中市 松尾美智代

取りあえず今大丈夫です見えています

手術視野に入れて治療と何げなく

随分生きた七十年も大過なく

たんぼが終わりの旅を急がせる

夫婦には丁度いい距離違い棚

豊中市 松村里江

派手な女呼びパーティー盛り上げる

真ん中のいい席取って待ってます

化粧する指に集中力がある

ハイお待ち時価のにぎりがボンと出る

世界遺産昔の人は偉かった

豊中市 水野黒兎

梅雨空に機能低下の脳と胃と

麦わらで昭和を編んだほたる籠

風化する記憶火花が焼夷弾

玄関に今日の元気な泥の靴

各停に乗り換えてから増す出会い

うちの鏡同情もなく世辞もなし

茜雲あしたが見える窓を拭く

あとが無開き直って見えた道

孫からの初給料でもてなされ

千の風初盆の兄来てくれる

富田林市 関よしみ

取れとれのトマトゴーヤの息の彩

まほろばが舞台玉虫きりり飛ぶ

釣忍斜めに仰ぐ町家から

前髪を揃えてからの恋一途

人形に託し茅の輪くぐり抜く

富田林市 肥山一文

すらすらと友の名言える大丈夫

もう少しわがままを言う生きるため

出世する欲を捨てたらスイスイと

この歳になっても好きな人は好き

妻の攻めいつもあえなく落城す

富田林市 山野寿之

人間の死角蠢く愛と憎

彷徨うた森で拾った人の情

パソコンも妻もてのひらには乗らぬ

削除キー押すのが怖いあかんたれ

デバ地下の昼を彩る高齢者

寝屋川市 富山 ルイ子

言った聞かぬ家族の中でくり返す
耳遠くとんちんかんの返事する
後の席好きで聞えぬまま座る
二十年何時も後が指定席
出席をためらう何処に座ろうか

寝屋川市 平松 かすみ

退院はメスを信じたご褒美よ
ありがとう百日振りに声が聞け
わたくしを忘れた自分どんな顔
もの忘れ醜くならぬよう鏡
重宝な土だしやがいても転げ出る

寝屋川市 森 茜

仏壇へ今掘りたてのメークイン
あいまいに笑ってしまいかすり傷
市役所のトイレ時々水びたし
ひとときの緑のシャワー孤にこもる
焼却炉の煙まつすぐ雲になる

寝屋川市 森 田 麗

船頭が代わりやさしい風に会う
骨密度もろくてすぐに寄りかかる
針千本置いてきました里の駅
また愚痴を聞いて下さい墓掃除
沙汰のない末っ子の夢ばかり見る

羽曳野市 安芸田 泰子

ひとつづつ言葉忘れた青い空
衣更え気儘な季節読み切れず
深刻な話は雨が止んでから
つらいのは六月のてるてる坊主
捨てるものたくさんあつてまだ死ねぬ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

お四国はバスで巡れど辛い脚
五時起き朝のお勤め身が締まる
満願の頃にはうまく経が読め
雨音が写経の筆を滑らせる
締切りに追われ背筋が曲らない

羽曳野市 徳山 みつこ

一日を長いと思うことはない
窓開けて空気もわたくしも始動
非常食で手抜き時とのかけっこ
バラエティーもアベさんもう飽きました
私の自慢七つあるかな指を折る

羽曳野市 永田 章司

労わりの心忘れた消費税
人も古い家も朽ちてく過疎の村
訛でも大阪弁は全国区
人も車も大阪の街せわしない
アナログは古いと周り馬鹿にする

羽曳野市 吉村 久仁雄

東大阪市 米田 水昇

無垢で無知で無欲で無策なのに勝つ
隠し玉まだありそうな顔をする
百までは生きると決めて肉を食う
足の萎え挙動不審じゃありません
満たされているわと妻の目が怖い

東大阪市 笠井 欣子

休診日今日も忘れて引返えす
さい果ての地へ旅をする健げな子
タクシー代平気になった痛い足
足なえても筆もつことの出来る幸
お墓から新緑の山見てますか

東大阪市 北村 賢子

気付かぬうち掌中にあつた虹
いわし雲はるか彼方の青い恋
同い年夫ばかりがなぜ若い
無い者同士寄り添い生きてきた誇り
古稀の坂まだ飲み会に行ける幸

東大阪市 佐々木 満作

回り道しても信念揺るがない
孫二歳成人式は祝えるか
一端にスマホ操る五歳孫
クラス会みんな一病持合せ
診察券七枚病院の梯子

車椅子押す孫娘逞しい
列車来てホームのすき間板敷かれ
エレベーターを乗りつぎて行く百貨店
孫娘とお昼は好みににぎり寿司
運動会一等だったと孫の声

枚方市 安達 忠央

長老の一声冴えて座が締まり
雲海に富士だけかっこよく聳え
だしぬけの大粒の雨戎橋
スランプをいくつも越えて練れてくる
広い海こだわりいつの間にか消え

枚方市 海老池 洋

第九条君死にたまうことなけれ
集合離散人間なんてそんなもの
張り切りの過ぎて果ててる油蟬
何やかやで昨日も今日もまた明日も
美しい心で磨く笑い皺

枚方市 伊達 郁夫

迷うことあつて命がまた伸びる
大の字で童話の森で昼寝する
真っ白い靴が汚れてほつとする
子の合図解らぬ親の赤い靴
濁流の殺意に油断した不覚

枚方市 丹後屋 肇

ええ恰好したい財布の病垂れ
習慣の散歩に向かう雨合羽
起承転結結が迷子になっている
いいメイクしてねとデスマスクが謂う
我が夢を包んでくれる雲の峰

枚方市 寺川 弘一

どの駅も降りてみたいな一人旅
カーナビと地図があつても迷う時
余生でも時間の速さ変わらない
大阪に住んで大阪悪く言う
花道でなくても拍手してくれる

枚方市 二宮 山久

梅雨寒へ衣替えして風邪をひく
えりあしに女が匂う薄化粧
朝顔が咲いて我が庭夏に入る
六月の雨に紫陽花色を増し
化粧する妻は鏡とにらめっこ

枚方市 二宮 紫鳳

色を増す紫陽花愛でてティータイム
紫陽花の小径に続く傘の花
孫たちの瞳キラキラしゃぼん玉
かき氷ほうばる孫に初夏の風
おニュー傘雨に弾みをつける午後

藤井寺市 伊藤 アヤ子

診察券増え財布にも入らない
川の字の四畳半がなつかしい
まごころの野菜は道の駅にある
雨降りのツバメは低くとぶらしい
ボーナスの時期楽しみにしてる母

藤井寺市 太田 扶美代

ゆすら梅採つても採つてもまだたわわ
憧れへそつと投げてみたボール
文面を流れる詩情のようなもの
枇杷の実が色づき母の事ばかり
茜雲主役を降る準備する

藤井寺市 高田 美代子

淋しくはないかと白い薔薇が訊く
四捨五入出来ないままで夜が更ける
煮ても焼いても灰汁を残している私
ポケットの中になんにも無い軽さ
ほう蜚夏の余白に舞ういのち

藤井寺市 津田 シルク

夜景みててつい頷いたプロポーズ
きっかけは何でしたかね共白髪
加齢とは薬人間まるくなり
一人天下亡夫のお陰手を合わす
瓶貯金少し有事に参加する

藤井寺市 増井 ヨシ枝

暑いのに服着せられて犬の難

サヨナラをしてから思い出す名前

カスミ草なければバラも映えません

車椅子足のブーツがほしい春

ふる里にもどれば自然と出る訛

藤井寺市 俣野 登志子

聞き捨てにならぬ話をすぐ忘れ

バタバタとまだ落ち着かぬ古稀半ば

本番に強い秘訣の自然体

きつい事やんわり言われとほけとく

心して読もう老眼鏡を拭く

藤井寺市 若松 雅枝

紫の好きなわたしに藤が咲く

よく遊びよく食べ孫は太らない

運動不足で私だけはよく太る

財産は無いがそろそろ遺言書を

仏壇の夫にまたも愚痴を言う

箕面市 出口 セツ子

誕生日必ず電話くれる子ら

子の出張急に一日長くなる

すぐ頼り子から自立がまだできぬ

愛してゐるうまく伝えはできないが

子が元気ならば他には望まない

箕面市 広島 巴子

紫陽花の白は恋人愛誓う

雨続き欲求不満犬も吠え

外国語あふれ戸惑う京の寺

歎異抄忘れた頃にブームくる

息切れをせぬよう歩く人の道

守口市 井上 桂作

ふくらはぎもんで長生きしましょう

日中の温度も夏日梅雨まちか

認知症次第に増えて地方にも

連休もお老人には用はなし

無理無体中国の船体あたり

八尾市 内海 幸生

子育てを卒えて他所の子覗く癖

辞書にないカタカナ新語聞きあぐね

言い勝った後の寒さよ風呂に入る

孫からの一撃頑固の紐を解く

落日に誓った言葉は語らない

八尾市 高杉 千歩

左手でスマホ離さぬ昼ランチ

長寿国多死社会とは厳しいね

小保方さん話題も消えて梅雨に入る

デイサービスなりにお洒落に気を使う

十年も続けた薬まだ信じ

八尾市 寺川 はじむ

海老で鯛釣るよな孫の古希祝

鈍な性ブームが去つてから嵌る

老いの身にどこで付けたかさすり傷

鈍臭い振りして円く立ち廻る

なにわの美学ポケットコミにある情

八尾市 村上 ミツ子

クールビズ街もだんだん軽くなる

異常気象へ日に三度衣替え

もう誰もよしよしと言うてはくれぬ

隠してもうれい声になっている

先ずやろうたとえ失敗だとしても

八尾市 山根 妙子

縁結び大国主も目を細め

群れ離れ地虫つえばむ鳩一羽

種からの発芽ひとしおいとしくて

旅疲れやっぱり我が家とまた出かけ

増税に備えた品が場所を占め

神戸市 白川 淑子

一円まで分けて女子会お開きに

これからが正念場黒豆ごはん

躊躇する丸い背を押す若葉風

よく笑う母に元氣な子の育ち

スクワットつま先家事で足が吊る

神戸市 福原 悦子

一日を気楽に生きる果報者

あの世までゆつくり行こう呑気者

何もかも水に流せばまだ楽し

尊厳死旅の終りに請うている

明日は明日風に人生まだ楽し

神戸市 山口 美穂

鉛筆を削るの今も肥後守

定年後の自由気儘は夢の夢

毛虫さんごめんね好きになれないの

いたい痛い泣いても叫んでもひとり

梅雨晴れの一日疲れたつかれたなァ

神戸市 山田 婦美子

古い殻破る決意の繭の中

白地図を持つて余生の夢を追う

デジタルの海にはまった思考力

春雷を刺激しないでヘソルツク

胃を切つてまだまだ飲める酒の量

明石市 梶谷 和郎

急流も海に出会つてからは風

不覚にもときめく妻の薄化粧

まず一歩あとから勇気ついてくる

平坦な男ちつとも影が無い

耳奥に亡母は住んでる子守歌

芦屋市 黒田能子

後悔はしない一人で渡る橋

じわじわと残り時間が減ってくる

新しさ求めて古い物が好き

気楽です軽いつき合っています

それからのプライバシーは洩らさない

芦屋市 竹山千賀子

仲間入り少し空気をよんでから

こっそりと治した鼻が高すぎた

じつくりと自分磨きの老年期

未来の芽なんでなんでと伸びていく

大物が高所恐怖という死角

尼崎市 市坪武臣

酒も止めタバコも止めて医者通い

また来るね孫が笑顔でハイタッチ

空気にも慣れて跳び交うランドセル

じゃじゃ馬も時には甘え上手です

懐がさびしくなってお留守番

尼崎市 長浜美籠

今日の日を大事にしよう雨上がる

新緑のシャワーが何よりのサプリ

母の日に娘から表彰状届く

挿し木定着まだ生きる価値ありそうだ

靴下の穴独身を誇示してる

尼崎市 春城年代

五つこはぜを一つはずして花疲れ

原稿紙の升目ふやけてくる疲れ

譲られて九十の腰のぼしている

他人の街がいつそ住みよい花の闇

似てきたと思う娘の庭いじり

尼崎市 藤井宏造

一本では役をなさないかすみ草

ふる里の友の訛が心地よい

俄雨のんびり待てるのも歳か

切り札を出せないままの帰り道

おそれずに正面向いて子を叱る

尼崎市 藤岡りこ

めっちゃ悔し増税後から医者通い

唸るほどお金ありそな永田町

乗り換え五分スリル味わう駅うどん

拝まれて貸したお金は戻らない

転居地へとときめく老母に安堵する

加西市 金川宣子

方程式畳み込んでる夢の中

お便りに追伸します二四分

図鑑手に野草覚える散歩道

懐に見合った服がフィットする

葉桜にひまな茶店で人心地

川西市 西内 朋月

外人墓地にスリッパの音がする
眩しくて口に出せないプロポーズ
新しい畳に替えて横になる
遺言の手帳を入れる貸金庫
父の日に酒の代りに花届く

川西市 山口 不動

衣更えネクタイはもう要りません
早口のATMに追いつけず
薬局の長い説明やめてんか
つれあいの病気で俺がマメになり
喜寿となり妻に料理を習ってる

川西市 米原 雪子

洗濯物梅雨の晴間を狙ってる
接戦に雨も加わる壮絶さ
世渡りも終盤に来て振り返る
雨予報外れて欲しい試合ある
床離れ季節が楽にしてくれる

篠山市 酒井 健二

如才ない人が幻想抱かせる
身の上も混せて会話が弾みだす
村一つ二つと消えて野に返る
神様は願い聞いただけ気は揉まぬ
手際よく戦争できる国となる

三田市 石原 歳子

夫から聞いた話を人にする
病床の夫手鏡じつと見る
遊んでも遊び足りないランドセル
旨く出来ひとりで自慢して食べる
新品の服を着るのは気恥ずかし

三田市 上垣 キヨミ

留守電に話すと水が欲しくなる
うきうきと徘徊噂背に句会
ミニドラマ演じて今日の幕おろす
改名は親に貰った名を使う
先生の魔法くすりがケロリ効く

三田市 尾崎 一子

キラキラのトンボメガネのお嫁さん
スカイツリー恐怖症ですハイタッチ
泣き笑ういろいろあつて人が出来
ツバメの親子家族になつて半世紀
食べて寝るまだ生きている好奇心

三田市 北野 哲男

コンビニエゆうべの試合買いに行く
父の日も変哲のない冷や奴
留守電に嘘を言わせてティータイム
転んでもジョークを杖に立ち上る
情報のない千円の散髪屋

三田市 福田好文

故郷の蔵で見つけた通信簿

奈良巡り鹿の哀しい目に出合う

緑児が瞬時に見抜く敵味方

妻と手をつなぐ勇気がまだ湧かぬ

小石一つ投げて波紋にうろたえる

三田市 堀正和

故郷のホタルがおいでおいでする

平和だな監視カメラのない田舎

ゆるキャラが頼りだ過疎の村おこし

晴雨など気にはしません道祖神

ファッションに歩きスマホがなってきた

宝塚市 田中章子

カラスの一撃ムチウチとの診たて

本当だったんだヒッチコックの『鳥』

からすにも守るべきものあったんだ

積んだりくずしたり夫と生きる日々

ゴキブリはわたし瓶の蓋は夫

西宮市 秋元てる

母の日の旅をワリカン三姉妹

お転婆の孫が変身何かある

合格を見届け父は赴任地へ

出会えより見合いが合理的と思う

花手入れ母よ腰痛何処へ行った

西宮市 足立茂

雑巾掛けで心も磨く修行僧

カラオケの点が商談ぶち壊す

伝統が改革論を打ち砕く

道草が花の名前を覚えさせ

勘定書きにつけ漏れがある酒二合

西宮市 緒方美津子

どこから見ても祈りの形富士の山

呼びすてにしてくれた父母釣忍

教室に子のつく名前一つあり

朝の友目白とみかん半分こ

俊寛も今の世ならば冤罪に

西宮市 片山忠

手の届くところに言い訳置いてやる

バーボンの水割りだけで描くドラマ

大切な物から壊す反抗期

逝く時はカラオケ葬と決めている

逆風を面白がっている孤独

西宮市 亀岡哲子

鷺につられて猫のプチ家出

運動会の華はダンスの男子校

切り捨てた枝にも蓄付いていた

ほんやりの記憶に欲しいスパアキー

服屋さんの煽てに乗っている鏡

西宮市 福島弘子

生前の形見分けたと卒寿から
ゲームセット讀え合つても顔に出る
卑弥呼から見れば今の世異国かも
脳トレの折鶴五歳に誉められる
家族会議脱線ばかりで進まない

西宮市 牧 渕 富喜子

日常のひとつま若田さん帰還
クロスワード誰のことばも聞こえない
いつもより春の長さをいとおしむ
色鮮やかに春の長さに合せ咲く
夢もあるベタペタはった貼りぐすり

西宮市 山 本 義 子

柿若葉一緒に暑さ乗り切ろう
菖蒲池すこうし雑が性に合う
目こぼしのたけのこ背丈伸びました
芍薬咲く女人高野は憩う森
鉄線花のむらさき衣雑事消す

西脇市 七反田 順 子

バラアイス君と巡ったバラの園
車から手を振る彼が二三人
凜として姉はOP室祈るのみ
親切な医師と看護師安堵する
有り難い医学の進歩感謝する

姫路市 古 川 奮 水

サッカーのテレビが好きで瓶ビール
花吹雪表彰台の乙女観た
何の真似泥鰌すくいの練習中
この暑さ高野石楠花枯れました
この道は急がず歩く灘五郷

奈良県 渡 辺 富 子

なぜ生きる自問自答の杖をつく
ときめいた想い出語る散歩道
百態をさらしあの日を笑い合う
ゆつたりと青葉の海でスクワット
地図のないこの世の旅がまだ続く

奈良市 阿 部 紀 子

墓前にて般若心経亡母の声
孫達を絶対戦死させられぬ
カーテンのゴーヤ日々二個食べごろで
絹の扇子優雅に煽ぎ姫気分
臨終に楽しかったと言うつもり

奈良市 岩 本 浩 二

美人薄命自慢の妻はもう傘寿
デジタルの海で化石が溺れてる
軍服の凜凜しい祖父が睨む居間
団欒の茶の間に宿る福の神
病窓に孫の明るく高い声

奈良県 中原 比呂志

アルミ貨も汗一滴の重さ持ち
中立という宙ぶらりが守る椅子
百態のポーズから刷る一枚
旅仕度半分疲れているスーツ
通学路見守る心の健康法

奈良市 大久保 眞 澄

オヤ洗車なさったのねと黄砂降る
元氣かと声交わし合うお葬式
あれ以来海に憧れなくなつた
8バーに早や慣らされてきた恐さ
公園デビユーママ友の関所あり

奈良市 加門 萌 子

歳取るといろいろ有るねちと弱氣
まだともうまだで行こうね七十年代
大好きなヒール手放す時が来た
アンにはまった日も有つた若かつた
久々に港の見えるミュージアム

奈良市 辻内 げんえい

旅に出てすっかり直る夫婦仲
再検査軽めの食事で明日を待つ
わが家にも心を満たす四季の庭
華々しい席が苦手で隅に居る
頑なに持論を曲げず生きている

奈良市 天 正 千 梢

ゆつくりと楽しんでいる老年期
集団生活流れ作業にも似たり
花菖蒲やはり紫の方がいい
前歯二本抜けたお人の笑い顔
新聞を拾い読みして一句出来

奈良市 米 田 恭 昌

色褪せた虹まだ抱いている孤老
傘寿まだ元氣に集う靈山寺(同窓会 3句)
連れおうてだから歩けた奥の院
傘寿仲間で元氣に「高校三年生」
法華寺をみどりの風が吹き抜ける(法華寺吟行)

生駒市 飛 永 ふりこ

レシビの彩ちよいとおすましブチトマト
叩きがいあるでしよマシユマロの武装
大丈夫いうてわたしの胃酸過多
梅雨晴間ソプラノ天へ突き抜ける
ぐいぐいとオーラが立葵の匂

橿原市 安 土 理 恵

そら豆をむくや望郷ひとしきり
新緑と同化できそう森に入る
添いとげる覚悟あやしくなってきた
記念日へせてシートのおろしたて
ばあちゃんの手縫に孫たちのそつば

香芝市 大内朝子

夏を越す覚悟命に言い聞かす
なるようになって流れている河童
魂をほっこりさせる酒ちびり
弱いのに強い女にされている
子の心配生さる支えになっている

大和郡山市 坊農柳弘

医者嫌いくすり嫌いで大ジョッキ
終止符を打てないままに梅雨明け
理想論ばかり追ってるあかんたれ
シユッと切る傘のしずくにある誘い
覚えてますか愛を誓った星まつり

和歌山市 岩本美智子

如何にせん遂に我が家もスマホ菌
頭休業すかつと心空っぽに
愛は憎に憎は愛にはなれぬ業
憐れみを誤魔化している苦笑い
本心は偏西風に似て曲り

和歌山市 上田紀子

私の味になるまで続く旅
賛否両論中間色に紛れ込む
魂の洗濯愚痴をよく濯ぐ
川下で人間臭さから抜ける
打たれ強い女の早い立ち直り

和歌山市 柏原夕胡

ブラックジョーク聞かされている半笑い
感情線の途切れたあたりから闇に
雨になる笑い袋が破裂して
人間にだけはなりたくない案山子
マシユマロになってあなたを守ります

和歌山市 喜田准一

近道をするから夢が消えて行く
回り道しよう問題多過ぎる
土壇場の心配りに人の幅
慎重を唱えて腰が引けている
しきたりと序列明日を通せんぼ

和歌山市 木本朱夏

生き甲斐は見つけましたかツバメ来る
ドクダミの匂えば痛む股関節
招待券は二枚今宵は星祭り
花栗オーブンカフェの忘れもの
包丁は暗いところに眠らせる

和歌山市 楠見章子

透明のお客も乗せる昼の駅
廃線へ落書き残してる駅舎
ウイंकが上手鏡の中の魔女
奥様と呼ばれて背筋のびてくる
茜雲に呼ばれホイホイ坂登る

和歌山市 坂部 紀久子

台本のないドラマの中のわたし

話せない夢私の中の魔女

適材適所わたしの位置が定まらず

一人でも思わず声に出る旨さ

四時間置ききの薬気になる不眠症

和歌山市 武本 碧

首一つ出すと渦中の人となる

風当りきつそう低空飛行する

身の内を善女と魔女が小ぜり合い

団らんの真ん中におくゆずり合い

終章のノートが白いまま暮れる

和歌山市 土屋 起世子

我慢がまんにつこり笑い波静か

絡みあいぶつかりやがて出た答

振り返ればいつでも側にあった愛

脳のネジ巻いて馴れさす消費税

何事もなくておいしい晩御飯

和歌山市 福本 英子

スーパの冷めぬ位置で喧嘩もすぐ出来る

見ない振りしている中に忘れ去る

偉い人替えても戦せぬ国に

解りにくい文字に騙されないように

甲子園サッカー熱にひと休み

和歌山市 古久保 和子

学校のチャイムで野良も昼にする

朝一番骨の動きを確かめて

芋虫ごろごろこれが私のストレッチ

花屋の紳士今日は誰かの誕生日

目印の花が散ってた曲がり角

和歌山市 堀 富美子

終章は今日のリズムで終りたい

地平線見詰め人間から逃げる

いい方へ転ばせながら余生ゆく

窓越しに勧誘を視る息ひそめ

病室へせいっぱいの笑みを置く

和歌山市 松尾 和香

恙無い暮し感謝のご命日

百歳へ今の幸せ続かせる

思い出は悲しくきれい五七五

最高の出会いを偲ぶ写経筆

留守宅を守る紫陽花艶やかに

和歌山市 松原 寿子

座り直せば目も真剣になつてくる

瞬きほどの生きざまだろう大宇宙

崖っ縁で貫く自信満ちてくる

やめるとか続けたいとかご自由に

鬼になる覚悟うるさい人を斬る

岩出市 藤原 ほか

うろうろと回り回って故郷へ
ショックから立直るため五七五
坂道を踏み締めながら登りきる
うろうろと迷って森に根を下ろす
倉庫には私の夢が詰まってる

海南市 小谷 小雪

余白にも君の似顔絵書いてみる
年金の日々安心が目減りする
六月のハエ取り紙に緩い風
残高がさあという時ものを言う
あなたとの対角線に虚数置く

海南市 堂上 泰女

錆びぬよう夫へ時々とばす橄
健やかに粘って変える風の向き
今更に身に沁む父母の黄昏期
医者帰りちよつと茶店でする換気
ハミングを誘う街路樹の濃緑

紀の川市 宇野 幹子

時差ボケの心に沁みるおみそ汁
おしどりを演じ続けた鍋のふた
小気味よく割箸割れた喜寿の席
裸婦像にちよつぱり媚びて撫でてみる
姿見も四苦八苦する名古屋帯

紀の川市 北山 絹子

オットット何処を向いてるやじろべえ
土壇場で父の拇印が躊躇する
綾取りの川で心を遊ばせる
思い切り翔んで未来へ着地する
足音を立てずこっそり夜を出る

田辺市 岡本 昇

政見より握手の数で票を読む
節電をよそにど派手なネオン街
竹槍を持った女の反戦歌
絶交をしても会ったらおうと言う
去年の巣リフォームをして住むつばめ

橋本市 石田 隆彦

誤タッチを許してくれぬ販売機
本当の自分に出会う親離れ
ささやかな備えも国に吸い取られ
軽く一杯で終った例はない
故郷の駅に初心の二文字あり

鳥取県 石谷 美恵子

知らぬ間に同じ好みになって老い
八十を過ぎてても残る恋ごころ
幸せな皿からこぼれでるボヤキ
用意した答と違う風の向き
嘘一つつけず真実なお言えず

鳥取県 岩崎和子

熱いのよ動くアイロン猫が寄る
目がね掛け本半開き夫眠る
読破力ほんと凄いな声かける
化粧だけ忘れずおやり姉の声
北国の姉がお手本今日も生き

鳥取県 斉尾くにこ

哲学と名が付く空を見てる椅子
さりげなく気付かないふり見ないふり
お笑いしても涙になつてくる
淋しさの小さな穴へはまる歌
吸わないと知恵も言葉も吐けない

鳥取県 竹信照彦

更衣したら真夏がやって来た
山陰が少雨になるかエルニーニョ
どんよりと曇り山陰らしくなる
賞味期限昔は母の舌が決め
おくやみ欄僕の年頃多い日

鳥取県 西谷悦子

チヨロチヨロの一滴いのち水であり
目から目へ阿吽の呼吸タツチする
楽しさは自分の心から創る
鍵穴の向こうに光る未知がある
闇の中光見付けて安堵する

鳥取県 細田裕花

若い頃気付かなかった良いところ
マンネリと気付いているが熱が出ぬ
ロールキャベツとろーり平和主義は美味
親しくて内緒話が重くなり
すつぴんで語り合えてる間柄

鳥取県 松川行男

東京っていいなだつてさ夢捨てに
座蒲団を投げに行きますいつの日か
神様が肩叩き合つて口閉ざす
あげますよ漬物樽も石臼も
振替の会費納めて打診され

鳥取県 山下節子

消費税脳の活性化にもなる
ニキビ一つ中学生の恋かしら
土下座までして頼み事するものか
過疎に住む人情だけは変らない
ワルツ踏む膝が調子を覚えてる

鳥取県 山本正光

草抜きの汗は僕への勲章か
家族らのつつかい棒で生きている
頭では思うが出来ぬ休肝日
神仏の御加護か生きていますまだ
背伸びした自慢話はこげ臭い

鳥取市 池澤大鯰

関節痛部品交換まだできぬ

要がはずれてんでんばららゴミとなる

建増しをすると荷物がまた増える

少子化で里山放置まだつづく

大部分ということにして押し切られ

鳥取市 奥谷彩子

太陽笑い私も笑ういい予感

満ち足りて止まったままの砂時計

胸のすく啖呵も切れぬ老い悟る

枯れるまでリンと生きたしバラの花

戦後処理拉致というとげ抜けぬまま

鳥取市 加藤茶人

皇室に三面記事は似合わない

改憲は子々孫々へ負の土産

何となく平均寿命でプラン立て

投資にはあつちの水は苦いかも

税抜きが安いと思う勘違い

鳥取市 岸本孝子

女子会の誘い朝からわくわくと

心地よい説法聞いた三回忌

どっこいしょ言えば力が倍になる

休養を告げて真央ちゃんいい笑顔

はつらつとしても歩幅はついてこぬ

鳥取市 岸本宏章

山の日がおまけのように決められる

地産地消少し昔に戻すだけ

実力が付かねば運も向いて来ぬ

米作り北海道がいま熱い

インフレに泣いた昔も忘れない

鳥取市 倉益一瑤

大砂丘画家も詩人も生み落す

夜桜に攫われそうになるころ

葛藤を背負い曲っている小指

てっぺんを目指す男の目にほむら

モミジの手ふんわり宇宙掴みます

鳥取市 鈴木一弘

七十歳になって馴染みの脈がない

町ひとつ載せて航海豪華船

四捨五入ふところやつと温くなり

あきらめるすべを覚えて身が軽い

賞金を吊して犯罪人を追う

鳥取市 夏目一粹

にわか雨お前も機嫌悪いのだ

ストレスを袋に詰めて捨てている

席を立つ誰も止めてはくれぬ読み

世渡りに疲れて脳がマヒをする

任せると言われて悩みまた増える

鳥取市 中村金祥

育ジイのライセンスなら持っている

ハワイ旅行諦め入れ菌入れている

哀しみを越える喜び見つけ出す

新聞を逆さに読んで脳トレだ

眠れぬ日は一句ひねって寝るとする

鳥取市 永原昌鼓

子や孫に内緒わたしのアキレス腱

この自由亡夫がくれたプレゼント

土下座する事も仕事と言う社長

鳳仙花はじけて飛ぶは恋だろう

太古から見れば地球はゴミの山

鳥取市 西川和子

身の丈に余る誓いに身を削る

神妙に読んだ誓詞も風化する

この賞は二人の汗が認められ

その通り白いカラスにしておこう

病院の受け付け順で無い番号

鳥取市 春木圭一郎

上手とは言えぬが何か書けそうだ

とりあえずがむしやらにやる手を抜かず

ありのまま自分を出せばいいと知る

どうしても嫌いは嫌いそれでいい

動じない心へ呼吸調える

鳥取市 平尾菜美

重箱の隅悪い癖またほじり

惜しまれて逝く旅コロリ狙ってる

ポリシーを信じる父の木が育つ

いつ見ても平和であってほしい里

舞い下りる枯葉陽だまり大い好き

鳥取市 福西茶子

夫より肝もお尻も大である

幸せを逃さぬように笑う癖

ピーチクパーチク雀も孫もツバクロも

風雪も日照りも今はいとおしい

仏壇にメロン供える勝負の日

鳥取市 前田楓花

真向かいの庭が我が家の花見場所

愚痴一つ言わぬ夫の白い眉

真剣な悩み長くは続かない

時々幸せそうなふりもする

お一人を通すつもりの子が一人

鳥取市 吉田孔美子

人形みたいなおくさんでいたかった

子の起業野菜作って送る丈

書く事に夫が力を借りに来る

朝昼晩老いの力は食に有り

隠すのに関心無さを摩り替えた

鳥取市 吉田 弘子

長生きも試練別れが多過ぎる
他人だから言える言葉に棘がある
慎ましい人寝相まで慎ましい
修身を説けば野暮だと笑われそう
ツイている先祖のお蔭思いたし

倉吉市 猪川 由美子

捏造と過失の区別ビミョーです
笑顔の蔭に嫉妬の棘が見え隠れ
増税へ暗算しては脳活だ
ライバル居ぬとモチベーションが弱っちゃう
ご好意に甘えるライン難しい

倉吉市 山中 康子

ご婚約出雲大社が燃えている
人間を苦しめないでエルニーニョ
わたくしの嫌いなくせが孫にでる
賑やかなテレビを消してラジオ聞く
ぐうたらな一日でしたゴメンナサイ

米子市 後藤 宏之

つるし上げ家内子供の得意技
今日はもう余計なことは喋らない
そういえば祖母の空豆五つ星
鑑定団恥をかくからやめとする
リモコンがもの言わぬから見つからぬ

米子市 後藤 美恵子

争いを避ける手立てに引き籠る
朝夕に特売狙う脚鍛え
初仲人カンペを握り汗をかく
円卓は席次で悩む手間省く
帰りには車窓青田に変わって

米子市 竹村 紀の治

うぶ声を上げて信号青にする
ぐうたらな男に一味唐辛子
マグロより目刺しと酒が気を遣う
わたくしに地酒を送るひとり旅
取つときのジョークを先に咬まされる

米子市 中原 章子

異常気象体が悲鳴上げている
悲しみを共有できる友がいる
出発点八十路の旅を歩き出す
使わない健康器具が捨てられず
残された者に気落ちの時間ない

米子市 成田 雨奇

お互いにキャベツのように包み合う
キャベツみたいな過剰包装はイヤだの
物音に夏の気配がしはじめた
ジョークだと言われてもまだ気にかかる
そこそこで酒やめるのは難しい

米子市 見山温子

老人の溜息誰も気にしない
咳一つのぞきにくるは息子だけ
灰汁の強い春の山菜里の味
朝帰りへらへら魚拓見せに来る
年金者自産自消の暮しする

島根県 伊藤寿美

ステンドグラス^{つま}亡夫と旅したヨーロッパ
まわり道した靴に出る人間味
通り過ぎる風に言伝てしておこう
巣を守る父の背中を範とする
春の乱二円不足の果し状

松江市 小川注湖

白寿祝い昭和を生きたその元氣
いい話題乗り出して聞く皆笑顔
顔色見てどう読み取るか腹の底
追伸に心の中の涙読む
ラインダンス飛んで行きそう伸びた脚

松江市 川本 畔

許されてはじめて膝の泥払う
さよならがキラキラしてる鳥である
日だまりのお零れ貰う猫の背
塗り直す言葉にリボンかけている
約束の袋何度も裏返す

松江市 錦織禮子

ジオパーク浦富の海波静か
精巧な砂美の世界ロシア展
砂丘産ラッキョ長芋長寿食
総体で三冠の孫誉めてやる
資源ゴミ思い出詰めてそつと出し

松江市 松本知恵子

スマートに生きる断捨離思いつきり
笹だんご移り香やさし里の味
柱時計ボンゆっくり包まれる
本降りの雨と一緒に泣いている
待ちながら観音経をよんでいる

松江市 松本文子

立派な門構え雑草延びている
ささやきが洩れ竜巻きになった
自己主張出しやばらないで横を向く
ああこれが老いと言うこと哀しみや
人真似はしない何時でも自分流

松江市 三島 崧丘

がっちり^{きだめ}と今日の運命を受け止める
水平線の先にわたしの夢がある
タイムスリップして忘れ物取り返す
亡父に似て来たと鏡の苦笑い
過去みんなご破算にしてゆく余生

出雲市 伊藤 玲子

靴音も色褪せ響かなくなった

曲る背にしっかりと馴染むリユックです

大笑いストレスみんな飛んでった

わくわくと切符一枚にぎりしめ

吉日の陽に当ててやる脳のひだ

出雲市 岸 桂子

何かを捨てて何かを拾い生きている

日めくりを休ませている忙しさ

青い空生命保険満期来る

後にも目のある人で気が抜けぬ

人間ドック年に一度の不安抱く

出雲市 小白金 房子

大やしろ婚儀迎える幟旗

一滴の水から今日が動き出す

横道も許し夫婦で来た絆（六十六年）

着て脱いで老いの心を裏かえす

生き甲斐は余生たのしむ筆の跡

出雲市 多久和 敬子

からからの財布がひとり歩きする

窓開けて貧乏神を追ひ払う

平凡な幸せ玉子ご飯食べ

百均で見つけたグッズありがとう

幸せの扉開くのを待つ二人

出雲市 竹 治 ちかし

朝酒も許されて行くフルムーン

山みどり心もみどり旅に出る

何歳になつても娘は子母の胸

切り替えたモードが元に戻らない

表札を残して女独り生き

広島市 岸 本 清

老友が電話で聴かすハーモニカ

赤のれん男の口を軽くする

ちっぽけな菜園だけど生きるバネ

露天風呂みんな地蔵の顔をして

隠し事いっぱいあって惚けられぬ

竹原市 石 原 淑子

核廃絶戦争被爆国だもの

大好きよどんな君でもそのまんま

大口の寄付の先祖をもつ悲哀

そうだった今なら分かる姑心

昏睡の友の頭を手を撫でる

竹原市 岸 本 笑子

幸せを抱いて小さな咳をする

蜜蜂の忙しさには手を上げる

グリーンカーテン今年は瓜も植えました

大病院三分間だけ観てもらい

寂しいね葉が一つ減ったのも

府中市 藤岡 ヒデコ

大洲市 中居 善信

楽な方楽な方へと逃げてゐる

焦つても元に戻れぬ現在地

早乙女の頃もあったと見る棚田

蛙鳴く昔変わらぬ夜の月

そう言えば蛍が今年まだ見えぬ

宇部市 平田 実男

顔色は介護されてるほうが良い

自衛隊をはらはらさせている総理

雑草の根生野菜にも欲しい

永田町潮時過ぎた人が増え

肩の荷が元氣な秘訣かも知れぬ

東かがわ市 川崎 ひかり

欲捨てた時から坂が苦にならぬ

認知症少し手前の物忘れ

移り香にキリリと妻の眉上がる

あの日から愛はあなたに上げました

テンションがやたらと上がる付けマツゲ

松山市 古手川 光

あの世への便有りますかお中元

帰省子の道案内をするバツタ

遠くから軍歌聞えてくるような

自衛隊応募者減れば徴兵へ

靖国参拝されぬ陛下の胸の中

走るのは止めた本降りらしい雨

出来るのは飯食うことと寝る事と

腕組みへ僕には勝てる人でない

ピロリ菌も癌細胞も持つ加齢

半分は寄付してもいいジャンボくじ

西予市 黒田 茂代

楽しい誘いをかける登山帽

グリーンシャワー目眩のわけは忘れよう

ジーンズと和服わたしの二面性

帯結び始めたところドアチャイム

靴脱いで今日の疲れをオフにする

高知市 小川 てるみ

ご機嫌よう朝のドラマのご挨拶

紅引いて鏡に今日を見てもらう

真心の尺度が違う年齢差

故郷の太鼓が根っ子にある元氣

酒好きは酒で機嫌をとっておく

高知市 小澤 幸泉

踊り狂って七十路青春まだ止まず

人生の荒野サフラン咲き乱れ

恐れつつ待つ診察に生かされる

厳冬の地に教会が受け継がれ(北見教会)

寂しさも潤れて独りの米を研ぐ

唐津市 坂本蜂朗

付き添いの妻に手を振る手術室

売り言葉すぐに買われて酔いが醒め

嫌な過去だけは引き摺る物忘れ

切り株が無言の抗議新芽吹く

二枚目の護衛が目立つ貴賓席

唐津市 山口高明

奉還の秘話も見て来し二条城

政界の椅子に見えない具眼の士

法網をくぐる勉強政調費

めしの種一度に還す筈も無い

人攫う船を港に入れろだと

熊本県 岩切康子

恩師偲び庭の花差す月命日

欠席をすれば心配してくれる

一本ずつ取れば草は良く抜ける

衣類整理乾燥続く日日だから

好物の土産毒だが貰つとく

熊本市 永田俊子

研究をし過ぎると怖いブーメラン

女の子が欲しかったと言わせる風が吹く

ころも替えの言葉に余情があった昔

残り世の心に花を植えている

百年の過去静かに紡ぐひとりの世界

札幌市 小沢 淳

路郎からみれば曾孫さ不肖なり

善人のレットル背中むずがゆい

嬉しさは隠しおえずに漏れてくる

家族は幻想小津の描いたひとりばち

骨抜ききの日本にやつと自衛論

札幌市 三浦 強 一

年金日生きる勇氣が湧いてくる

物忘れ味方に付ける老いの知恵

血糖値気にしながらもうまい物

弾の下くぐる勇氣はなくていい

軸足は非戦に置いている八十路

青森県 松山 芳生

アイディアのアートたんぽを目に植える

捻子山が欠けて忘れていた火種

程程のほどのあたりで捻子を巻く

満腹にして三途の川を渡りたい

あの日から五年男の台所

黒石市 相馬 一花

女房を風除けにする空っ風

ほどほどにしないと愛想尽かされる

天涯孤独金も女も家もない

訳ありの人種が増えてきた地球

金持が麦飯を食う良き時代

弘前市 浅田隆樹

記念日も妻と特段会話無く

ボケてきた悲しいことを聞き過ぎた

辛口は酒だけでいい有情無情

目が覚めた後の眠りがこちよい

麦わら帽我がふる里の陽射し良し

弘前市 稲見則彦

桜守り開花宣言する初日

装いも新たと主張する若葉

仕方なく十円切手を貼って出す

ひと雨に雑草だけが伸びている

恙なく一日終えて栓を抜く

弘前市 岡本花匠

OB会賀寿の祝福われ米寿

夏の歌ロマンな男来て唄い

介護風呂ヘルパーさんの愛燦燦

あじさいや和風のころお裾分け

虎杖^{いんどう}を食べて古里思い出す

弘前市 今 愁 女

六月の暑さに対処高齢者

冬器具を片付けぬうち真夏日が

メディアから水分とれと伝播する

間近には老老介護ころする

梅雨晴れにこころを洗うあじさい花

弘前市 須郷井蛙

下手だけど投句欠かしたことがない

五輪まで生きよう孫も行けるかも

五線紙に載せると唄う葱坊主

女好き女偏ならみんな読め

万歩計いつもの顔が見当らぬ

弘前市 高瀬霜石

恩人と今だからこそ呼べる壁

黙祷に慣れて1分間眠る

正当化のための後追いアンケート

休戦としようじゃないか酒を注ぐ

ビリ辛がいい大根も人間も

弘前市 高橋洋子

ピンコロの夢を断ち切る紙おむつ

向かい風ちよつと尖って生きて見る

キャッチコピー暫し言葉の森で酔う

詰め放題欲深だからストレスに

他人事だけど気になる箸づかい

弘前市 福士慕情

達筆が読み易いとは限らない

蛞蝓は何を探しているのだろ

結跏趺坐スズメ・ウグイス・カッコウも

仏壇の中で談笑する家族

ちちははの眠るこの地で幕を引く

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

木津川 計

駅までの間に五軒ある歯医者

森松 まつお

そうか、五軒も歯科があるのか。で、僕も駅までの直線コース400mを歩いて数えた。歯科と整骨院が二軒ずつ。美容院に理容店が各三軒。クリニックが四軒。一番多かったのは空き店舗の七軒だった。さびれるばかりの中でこの商店街は大阪市内でまだ健在のベスト5に入っている。であつて進行する高齢化が街や商店街を蝕んでいる。周辺には整骨院がやたら出来た。重荷を背負う老人が多いだろう。まつおさんはどうぞ平安に。

家族葬でエエやろと子のマジな顔

大久保 眞澄

結婚式は親が仕切るが、葬式は子が出すのである。どういう出し方をされるか、棺桶の中の子は知る由もない。
眞澄さんは伝統的な葬儀を望んでいるのに、お子の「家族葬でええやろ」に暗然たる

思いを抱かれたのだ。それも分かる。が、眞澄さん、よく出来たお子さんですよ。僕は子らに「家族葬で」と頼んである。お人にも子供らにも負担をかけず逝きたいから。「雲の峯」という手もありさらばさらばです」(路郎)

団塊の世代が崩れ出すドミノ

宇野 幹子

来年には団塊の世代(約660万人)が全員前期高齢者になる。高齢者人口はいま3395万人だが、団塊の世代が75歳以上となる2025年には3667万人、人口の30%を抱える老人大国になる。

やがて始まる団塊の退場だが、何を道連れにするのか。彼たちが葬式を変え、団塊ジュニアが結婚式を変えた。団塊は仏教を衰弱させ、ジュニアは子を産まず、少子化を加速する。幹子さんの案じるドミノ倒しの悲劇だ。

仰げば尊し昔と同じ涙出る

永田 俊子

毎年一度「仰げば尊し」を歌うある卒業式に出る。子供の頃は涙しなかった僕だが、この歳になって涙ぐむ。何も知らなかった僕を導いてくれた「我が師の恩」は大きい。

「海行ば」を聴いても泣く。出陣学徒壮行会の歴史的映像は涙なくして見れない。「征く日近く別れ告げんと訪ねきて黙し聴きたり

きバツハのアリア」(安井郁)。幸運にも安井は還り、平和運動のリーダーになった。

分かりやすく言え大したことはない

谷口 義

やたら専門語を口にする。些末なことを重大そうに言う。そんな手合いが少なくない。

が、当節は「分かりやすく言え大したことはない」とあるのをゴマかし、言いくるめる。

僕が最も評価している永田和宏は朝日歌壇(7月6日)で次の3首を筆頭に並べた。

「わからへんなんは聞いてもわからへん平和のためにいくさに行く」と(石川智子)「戦場で君は死ぬるかちちははが選びたる集団的自衛権」(風谷蟹)「憲法を押しつけという政治家が押しつけんとする改訳改憲」(藤村誠)。長谷川權の選句もさすがだ。「赤紙が来た」と叫んで昼寝覚(東賢三郎)。「解釈の余地などあらず雲の峰」(片岡マサ)。短歌と俳句が政治と組み合う。川柳の今を問う。

弱点をさらけ出したら友が出来る

藤岡 りこ

自分を偉く立派に見せる人間は毛嫌いされるとばかり思っていたら近頃は逆で、歓呼の声を集める政治の雲行きである。りこさん、弱点だらけのつき合いが本物なのです。

〔上方芸能〕誌発行人

自選集

小島蘭幸

父の日に婚約というプレゼント
父の日という乾杯だ祝杯だ
乾杯乾杯やがて祈りになるだろう
旬ばかりいただく蛸舞う里だ
料理長は私で旬を盛ってみた

都倉求芽

同じ山同じ暑さで京の夏
涼しさも暑さも運ぶ宵囃子
都構想 八百八橋に灯がつかぬ
バリアフリー透析帰りの車椅子
ひとり膳 梅雨を楽しむ木の芽あえ

土橋 蛸

露となり北斗七星からこぼれ
あなたからもらった愛をよく磨く
寝たきりにならないようにドッコイシヨ
天地人愛燦々と燃え尽きる
極楽を探して歩く月あかり
昭和史の陰から飛んできた蛸

西出楓楽

ガス抜きに買物をした請求書
サキソフォン囁く傷が疼き出す
梅雨さ中作り笑いがまくなる
お若いと言われて馬鹿にされている
へりくつの孫の目ヂカラ信じよう

仁部四郎

夏休みではあった八月十五日
水道に水が八月十五日
大人は女だけ八月十五日
コンサイス拾った八月十五日
休日にしよう八月十五日

波多野 五楽庵

幸せな人で自分の鶴を折る
夏蛸二人のこともこれ限り
ふりむけば三百六十五夜の月
楚々とした手向けの花の美しさ
面影を忘れない風の音

林 瑞 枝

神さまのお顔太陽の沈む海
赤いルージユの別れもあつた山歩き

ふる里の空気生家にある余生

山を背に一途な恋の青春譜

ミネラルの神話に空気の良い浜辺

前 たもつ

一年中タンポポ咲いて外来種

二日程して頑張りすぎの答出る

生き方を変えて平安続く日々

肚にある言葉が口を吐いて出る

私に語ってくれる聖書読む

政 岡 未延子

立ち向かう敵とりあえず熱中症

老いの部屋互いの塩を氣遣つて

ポケットに忍ばせている今日の塩

許されて塩の情けを受けている

少しの塩と私の夏を守る水

三 宅 保 州

競走馬の名ですかいえお米の名

プライドをくすぐりに来る紳士録

余命表どおりに五年日記付け

川柳の熱中症になりました

蛇は皮残す私は句を遺す

宮 西 弥 生

冴えぬ日の自分目覚ます読書する
鉛筆を削るほくほく充実感

保証ない人生だからだまされよう

すこしだけ鬼も演じてあるがまま

待つという言葉待つて保証切れ

八 木 千 代

こんな虫さえも脱皮をしてみせる

殻くつつけて淵を這うのはやめなさいね

振りむけば我が足もとも覚束な

七年の輪廻に生まれ出た蟬よ

一切は空とや空蟬は風に

両 川 洋 々

再稼動しない脳ミソ持て余す

シリコンの胸が許せぬ偽装罪

出生前検査ベビーに失礼だ

埋もれ火の点火美人の方が良い

少子高齢だから浄土の汽車が混む

板 尾 岳 人

どんくさい黒幕だった転けて死す

のどに餅つめて黒幕逝き給い

黒幕の妻はペンツでユニクロへ

黒幕は三面鏡には映らない

自転車に乗って黒幕吉野家へ

奥田みつ子

夢の中なぜか私はいじめっ子
虹色のスカーフ似合う八十路すぎ
おしながきも夢色模様 夢ひと日
どの庭も花いっぱい 街に住む
陽が沈む明日は新たな陽が昇る

河井庸佑

二兎を追う失敗談で論される
再起期して英気養い身構える
先行きを読んで流れに身を託す
深い森へ木木の囁き聴きに行く
褒められてやる気起こして芽を伸ばす

川上大輪

反戦を歌うと声がすぐ噎れる
増税でやっぱり家族葬にする
失敗の数は誰にも負けてない
アベノミクスなんや得体のしれぬもの
例えばの話の方がややこしい

小西雄々

わが家にも健康器具は二つ三つ
大根の太くなる音 夜に響く
欲望がまだまだあつて元気です
片付けた炬燵へわが家広くなり
免許返上年はとりたくない思い

斉藤 効

ふるさとの風は驕つてなどおらぬ
手植えた子らの田んぼはすくすくと
夏の湖畔で少年は脱皮する
野苺が迎えてくれる無人駅
誘惑に決して負けぬ鬼あざみ

新家完司

空気より少し重たい同居人
キッチンも居間も同居人の領土
居眠りをしているうちに晩ごはん
今夜また頂戴します無駄な酒
訂正印あちこち捺して眠りつく

津守柳伸

はつ鱉素通りさせて目に青葉
いくたびの苦渋味わう屋台骨
紫陽花にあしたの彩を問いかける
注意書きサービスイリアに燕の巣
温泉をめざす我慢の峠越え

遠山可住

ママと居る時は子供の顔になり
横綱に勝たねば新聞騒がせず
若者の席でカタカナ食べてみる
眼科 歯科 耳鼻科と会って元氣かい
音楽はさっぱり進軍ラッパ馴れ

第28回 堺市民川柳大会

と き 9月14日(日) 12時30分 開場

ところ 堺市立堺文化会館

3階 第1講座室

(泉北高速鉄道 梅・美木多駅より徒歩3分)

宿 題 (各題2句・出句締切 13時30分)

「坂」 墨 作二郎 選

「テンポ」 工藤まさ子 選

「特技」 西山春日子 選

「とほける」 山岡富美子 選

「まとう」 矢倉 五月 選

「ゆめゆめ」 南野 勝彦 選

参加料 1000円 各題秀句に呈賞

連絡先 〒590-0141

堺市南区桃山台2-15-10

長江 時子 方

TEL 072-299-1444

主 催 堺市文化団体連絡協議会

第10回記念沖縄県川柳大会

日 時 9月26日(金) 午前10時より

会 場 豊見城市立中央公民館

課 題 (事前投句 各2句・投句のみでも可)

「花」 たまき さちこ 選

「沖縄」 上野 楽生 選

席 題 (会場で発表) 覧 のぶなが 選

要 領 便箋に2題まとめて。住所・氏名

電話番号を明記。

投句料 1000円

締 切 8月15日(当日消印有効)

投句先 〒901-0242

沖縄県豊見城市字高安78

八朔 時子 宛

電話 098-850-7453

主 催 沖縄県川柳協会

温故知新

『谷垣史好句集』より

八月のこの日もやがてパロディに
方丈記今年も蟬が鳴いている
方程式を解けば答えは雌と雄
鱒一匹 貴公子然と売れ残り
男って何だ居酒屋麻雀屋
安吾懐かし生きてることは息苦し
マネーマネーこんな日本に誰がした
忠義にはもとより無縁猫のひげ
テーブカットに五人も並ぶことはない
手袋をどこに忘れた冬の恋
たかが女と口が裂けても言えませぬ
消えそうで消えぬ私のロウソクよ
悪人は背後 死神は枕元
大根の白い裸身が眩しくて
愛すべきは女 御しがたきも女
路郎忌や視野遥かなり高野杉
電卓の哀れ粗品となりにつけり
銷夏法の一つ赤川次郎読む

水煙砂

川上大輪選

三原市 鴨田昭紀

自分からゴメンが言えるまで待とう

下味をつけて社会に送り出す

溺愛をされて歪に咲いている

神さまの機嫌に任す運不運

味のあるわたしに誰も箸つけぬ

出来栄えはまあまあですと言う自慢

大阪市 栃尾奏子

初デート無言で食べたかき氷

見ていてね必ずアゲハ蝶になる

太陽と張り合いたくて買うビキニ

ビーナスも二人並ぶとややこしい

ムクムクと不満入道雲になる

思い人砂に教えて差し上げる

池田市 上山堅坊

あいまいな僕が住みよいこの日本

どうせゴミだけど大事にしまひ込む

恥ずかしい身震いするよな勘違い

朝の雨今日の予定を書き換える

書いたってちよっと渡せぬラブレター

秒針の音を楽しむ朝の床

岡山市 藤成操江

輪がきれいきつと皆んなが温かい

苦も楽もあつて小さく今を咲く

何回も転び掴んだ自由席

あいまいを通して籠る箱の中

蟬時雨里に小さな父母の墓

靴音をなくした家の灯が寒い

松山市 栗田忠士

加減乗除四捨五入して生きている

仮面脱ぎ捨ててピエロの二十五時

非情にも運命線が切れている

人は皆寡黙な石を抱いている

老兵の歩幅を嚙う水溜まり

B面がおもしろくする回顧録

大阪市 高杉 力

戻らない人が恋しい村祭り
宛名だけ替えて出してるラブレター
窓際が空いているのにいつも奥
長話アイス溶けると切り上げる
貯めるだけ貯めて使わず逝った人
角砂糖二つ昭和を掻き混ぜる

豊橋市 藤田 千休

談合を積み重ねてる砂防ダム
拭きとった箸のルージユが喋りだす
公園のベンチを占拠する長寿
償却を終えたパーツで永らえる
晩学の足元照らす電子辞書
若作り優先席で睨まれる

岡山市 工藤 千代子

愛という脅迫情という強要
お隣りは隣りの色で咲いている
キャベツザクザク自衛権など考える
古書店に時々逢いに行く昭和
言い訳はするまい雨が止んだから
さよならが上手になった塩むすび

雲南市 菅田 かつ子

度忘れを涼しい顔で居る笑い
難しい事は苦手な丸い背な
じいちゃんの寝言いきなりおーいこら

はいハイはいさつと立てないもどかしさ
フライパン孫の帰りを待つて居り
お互いの合図時たま見間違ひ

宇部市 高山 清子

踏み込んだ話にもいる車間距離
しがらみが義理人情の裾を踏み
老い独り孤独味わう連休日
建て前に疲れボロリと出る本音
つまり段差にあった年齢の壁

良い老後をと年金減らす永田町

三田市 上田 ひとみ

抱きしめてあげようたくさん泣いたね
待っているから母さんはその角で
涙さえ本当のこと知らなくて
スニーカー走りたくなる風になる
このあたり思い出たんと埋めてある
お名前を教えてくれるかわいい子

竹原市 若年 幸子

瞳が合つてニッコリされたでしょう
ドキドキが続き電車を乗りちがえ
虫喰いの私を友の掌が囲む
御破算は何時もプラスの私です
ヤンキーをやめて経読む過疎の寺
真夏日の笑顔集めるカキ氷

横浜 川 島 良 子

大阪府 神 野 千恵子

裁判傍聴まるでドラマを見るように
外見で判断できぬ善と悪

記念日を大事にしたい忘れたい
アナと雪孫と共有した時間
ありのまま自分演じる他はない

横浜 長 島 亜希子

元気だな隣家で怒鳴り声がする

どうでも良い事はしっかり覚えてる

夫の後ろ歩いた私先を行く

人生いろいろ孫の行く末案じない

加齢による治りませんと若い女医

愛知県 樺 嶺 志

梅雨に入りサツキ赤白妻想う

癌進行エイとばかりに振り払う

良き医者に気力感ずと励まされ

五度告知すべて越えたと言ってみる

背へ薬孫の手使うもどかしさ

京都市 清 水 英 旺

心の隅に押し殺してる罪意識

春の匂い土に還るのもいいものだ

風の吹くままに生きよと風見鶏

人間の皮を被って跋扈する

天平のエロスの匂伎芸天

テレビにも猫にもぶつぶつ言っている
つぶやいてみるとどうでもいい話

こだわりを捨てると羽が生えてくる
言い訳の引き出しばかり増えていく
お友達ばかりではしゃぐ五輪の輪

大阪府 高 木 道 子

海の日も山の日もあるスケジュール

失せ物を探しあぐねた今日の鬱

生き恥も晒して畳む人生譜

風向きが変わらんうちにゴールイン

一芸と言うべし老鷲フォルティッシモ

大阪市 太 田 としお

出来る男は言い訳なんかしませんよ

長男は試作品だと言いつせ

安全と安心にすぐ騙される

反対の反対だけはしたくない

手を合わす不平不満が消え失せる

大阪市 田 中 ゆみ子

雨三日きつと明日の朝は虹

本番を待つ掌の人を呑み

お若いと言われ歳取ったと合点

平凡でなによりだけど退屈だ

ダイエットに夢中子どもは生みません

大阪市 寺本 実

風向きが変わる時まで待つている

色っぽい挨拶受けて抓られる

リベンジを忘れて今は好々爺

好きな事している時は静かです

全巻が揃いむなしいコレクション

大阪市 藤田 武人

たまにするオシヤレに妻が疑惑の目

にらめっこ能面ウフと微笑んだ

窓越しに語り合おうか雨蛙

結論を急ぎ過ぎたか蟻地獄

疑問符が頭の上に並んでる

大阪市 若本 安代

樟若葉清く正しく初夏告げる

乗り越えてそして覚えた思いやり

くり返し友の励ます手紙読む

煽てられ有頂天です踊ります

好奇心女同士で昼のれん

堺市 梅木 澄空

裏方に徹した友は輝けり

見守隊後期高齢輝いて

通学路年長さんに習え右

母の日にカッコいい杖くれたけど

ついふらり年金下がり縄のれん

貝塚市 吉道 あかね

お互いに御籠り堂を持つ平和

平凡に生きて真ん中辺が好き

人生の午後はゆっくり砂時計

リハビリの手が追いかけているプリン

踊る阿呆になるつもりです予約する

河内長野市 大島 友子

性格も寝相も旦那似のペット

ポチだけが聞いてくれてる僕のグチ

何でも人のせいにするのは父譲り

何気ない仕草に母のDNA

嫌だった親の行く道僕も行く

河内長野市 藤塚 克三

悪友と呑むと余生も花盛り

入退院病気手なずけ生きてやる

鋭いと惚けてる人に言われても

どっち取る選択できる時と金

どの辺が惚けてきたのか分からへん

河内長野市 穂口 正子

丸裸何を隠そう手術台

ゲームの森子らがさ迷い出てこない

何回も決心反古で添うている

ぎゅうぎゅうと米研ぐ今は停戦中

母の味なんと巧みな匙加減

岸和田市 中岡香代

富田林市 中村 惠

真夏日が続きひまわり疲労気味

穏やかな母に変身参観日

感想を書くだけに読む夏休み

尺で縫う母の浴衣が懐かしい

最高の字画だったが職がない

四條畷市 西川 ひろし

淡竹採り仲間外れを探す声

ハンセン病生きぬくことがたたいと

老人は介護税だけ払わされ

我が道は評価受けずも吾進む

晶子さんあなたの詩が浮上の世

豊中市 荒木 郁子

赤い糸繕いながら持ちこたえ

角がとれ風状態の老夫婦

つまずいた段差に加齢思い知る

手渡しの回覧板が会話する

生き生きと一人天下の未亡人

豊中市 貝塚 正子

母さんもしっかりしてとネジ巻かれ

こだわりがあるから背筋のびている

気心が知れて深入りできぬ仲

私でもマイク替えれば声美人

猫脱帽飼主様の七変化

成る程と性格だけを褒められる

不覚にも洩らさず犬にキャッチされ

親の見栄纏わせた娘の晴れ舞台

スタミナをつけて逆転狙ってる

帰り際心を軽くする言葉

寝屋川市 岡本 勲

おばちゃんに力負けしておまけする

古女房まだかくしてるな底力

悪口は補聴器なしでよく聞こえ

おしゃべりとスイーツ女はよみがえる

聞かぬふりしていれば我が家は平和です

羽曳野市 藤原 大子

若いとの錯覚があり元気です

相槌を打ってもらって喋りすぎ

良く食べて良く眠るのに太らない

冷静を装う文字がふるえてる

躊躇したボールがコースはずれてく

和歌山市 磯部 義雄

心配はするがお金は出さぬ親

呑むほどにしつこく迫るコップ酒

散水の手間が省けた俄雨

質流れ買った僕のものだった

ロボットの手足となっている社員

和歌山市 北原 昭枝

砂に書く予定が波に消えてゆく
本物が目の前にあるガラス越し
懸命に咲いて短い花のいろ
暗かった心の色をリサイクル
一生は長し短し女の譜

和歌山市 平田 元三

夏祭り子等は浴衣と背比べ
味わっているかジョッキの並べっこ
古新聞畳上げする手を止める
無事だったらしい白紙の日記帳
裏切りがあるから期待などしない

岩出市 村中 悦男

思い込み道が自然と曲り出す
楽しかった事だけ残し過去にする
楽しみの網は時々破られる
守りたいでも守れない不摂生
待ちわびる偶数月のおそいこと

紀の川市 楠原 富香

飛ぶことを知らぬ我が家の割烹着
業績を引き継ぐ肩の荷が重い
リハビリの神は一途を見逃さず
よく笑う妻は我が家の青い鳥
財布の紐ゆるめ未来の夢を買う

神戸市 木村 忠義

剪定を自力でやった満足度
幸せの鍵は自分が持っていた
雑然とした僕の部屋僕は好き
目も口もすぐ閉じられるけど耳は
わが道を鈍感力で生きていく

神戸市 徳留 節

抗った父の轍をなぞってる
お月様欠けていくのに笑ってる
次の番だれやかれやと通夜の席
高笑いしてるが低い志
葉桜を食べる毛虫は俺に似て

神戸市 山根 弘子

すれ違う亡母似の顔に立ち止まる
七坂を越えて学んだ一行詩
ウインドーチラリ横目で通り抜け
あちこちと聞いて落ち込む遠い耳
ブレーカーふっ飛ぶほどの恋心

小野市 藤原 泰宏

階段をゆっくり上がる嫌なとき
ときめきが動悸に変わる老いの恋
青春の妻の写真で花が咲き
物整理人の物なら直ぐほれる
叱ったら犬もしばらくおとなしい

加西市 中川 修

三田市 辻 開子

おらが町一人暮らしと犬が増え
古畳慶事もなくて替えられず
浴室にカメラの欲しい老い二人
オレよりも妻が張り切る通院日
病院の待合室は知らん振り

篠山市 佐々木 勇

MRI探せ探すなその本音
財布から一円玉が零れそう
私のサブリメントは妻ですが
そわそわとそこはお好きになさいませ
じわじわと追いつめられていく預金

篠山市 稗 島 照 代

手作りのカボチャスープに元気づく
石垣の名所を誇る城下町
暖かい布団に抱かれ一句詠む
富士山は春夏秋冬お洒落好き
お喋りでストレスが消え医者要らず

三田市 今 西 廣 子

貧富の差知らぬ野良猫威張ってる
今日のこと泣いて笑って棚の上
ジャジャ馬がボールを蹴ってなでしこに
リモコンと財布は妻が持っている
ゴミ置場ネコもカラスも感謝デー

もし私思えば楽に介護でき
好きかってわれはわれよと今日を生き
菜園に足を運んで愛を入れ
プランター近所と競う夏野菜
介護する睡眠不足が愚痴となる

南あわじ市 萩 原 狸 月

免許証返してバスの時刻表
学士さまばかり土掘る人がない
夏バテもうなぎで治るうちはよい
もう一軒酒税納めに行くハシゴ
正直な公務員には袖がない

鳥取県 下 田 茂 登 子

庭の木々夫は逝つても芽を吹いた
孫の卒業楽しみ乍ら逝つた夫
二人で食べた味は見えない苦い味
納骨がなかなか出来ぬ胸の中
一人身になって悲しい夜の風

鳥取市 坂 本 とも 湖

高齢者の年金べらしもうイヤだ
灼熱の恋も三児の母となり
出来るならピンピンコロリ願います
コップ酒過ぎて独居の老父やばい
透き通る私の肌を陽が妬む

鳥取市 高原 かおる

辛抱の花に水やり肥料やり
ごみ捨てに出てますますの長ばなし
逢いにゆく靴もバッグも新しい
新築がやっぱり好きかツバメの巣
立て板にぶつけた愚痴も老いている

鳥取市 田中 天翔

その内にスマホに心覗かれる
つまり良いのよアナタまだ若い
バレバレだ事実を語る血糖値
住む世界違ってきたか沙汰が無い
生きているとめんどくさいがさりとて

鳥取市 山下 凱柳

バレバレの御託を述べて恥晒す
これこの通り土下座するから許してよ
恋かしら何を寝言を言ってるの
誹謗中傷狭い世間に泣かされる
好きなようにしてと言われて怖じ気付く

倉吉市 岡崎 美知江

短いが心のこもるお説教
じわじわとせめられやとと本音出る
ほめられて一途に通う趣味の会
月あかりどなたも美人見える夜
恥かいてやと人間らしくなる

米子市 永井 三津子

せつせつせ女忘れずバックする
思考まで奪われやとと齒科通い
しかとする妻の態度に胸騒ぎ
分かるのかわからぬまんま介護する
介護しつ後の吾が身を重ね見る

松江市 武島 千代枝

孫ほどの人に訓練されている
齒科の椅子埋めて削って工事場だ
粽巻く指はすっかり覚えてた
回りにも川柳好きが居て楽し
引き算の好きな財布を持ち歩き

岡山県 池田 たか子

ぐうたらも必死もわたし褒めてやる
失敗の肩に無言の手が温い
晩学の常備薬です好奇心
いつ迄のハンドルフと医者めぐり
三度飲む薬は忘れ食べる飯

岡山県 田中 恵

ほどほどの夢を描いている南瓜
引き合いに過去の話を持って来る
自己流で踊った夫の手のひらで
一輪の花が居場所を主張する
鬼の面などは要らない地でいける

岡山市 永見 心咲

松山市 神野 きつこ

愛される様に裏側まで磨く
自信など無いのに尻尾飾り立て
コンバクト閉じて懐古を遠ざける
立ち向う風と添う風選り分けて
現在地見れば正解だった縁

瀬戸内市 東 横 ますみ

姫の指棘の痛さをまだ知らぬ
夫捨てて余白優雅に舞ってます
神の加護受けてる蟻もわたくしも
七十の背中伸ばして風を選ぶ
面いくつ剥けば本音に辿り着く

竹原市 土井 輝 恵

鬼で居る決めた時から楽になる
シャッターチャンスだけ私にカメラ無い
喜寿旅行浮いた話の二つ三つ
愚痴呑んでのんで頑固になりました
勝ち負けは柩に入る時決まる

山口市 中前 幸子

蛇口から漏れる噂は信じない
消えないうちに夢を冷凍しています
一切空ゆっくり私小説を書く
華麗に踊る後ろめたさのある嘘と
まほろばの森に棲みつつかたつむり

朝ドラを見るとエンジンかかり出す
ミニトマトわが子のように水をやる
内定をやつと貰った梅雨の入り
雨の日は花柄を着て出かけます
来年は家族それぞれ違う道

大洲市 花岡 順子

土砂降りの雨しがらみの中にいる
鉛筆を倒し迷いを始末する
古里は何でも許す人の好き
宴会の中で本音を聞いている
風切って歩く涙は流さない

北九州市 岡田 幸生

生真面目な気質で肩凝りがひどい
忘れてと言われた事は忘れない
恋人を探す気分で古本屋
肩書きがとれて手の平返される
手の平に乗るしあわせで満ち足りる

佐賀県 真島 久美子

ポケットの底妹にあげる飴
今が好きなだけの花の色
手に入れたもの手放したものも愛
三列目あたりで深呼吸をする
揺れそうになったら開く本がある

シドニー 坂 上のり子

年寄ればちゃらんぽらんでいいじゃない
仲良しの友だったはずすきま風

秋深し冷気にちちこまる背筋

ファイブスターの居心地悪いシャンデリア

ダイアナの最後のホテルで飲むワイン

つくば市 嶋 本 喬

雑草といえど可憐な花もある

ホームズもボアロも古きよき時代

戦争を知らぬ総理の武者震い

減ったなあ家族ぐるみの墓参り

東京都 井 上 つよし

九条で尖閣諸島守れるか

八十女に圧倒されるクラス会

凡才が秀才になる目出度い日

ケータイの通話記録で足が付き

東京都 大 竹 一 良

いろいろとばかりして使う都合良さ

朝顔とゴーヤのコラボ良く似合い

貯金箱開ける楽しみ指の先

親友とくだけて話す酒の味

東京都 川 本 真理子

やせこけたピラニアがいる胸のうち

風抜ける時折少女の笑い声

修正が今なら効くと風に問う

舞い戻る場面はいつも草いきれ

東京都 高 岡 弥 生

人生はやるかやらぬかそれだけよ

父母のいる子供時代に戻れたら

身の回り感謝することあふれてる

試験前始まりいつも部屋掃除

熱海市 三 谷 圭 角

占いが良いと言う日に転けちゃった

待ち時間作句のお蔭苦にならず

努力して報われぬ人タンと居る

意に添わぬ仕事で一生過ぎちゃった

佐渡市 高 野 不 二

女房を詠んだ句をまた見つけれ

買ったままつい手を通さない五割引

休刊日仕事はじめが見つからず

半分しか聞こえないけど返事する

静岡市 渡 辺 芳 子

どぶ川がにぎやかになる親子ガモ

昔居たデンデン虫は今どこに

健康は誰かを思い生きること

私にと折った般若の面の相

長岡京市 日 置 みどり

一日を大切にするむつかしさ

儂げな水琴窟のひとしらべ

スベアだと気づき思いは砕け散る

衣食住足りてモラルが甦る

大阪府 小 栢 こずえ

村の灯を水田に浮べ蛙鳴く
嫁ぐ娘へエールのように風薫る
好きな事してると不思議疲れない
目立たない後かたづけは老いの役

大阪府 畑 中 節 子

禾の芽合えほんのり淡い母の味
気の晴れる老いの良葉無駄話
朝もやに紫陽花の花浮いて見え
にわか雨ドラ叩く如車庫の屋根

大阪市 浅 井 公 平

市内バスこれも小さな旅のうち
路地裏の景色重なる我が故郷
健康と句のため散歩欠かせない
鶴ほどはとも出来ない恩返し

大阪市 魚 住 順 子

一輪の花に我が家の平和みた
旅に出て知った我が家のこち良さ
使い方次第で長くなる時間
テレビからラジオに変えて余裕出る

大阪市 内 田 志津子

舗装した田舎の道は味けない
多忙です歩きスマホ電車スマホ
休肝日そつとグラスに水入れる
年月がみんな流してくれました

大阪市 宇 都 満知子

身にまとう色に元気を貰う日も
思いやり夫婦喧嘩に見え隠れ
多くても少なすぎても困る梅雨
当り前経済よりも命です

大阪市 梅 里 南 天

魂は丸いものだと思つてた
君が想うよりクスリが好きとアスカ君
庭先で老母咳込む錢葵
七日で七十年の家が消え

大阪市 大 治 重 信

真つ直ぐで人畜無害出世せず
先を行く犬が引つ張る老いの道
鯉鈍屋でめし食いながら蚊を叩く
寝転んで夢の続きを追つており

大阪市 柴 本 ばつは

ローカルな空港潮の香が満ちる
木洩れ日のわずかにとどく木の根道
無関心よそおいながら義理の仲
覚えてて下さったのねあの時よ

大阪市 西 川 冷 子

傘マーク毎日出てて降らぬ梅雨
加齢にて検診の綱引つ掛る
栗の里花盛りには泣かされる
老人会葉談義は盛り上がる

大阪市 橋本典子

散り際に花は個性を主張する
失敗を笑いに変える友が好き
古伊万里の赤絵の杯で月を呑む
母は待つ子供に返り母は待つ

大阪市 前川善之

きれいなバラも刺のあるを忘れがち
僕のくせ良いも悪いもほっというて
早起きは心のネジを締めなおす
合わぬのに合わそうとする貝合せ

大阪市 松田聰

孫のこと話すと声が若返る
幸せのまん中にいて気づかない
諦めず頑張りすぎず上を向く
つばめの子いつのまにやら飛んでいた

大阪市 吉田知之

エスカレーター誰も乗らなくても動き
拾円の国債今も記念にと

辻褃の合わぬ夢見てくたびれる
杖突くとつまずきそうで止めておく

堺市 近藤治子

世間体気にして自分見失う

少年の蹴ったボールが虹に乗る
受け流し良いとこだけを残します

蹴ったけど大きなチャンスだったかも

堺市 羽田野洋介

まだいけるときめくものがあるうちは
悩んだら両手拡げて深呼吸
一本道迷うことなどないのだが
住み慣れた場所が心のふるさとだ

堺市 大和峯二

悲しみをいくつも越えたやさしい目
あの時の苦勞に耐えて今がある
人生を捨て身で生きて花咲かす
落ち込んだ心に響く親の声

泉大津市 助川和美

川柳が狭い心を開けてくれ
ラブレターポストの前でポケットに
華やかな気分になれる花日傘
作句行き詰まり鉛筆また削る

貝塚市 石田ひろ子

ネット社会だんだん世間狭くする
東北の覇気を頂くさくらんぼ
イヤリング付けると脳が微笑んだ
バーゲンで体型に合う服が無い

河内長野市 辻村ヒロ

ヒタヒタと押し寄せて来た消費税
耳もとで愚痴聞かされる家の猫

休肝日あなたのためと釘をさす
句のヒントおしゃべりしては集めてる

河内長野市 渡邊 修
持ちネタより枕がうけて高座湧く

酔い頃に高価な品をねだる妻
子供には鬼に見えたが今仏
核カード見せては脅す北の国

高槻市 三谷 黒

もう歳や言つて怠ける悪い癖
幸せだ毎日三度食べられる
父の日は本物ビール呑める日だ
妻出掛け一日誰とも話さない

豊中市 荒巻 夢

いさかいの芽を持つ人の性哀し
ブラウスのピンクの薔薇で弾み出す
スタッフの若者に会うデイスービス
自慢話聞き役になりボランティア

豊中市 源田 啓生

夏近くビールあるから生きられる
目覚めたら口の体操アイウエオ
寝ながらのラジオ体操天を突く
制御不能身体各部が訴える

寝屋川市 荒川 鈍甲

病む床でしみじみ外のさんざめき
目刺しは海を私も海を恋しがる
触られて花は宇宙をかけめぐる
ブツブツと念仏を言う蝦蟇と居る

羽曳野市 安本 美喜
鱧の皮魚そうめんのご案内
ストレスはありませんかとロボットに
挨拶のし過ぎで首が疲れます
耳にタコ食塩控えなさいませ

羽曳野市 磯本 洋一

増税は民のためだと議員連
何となく夫婦になつて古稀の今
二日酔朝から鏡に叱られて
選挙前やつて見せましたのに

東大阪市 織田 登子

すべり込み医療費上がらないうちに
下戸の人どんどん食べて元をとり
一品を持ちより酒とぐちの花
プラトニック心はいつも春日和

枚方市 河田 洋子

欲捨てて断捨離をする年になり
ガラクタに部屋を取られて狭く住み
雑草の可愛い花は刈らないで
食べ残し出来ずタッパ―持ち歩く

枚方市 坂本 ミヨノ

旬の道はだんだん深く迷路なり
旅の宿メーク落として笑いあう
冷蔵庫半額シールみんな詰め
旬を食べる四季折々を楽しみに

戦争に行かない人が策を練る

枚方市 松原 保

沙羅ちゃんは何意のジャンプ大学へ

選挙戦やるやるやるをいつやるの

いいよなあこんな予報でメシが食え

藤井寺市 田付 絹枝

旅先の姿見亡母の影写す

弥次喜多も腰を下ろしたおかげ町

神苑に未だ未だ響く槌の音

神苑に差す木洩れ日が胸を打つ

箕面市 寺井 柳童

歴史遺産学童疎開語り継ぐ

長電話オレオレ詐欺を黙らせる

長すぎる休暇も困る孫の守り

遠まわりしても立寄る道の駅

箕面市 村田 恵子

様々の事情を乗せて電車行く

子らが来て家が大きく呼吸する

足の爪自分で切れた大丈夫

古日記めくって私取りもどす

八尾市 田邊 浩三

禁煙を勧める親父は迎え酒

ストレスが何か判らず悩んでる

外来魚琵琶湖の鮒が減ってゆく

白魚が今は牛蒡の妻の指

朗報を持っております拉致家族

八尾市 前田 紀雄

パソコンと向き合い脳の錯落す

人事を尽くさず天罰待っている

喧喧譁譁日本中トルストイ

神戸市 井上 忠貞

子の笑顔未来の幸を語ってる

良い人と出会い重ねて今がある

八十路でも夢中になれるものがある

振り向けば幾つもあった分かれ道

神戸市 玄 番 美恵子

軽い嘘少し混ぜつつ母を見る

友庇うかわい嘘を許してる

ぞろぞろと朝のホームは戦の顔

婚活に賭けたピンクの勝負服

神戸市 輿 水 弘

こつこつと青で渡って残る悔い

妻介護今日も百点目指してる

胸たたき引き受けてから不整脈

いそいそと出かける妻の好奇心

神戸市 富 永 恭子

鮎とたで引き立てあつて初夏香る

介護食揃ってはつなく命の灯

待っている君がスイッチいれるのを

ギクシヤクの仲を取りもつ菓子ひとつ

神戸市 能勢利子

新幹線隣空いてるうちに飯
新幹線富士山見えた旅は吉
新幹線後ろの会話嫁の愚痴
東京の消印ついて届けます

川西市 日野岡和之

噛み分けて酸いも甘いも年の功
茶柱が立ち泳ぎする楽茶碗
不器用を旗印にする人間味
お隣りと仲良くしたい御裾分け

神戸市 松井文香

夢つなぐ運命線にある未来
ときめきを求めて励む若づくり
よろこばせごっこ心の和音から
半世紀抹茶和菓子の夫婦仲

篠山市 石田久子

話し合い優しい人と知りました
親と子の絆しみじみ感じて
床ずれをさせぬ介護に隙がない
母の日に花特別の匂いあり

加東市 安達厚

趣味のない男の老後気にかかる
何度でも我が家の料理なら食べる
好きな蕎麦に疲れ感じる齢になり
サボテンの花つてほんに美しい

篠山市 北澤稠民

失敗のあとから浮ぶ凄いい知恵
わがままに馴れて贅沢愚痴となる
縄のれん馴染みの顔が奥にいる
老いたとて恋のかけらはいまでもある

加東市 岩本美緒子

膝と腰じんわり効いたサロンパス
八十五まですんなり歳も今重い
大台の卒寿の前の敬老会
喜びも不安も交互日の暮し

篠山市 永井かほる

風呂上りウチワの風で酔い醒まし
じわじわと押し寄せ故障する齢に
三歳児いい顔つくり喜ばす
薬草が自然群生場所せまし

川西市 大坪一徳

キレ性のスイッチ入る事が増え
怒らずに泣いて諫める母に負け
勝手にし母の一言決め台詞
単身赴任告げる夫の頬ゆるむ

篠山市 藤井美智子

顔が効く友の助言で救われる
新入りでちょっと控えた顔で居る
なぜかしら頑張れる気になった朝
微笑みの変らぬ亡夫がいつも居る

三田市 足立 つな子

逆境を忘れたふりで五十年
五連休帰国ラッシュを見て過ごす
宴会も無芸大食困り者
似合ってる若く見えると帽子買う

三田市 木村 マユミ

今もなお後姿にときめきを
出会いです笑って学べる良い仲間
一人旅自分さがしの旅に出る
初夏の味そら豆ふくみ美酒すすむ

三田市 多田 雅尚

ライバルと思ってたのは自分だけ
留守電に伝言残す勇気無く
世話好きのご近所も無くまだ独り
スマホ族歩く姿は金次郎

三田市 野口 晶子

それなりの綺麗にはする整形医
きっかけは間違い電話甘い声
糠味噌をこねる背と味母ゆずり
前歩く妻が輝く趣味の会

宝塚市 井上 風花

蛇皮の財布を買って福を待つ
眼鏡かけ眼鏡を探す年になり
紫陽花に雨の喝采鳴りやまず
紫陽花が咲けば紫陽花好きになり

宝塚市 丸山 孔一

生きてるぞ言わんばかりに軒かく
妻寝込みさあ夕食は何にする
言いました聞いてないとの繰り返し
真っ直ぐな道がこの世に見当らぬ

西宮市 株元 玲子

ときめき感そつと抱いて遊園地
道草もおつなものだと味をしめ
これからはお互いさまのご挨拶
始めるより勇気いる止める決意

三木市 山口 久子

歩行数歩いてるうち数忘れ
砂利道で歩行訓練してみたい
車窓から迫るあじさいおつなもの
水無月は茶つみと田植忙しい

奈良県 安福 和夫

そら無理と言われ発奮やつたるで
狙う的徐々に大きく見えてくる
まず努力後のひらめき神まかせ
意地っ張り無理をするのが自然体

奈良県 谷川 憲

肝心なときまた顔を出す持病
相続した過疎地の空き家持て余す
強運の占いが出た付けばくろ
四葉マーク貼り車間距離空けられる

奈良市 尾畑 なを江

このごろは前掛けさえもあつ苦し
カッコーが啼いて作付け急がせる
時々自分を褒めて家事こなす
夢さめて亡母のにおいのする枕

奈良市 前田 弘恵

ちび鉛筆ナイフで削るなつかしさ
満腹と言いつ別腹待っている
華やいだ宴のあとの孤独感
思わずにテレビに向かい野次とばす

和歌山県 森下 よりこ

リフレッシュさせてくれます雨の音
撥るように風がカーテン通り抜け
さくらんぼの代わりになれぬゆすらうめ
飽きるほど作った今年苺ジャム

田辺市 大峠 可動

炎天下雲の散歩と僕の歩と
点線を引くと戦の弾になり
僕の脳春夏秋冬万華鏡
シルバーシート昔話を置いて行き

田辺市 小川 イセ

日日好日母の笑顔を真ん中に
愛の彩元に戻せば見えてくる
仏様拜んで今日が動き出す
色即是空無心になれるありがたさ

鳥取県 飯野 菖子

冬眠で甘えた体立て直す
甘い夢追って生きてた人生路
漢字まで脳から消えて出てこない
親馬鹿で卒業来る日まで遠い

鳥取県 田口 清帆

食卓に主婦ときめかす盛り合せ
粗食でも家族そろって美味しくね
宇宙旅行お金持から順に行く
風よりも静かなことば手話の指

鳥取市 大前 安子

背は丸む気付いて伸ばす一日よ
過去も味今が良ければいいじゃない
古里の庭になごりの花が咲く
履く人のない靴へ足そつと入れ

鳥取市 近藤 秋星

転勤は君の人生深くする
いつも笑顔あの娘はきつと太陽だ
真面目が一番例え出世はしなくても
古里に愛称で呼ぶ人が減り

鳥取市 谷口 回春子

愚痴ひとつ溢さぬ亭主仏様
聞き耳を立てて軒をかいて寝る
磨いても切れるはずない付け焼刃
我慢する痛み忘れる孫笑顔

鳥取市 津村 律子

今夜こそ月下美人を待つ正座
初夏の風麦わら帽子飛ばす孫
古稀なのに誕生祝いくれる叔母
私より先に行ったら恨みます

倉吉市 鈴木 たけ代

泣きばくろ笑い飛ばして運変える
我儘は聞く耳持たぬと爺が言う
羽休め飛び立つチャンスを狙ってる
節くれの指で苦楽を共にする

倉吉市 田中 紀美恵

雨の日はひとときわ赤く紅をひく
時々海に向かつてバカヤロー
月下美人今か今かと寝ずに待つ
風邪の菌はしゃいでないで飛んで行け

倉吉市 中村 毅

梅雨入りに心も部屋も湿りがち
梅雨晴れ間物干し竿が悲鳴あげ
8バーを僕の財布が嫌います
何もせず棚ぼたを待つ怠け者

倉吉市 堀 かずこ

ほとんどが無駄な物でも捨てがたい
ちびちびと酒飲む背がさみしそう
我が人生つまずきころぶでも歩く
につこりと笑顔にまざるものはなし

境港市 中井 虎尾

色彩に紫陽花笑う雨ん中
一人酒これで適量マイタンク
わかるけど脳にひかかり出ぬ答
いった友睦の底の武勇伝

米子市 生田 和之

買い過ぎた二円切手が欠伸する
折節に昭和演歌を保存する
春嵐ゴミだけ残し吹き抜ける
お互いに仲間の呆けに喝を入れ

米子市 池岡 たけし

杖などはまだいらないと嘯いて
当りクジ広がる顔を夢で分け
二枚目に成り切れなくて落ち探す
八十路坂歯だけ自慢の親譲り

米子市 小野 鶴子

銘はない骨董品の仲間入り
オー若い骨だと褒めるレントゲン
ハの字に脱ぎ捨てた靴悔しがる
脱皮する心の汚れ置いたまま

米子市 田村 周子

婿はせっかち嫁はゆっくりいいコンビ
八十路すぎ入れ歯がないのが自慢です
五月晴れ心の穴を風が吹く
物忘れしないつもりがやっていた

米子市 野川 宣子

注いで注がれて酒が取り成す重い口

まず乾杯距離を縮める酒がいる

杖一本味方につけて遊ぶ足

ゆつくりと聞けば合点出来ること

米子市 湯浅 俊久

テーブルヘジョークも載せて食事会

いくつかの悩みがあつて曲がる松

七転び次も転ぶと予想する

晴れた日に思い出します墓参り

松江市 相見 柳歩

魂もアンパンマンも永遠に

華になり茎の時代を懐かしむ

雨宿り恋の雫が舞い降りる

無駄なもの拾い集めて詩をつくる

松江市 中筋 弘充

黙祷が終わると飲めるクラス会

献血にもう行きません歳だもの

秒針は電池切れ知るためにある

明日から主治医の注意守ります

松江市 山根 邦代

すんなりと心を受けるありがとう

名も知らぬ草もかわいい花をつけ

憎んでも自分が惨めになるばかり

一日を無駄にするなど言われても

出雲市 黒目 英男

アイデアがすべて万事はこれからだ

年の功すべて肥しに生きてきた

新聞のコラムを読んで知恵とする

油つぐかちかち頭柔らかに

雲南市 松本 昌

白妙の衣我が家はつなぎ干す

幾たびか危機一髪の免許証

孤独感零細企業の夏の陣

草餅を知らぬ世代はカップメン

米子市 加藤 正二

物忘れ自慢ができる歳になる

何もかも忘れて一人旅がよい

万歩計老いの動きを監視する

独り者テレビ相手に文句言う

安来市 原 煩惱児

認知症の妻と三世語り合う

燕飛ぶ老いも氣力を漲らせ

老いの知恵クールビスよとバチンコに

プレゼント着いたと孫が子供の日

岡山市 丹下 凱夫

うっかりとぼんやりを使い分けている

山川空みな青かった原風景

緑陰にかくしておいた発泡酒

夕焼けの山を忘れているカラス

岡山市 前田 恵美子

目覚しに叱られてます寝坊さん
下手でいい続けていたら日も当たる
下手だつて好きな事には耐えられる
意外ですエプロンするとやる気出る

玉野市 片岡 富子

健診日近づく気配胃が痛む
ちよつと待て我慢話に割り込まれ
もう夏とセミが準備に慌てている
石橋を叩いてみたが後退り

尾道市 日谷 寛

哀しみを大事だいに女鬼
土壇場に力見せつけ女鬼
恋一途愛ひとすじに女鬼
その恋は昔のことと女鬼

竹原市 六田 半徳

山彦を聞きに訪ねる里の山
多寡言わず年金あつて生かされる
照れ隠し舌出し笑う悪いくせ
慈雨が降る地球元気になるように

防府市 坂本 加代

ため息は独りの時にしてほしい
念仏は覚えなくても口に出る
下手なこと知っていますが歌わねば
突っ走り止めてそろそろ振り返る

山口市 増田 めだか

旅好きに旅番組がおいでする
立ち話ししてる間もない共稼ぎ
曲り角明日を夢見てトラパーユ
内緒話洩れていました春風に

今治市 渡邊 伊津志

糞虫の夢から覚めて次の夢
大空の高さへ惑う千切れ雲
いろいろな人格僕を研ぎ上げろ
腹割れば温泉卵のような人

高知市 三谷 待太郎

欲や色ひよいと顔出す呆けた君
ヒヨッ子らジジババ通る済まんなあ
黄昏れたそんなあんたともう少し
在宅を勧められたとボチに言う

福岡県 本田 さくら

期限切れ捨ててるお菓子の愚痴をきく
気が合わぬ帽子深々通りすぎ
つばめ五羽口パク母の餌おそい
桃太郎を二歳の孫が語る夕

北九州市 小松 紀子

アリガトウは魔法の言葉気が和む
ごめんネと素直に言える年の功
減らず口たたいて孫に嫌われる
ちゃっかりはナシうっかりが多すぎる

佐賀市 清水園實

メモ帳をあちこちさがす齡になり

囲碁打って鼻唄が出る白の友

帰省にも変化驚く家も絶え

八十で連れ合いの意味かみ締める

唐津市 岩崎 實

免許更新九十歳も仲間入り

新免許写真の顔は老いました

乗らないが車はみがくだけにする

南無阿弥陀やがてその日はくるだろう

唐津市 北村 松風

厨にて鼻唄きこゆ日曜日

歓迎の孫が帰ると鍼をうつ

肩組んでノレン出たまで憶えてる

セメントで固めて蛭居なくなり

唐津市 吉富 節子

経験をチャンスに活かし壁を越え

友に電話塞ぐ蓋開け元氣入れ

振り返りや苦勞の多き人生よ

知らぬまに年功序列うすれゆく

熊本市 杉野 羅天

無駄と知り無駄を続ける芸達者

若い娘が町へ子のいない村へと

傷心をラテンのリズム癒やしてる

時まさにゴム手袋で握る寿司

山鹿市 前田 幸子

消費税がまんほど膳侘びし

上京で土のない道疲れます

デイサービス老いの坂道楽しく通る

デイサービス運動会で若返り

山鹿市 三谷 たん吉

日本にはいらない殺しのライセンス

無理やりに引き金引かせりや氣が狂う

自衛権放つといてよし子作りを

テレビ試食うまあ おいひいオレ吐きけ

山鹿市 柳田 白沙

一番の防衛政策我が家庭

アベノミクスフルーティーかと思いきや

順番はハトやスズメの次でいい

知恵熱と四十路過ぎても思ってる

札幌市 斉藤 宏子

ブランコの少年高く空に溶け

もの忘れ摺り足で来る老いの音

老い仲間あてなく街を漂流中

少年のうなじに光る初夏の色

札幌市 富永 恵子

初登山氣力を背負い大地踏み

春の風希望と不安ハイヒール

平凡に時が流れて南無の聲

みかん皮手間暇かけて作るジャム

ひとこと集

同人・誌友にかかわらず投稿できます。
一行14字 20行(タイトルは別)
採否は編集部一任のこと。また原稿は整理・
添削する場合があります。

漁師の子泳ぎが下手で平社員
助手席のナビゲーターが主役です
アクセルをいくら踏んでも戻れない
ジレンマが記憶喪失症にさせる

無条件降伏泥を吐くシジミ
正座した豆腐が少しずつ崩れ
生きていて良かった保険満期です
紛れ込むウワサを流す水路

よく見れば期限の切れた常備薬
だとしても抜き差しならぬいま深み
無駄骨と分かっているも鞭を入れ
趣味の道進行形も夏休み

(前月分) 神戸市 木村 忠義

心にも草が生えます気のゆるみ
気にしない皺は年輪だと思ひ
老いたとて悟性ではまだ当てにされ
迷ったら一日おいて考える

弘前市 高森 一 吞
吉川 ひとし

塩竈市 木田 比呂朗

島根文芸フェスタ 2014 島根県川柳大会

日時 9月28日(月) 13時~16時30分
会場 「あすてらすホール」(大田市)
締切 13時30分 開会 14時15分
参加費 1000円 欠席投句料 1000円(切手不可)
兼題と選者 (各題2句)

「鈴」	政岡未延子	選
「漁」	佐々木 裕	選
「宇宙」	松本 文子	選
「心」	三島 崧丘	選
「違 う」	長谷川博子	選
「見える」	熱田熊四郎	選
「明るい」	加藤 佳代	選

投句先 〒693-0006 出雲市白枝町423
伊藤玲子 宛 TEL.0853-23-3200
FAX.0853-23-3201

投句締切 8月20日(水) 必着

島根県川柳連盟 主催

第28回 堺市民川柳大会

と き 9月14日(日) 開場 12時30分
ところ 堺市立堺文化会館 3階
第1講座室
(泉北高速鉄道 梅・美木多駅より徒歩3分)
宿 題 (各題2句・出句締切 13時30分)

「坂」	墨 作二郎	選
「テンボ」	工藤まさ子	選
「特技」	西山春日子	選
「とぼける」	山岡富美子	選
「まとう」	矢倉 五月	選
「ゆめゆめ」	南野 勝彦	選

参加料 1000円 各題秀句に呈賞

連絡先 〒590-0141 堺市南区桃山台2-15-10
長江 時子 方
TEL 072-299-1444

主 催 堺市文化団体連絡協議会

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

露天風呂月見草は手のとどくところ

夏休み指切り通り孫が来る

十日程こうしていたい宿浴衣

孫曾孫四十三人かこむ柩は祭めき

焼香順読み上げる声秋高し

陽気なおばあちゃんやったと一七日

新聞に埋もれている風邪の床

日本に箸紙があり祝い膳

生前にきかせてやりたい弔辞です

現代人よ埴輪の顔をとり返せ

聴診器一句案じているとは知らず

掛け替える軸へ紅白歌合戦

午前様になれぬを妻と笑う齡

訪台飛行機三時間

空の旅インスタントのように着き

約束を破る電話は妻にさせ

桜堤臨時の駅のあるところ

生け花をもってラッシュに迷いこみ

世界は二人のためにあり天高し

義理の通夜数珠をよみ人をよみ

暮からのこの楽しみの寝正月

イメージはマドロスパイプ手放さず

後釜はやっぱり弔辞読んだ人

新川柳鑑賞 (30)

麻生 路郎

奥さん奥さんとかつぎや同志なり

(春 巢)

郊外電車や国鉄などでよく見かける情景である。「奥さん、どやらこやら、奥さん、どやらこやら」と、さかんに奥さんを連発してベチャクチャ、ベチャクチャ喋っているの、奥さんで、どんな奥さんかと、そちらへ向くと、何んのことはない、垢染んだエプロン姿の奥さんで、しかも、かつぎ屋同志だったと言うのである。

一寸したスケッチだが、アッサリとした表現のうちに一抹の皮肉味さえ感じさせられる。

見くびっていた職業についていた

(千里)

この句から、どんな職業であるかを引っぱり出すことは出来ないが、それだけに、あんな職業なんてと見くびっていたどんな職業にも通じる訳である。この句には自己嫌悪とあったものが感じられるが、それでいて、どんなに生きて生かねばならないということを知ったのである。

軒下を借りる靴屋で世を終り

(七面山)

何とかして、何とかしてと思っているうちに月日は容赦なく流れる。とうとう軒下の靴屋で世を終ったというのである。それが人生というものである。

御近所の頓死を保険屋無駄にせず

(弘道)

近所に頓死があった。それを早速例に持ち出して保険の勧誘をしたというのである。詩味には乏しいが「無駄にせず」で、穿ちの味は充分だ。

客種に知事もされてるにぎりずし

(圭井堂)

「知事さんも来てくれはります」と言うのが、すし屋のおやじの自慢の一つである。

「うちのにぎりを食ったら、よそのにぎりは食えませんぜ」と、言うせりふが鼻の先にはぶら下がっているんだからたまらない。

飲食街風景を巧くつかんで

目と鼻の間で競う焼芋屋

(丁路)

こんななんでもないことが句になるのも面白い。変った素材だけならべたからと言って、いい句がうまれるに限ったわけでないことを証明しているように、あまりにもありふれた素材でこの句は出来上っている。

自転車の上で老けてる配達夫

(香林)

大てい郵便の来る家はきまつてゐるし、ポイと放り込めばそれでいいようなもの、あれでなかなか楽な仕事ではない。降っても照つても、暑かろうが寒かろうが、自転車を乗り廻しての配達、それも乗ったり降りたりが、かなり煩繁なので若い者なら兎に角、相当の年配になると随分と疲れる仕事に違いない。勤続十年、二十年となると自転車の上でいつか老けてしまうのである。同情の思いが自然と湧いてくる句である。

さびおとす労働もあり造船所

(半休)

労働というても一律でない。ニコヨンの労働、ビルのガラス拭きの労働と勤務評定を拒否している教員の労働とは雲泥の差があるが、何れにしても労働と名が付く以上そう楽な仕事でないことは言うまでもなからう。

ところが、造船所には船のさびをおとす労働があるということを見したのである。一ト目見ただけではすこぶるのんきそうで、これが賃銀のもらええる労働なのであろうかと疑いたくなると言っているのがあるが、その反面には船側に身を挺しての危険な作業であることを思うと決して楽な労働でないことが判るというのである。

誹風柳多留一二篇研究 14

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清博美

101 いかなれハむすめとむこを別にねせ

細井 『江戸語の辞典』〔芋田楽〕②親芋・小芋を一本の串で貫く意から一人の男が母娘に情交すること。

どういふわけで娘と聲を別室に寝かせるの
だろうか。義母が聲と同衾したいがためだろ
うか。それとも。娘が懐妊したので、折角出
来た子を押しつぶさないように用心してのこ
とか。穏やかではない。

とんだ事聲の寐床に母の櫛
おやのもののハ子のもいもでんがく

七二九
安七梅三
姑トのでむこをもてなしもめるなり

安五亀二

伊吹 賛。本当にいかなれば何故。

小栗 芋田楽の句と思う。礎説後半不要では
ないか。

清 同右。礎稿承知の上での記述かと思うが
……。

102 それもしやくのせいとげちくを捨る

細井 ゲジゲジが出ると雨が降ると言われて
いるが、その通りになって折角の花見が御延
引になってしまったので、此奴は癩の種と、
捕らえては捨て、捕らえては捨て……。

こいつか出ると降やすと立騒ぎ 傍二七

そりや出たよいかぬ事だと花の宵 傍四二

小栗 賛。「しやくのせい」が落ち着かぬが、
「しやくなことが起った原因」というような

意であろうか。
清 賛。「しやくのせい」とあるのは、本句
一句のみ。

103 うつくしいはつ太くはふくろ持

細井 あのお寺さんの大黒(隠し妻)は「袋持」
といって、まだ痘瘡にかかつていないので、
痘痕も無くて美しい。「大黒」と「袋」は大
黒天像が背にしている大きな袋を掛けて詠ん
だもの。

美しさ一ツのきずハふくろもち 天四天一
小栗 賛。「大黒」と「袋」の言葉遊びで作っ
た句。

清 賛。

104 かんばんにじゆずをして出るにくらしさ

細井 あの後家は貞節の看板のつもりで、外
出の時には、見せびらかすように数珠を持つ
ているが、その実は怪しいものだ、というの
である。

あの後家のしゆすてぶつたハ初手のこと

後家どこへ行のか珠数を置いて出る 昌一十二

清 賛。

明八松四

105 われなべをはじめてなめるはつかしき

細井 初めて歯を染めるのを「初鉄漿」というが、とても恥ずかしいことだったらしい。鉄漿には鉄鍋の欠片などを入れたので、染める作業を「割れ鍋を舐める」と表現したものであろう。「割れ鍋に閉じ蓋」のきかせも感じられる。

まつ黒なぶく／＼をするはつかしき

安八礼2

はつかしきしぶういこなをはつになめ

安八礼8

小栗 賛。「割れ鍋をなめる」というのも変な表現だが、「はつかしき」はやはり鉄漿であらうか。

清 賛。われなべをとなりへも遺ル女同士 一八三

とぢぶたのしたくわれ鍋しやぶらせる

安六礼5

という句もあり、これも鉄漿の句。

106 たゝかれるたいこきんちやくべるまね

細井 吉原での句。太鼓持が、遣り手が祝儀を受け取り、巾着へ入れて紐をきゅっと締め、る形態模写を、目の前でやったので叩かれて

しまった。

小栗 この句、柳雨「吉原志」に「きんちやく」を「遣手の異名」と頭注あるのが気にかかる。この句の技巧は「たたかれる——たいこ」と「きんちやく——しめる」と縁語仕立てが呼応しているところにあるから、「きんちやく」を金入れではなく「遣手」のこととすると技巧としてはすっきりする。ただ、そうすると、「しめる」は「女をものにする。交接する」ということかとも思うが、太鼓が遣手を女扱いする句はめずらしい（ふざけただけだからいいとも思うが）。あるいは「しめる」を別の意味にとればつじつまが合うかもしれない。

清 主題句、「辞彙」に引用されていて、脚注に「欲深婆の真似」とある。これでいいのではなからうか。

107 まくら絵を出してしちやへしよつて行

細井 一般に枕絵は虫除けになるという俗信があつて、文庫や筆筒に入れた。武士は出陣にあつて、これを具足櫃に入れると必ず勝つとしんじられていたので「勝絵」ともいった。しかし、質入れしようとする際、枕絵は質種として査定・加算されないの、それは

のけて質屋へ鎧櫃を背負つて行く。

まくら絵ハそへてもしちや直にふます

明四松1

小栗 賛。「質種として加算されない」のが言いたいのではなく、具足櫃——枕絵パターンを一ひねりしたまで。

清 同右。

108 命也けりくわい氣してはたち也

細井 十九歳は女性の大厄であるが、成人の自然の欲望が満たされないで、もんもんと悩んでいたりと労咳になると考えられていた。この娘は永らく労咳を患っていたが、全快して、めでたく二十歳の春を迎えることができたのを、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

いのちなりけりさ夜の中山

（『新古今和歌集』巻十）

という西行法師の歌から文句取で表した。

くわいきしててうどきといふうんの能サ

天元仁2

仕合せさ丁度になつて床をあけ

玉17

小栗 賛。十九の厄年を詠んだ類句多数のうちの一。

清 賛。

英語 de Senryu ③②

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

俺だ俺だよと銅像云いたそう

*"it's me, it's me."
seems to say
the statue*

使ひきれない後家の収入

*like water
the widow's income
endlessly*

～リバーウィローのため息～ (川柳の国際化 8: *Senryu: Poems of the People* by J.C.Brown, Charles E. Tuttle Company 1991)

1990年代に入りますと、日本人の協力なしに川柳を翻訳し、日本で出版する外国人が現われました。それが *Senryu: Poems of the People* です。著者の J.C.Brown は、1975年にインディアナ大学美術学部を卒業後、日本美術と日本文化に魅了され来日しました。日本で多様な美術・デザイン関連の仕事に関わりながら、書道を通して変体仮名を学びました。Brown の初めての出版がこの川柳書でした。柄井川柳の時代から二十世紀初頭の川柳を Brown 自身が選句、翻訳し、それに日本語の原句を変体仮名の書で描いて、さらに挿絵まで入れて編集した英訳川柳書です。題名からも川柳を庶民の詩と捉えているのが判ります。軽妙な挿絵と日本語の変体仮名とのバランス、ローマ字化された原句も頁に載せられて、日本人も外国人も楽しめる内容になっています。日本文化に興味がある外国人は必ず手に取るであろうと思われる川柳書です。1930年代に、阿部佐保蘭が川柳の海外普及に取り組んでいた時代からすれば、隔世の感がありますね。中でも私は、三太郎の「ご隠居もほけ猫もほけ静かなり」が気に入っています。猫と女性のご隠居が、どしんとした体形で坐る挿絵と、それに変体仮名で書かれた原句がマッチしていて、思わず笑みがこぼれます。これを Brown は、*The old lady's senile./So's the cat./All is quiet.* と英訳しています。一方、R.H.Blyth の英訳は、*The retired old woman/Grows senile, the cat too./All is quiet.* (*Japanese Life and Character in Senryu* p.179, 1961) です。Blythの方が説明的、Brown は印象を切り取った英訳ですね。読者のみなさまは、どちらの英訳をお好みでしょうか。

姑は意地悪

小栗清吾

江戸川柳には、現代の川柳には見られない独特の技巧がいくつもあります。その一つに我々が「約束事」と呼んでいるものがあります。「約束事」とは、ある人物、物事などに特定の意味を持たせることです。

例えば、「息子」は道楽息子、「伊勢屋」は吝嗇で、「信濃者」は大飯喰らい。相模国出身の「相模女」は淫乱で、地方から出て来た勤番侍は「浅黄裏」と蔑称されて、吉原で遊女に振られることになっていきます。

その数ある約束事の中で、ナンバーワンはなんといつても「姑」でしょう。江戸川柳で「姑」と出てくれば、まず「嫁いびり」の句と見当を付けるのが常識です。今回は、その壮絶な嫁いびりの句を列挙することに致しましょう。なお、「姑」は「しゅうとめ」という字ですが、江戸川柳では文字数の関係で「しゅうと」と読ませる場合も多いので、ルビに従ってお読み下さい。

退きなさい今日や明日では炊き付かぬ

一六三〇

炊事の薪を燃やすのが下手だと、「ちよつと退きなさい。そんなやり方では、今日や明日の内には炊き付かぬえ」ときついお叱り。ガス一発で点く現代の嫁は幸せです。

ふんばりのように磨くと姑言い

拾二五

お化粧に少し時間が掛かったりすれば、「まるで商売女のように磨き立てて」と嫌み。

数珠さらさらとおし揉んで嫁を睨め

一五二一六

数珠を揉んで仏壇を拝んでいるときも、油断無く嫁を睨んでいる様子です。ただし「数珠さらさらと押し揉んで」は、謡曲「舟弁慶」に全く同じ文句がありますから（文句取り）、江戸川柳は油断がなりません。

そればかり着て出やるのともういじめ

拾二六

嫁が外出する時には「その着物ばかり着て出やるのう。もつとまじな着物を持たせてもらえなかつたのかねえ」とチクリ。

嫁の噂を朝顔の垣根越し

八二〇

年寄り朝早く目がさめます。朝顔の咲いている垣根越しに、隣り同士の姑が嫁の悪口を言い合います。「うちの嫁はこんなことを……」「いえ、それはマシな方で、うちの嫁は……」。嬉々とした声が聞こえるよ

うです。

今の目はだれを見やるとしうとば

五三

さんざんいびられた嫁が、恨めしそうに姑を見ようものなら「今の目は誰を見やる目だ。母にそんな目付きをしているのか」とまたいびる種にします。

手を出さつせいと物差し姑出し

二〇九

この句は少々説明を要します。当時、「物差しを直接手渡しすると不和になる」という俗信がありました。ですから、物差しを手渡ししようとする姑は、気に入らないから出て行けと言わんばかりの態度だというわけです。こんなことをされたお嫁さんは、どうすればいいでしょうね。受け取つても拒否してもいびられそうです。

留守の事猫に言い付け姑出る

説二七

外出する時に、留守中のことを嫁に言い付けず、猫にしゃべって出ていく姑。「タマや、お前は口答えしないから、可愛いね」などと言い捨てて行くから、よけい憎らしい。

世の中に嫁ほど憎いものは無し

明三義五

「嫁と名が付けばわが子も憎い」という諺が江戸時代の『俚言集覧』という本に載っています。姑の嫁いびりに理屈はありません。たのしみは嫁をいびると寺参り

寺参りと同じ「楽しみ」なのですから。

一七二四

愛染帖

新家 完司 選

(投句 277名)

堺市 澤井 敏治

霧の日もあべのハルカス二千円

(評)日時指定予約は二千円。エレベーターで上がるだけにしては高いが、それは眺望代。もし見えなければ、半額払い戻しが妥当。

大阪市 大川 桃花

寝不足の朝は化粧に苦勞する

(評)化粧のノリが悪いのは肌に潤いがいないため。潤いを奪うのは睡眠不足と加齢。加齢はやむを得ないが、睡眠はたっぷりとうろう。

明石市 穂谷 和郎

遊んではいけない場所はおもしろい

(評)子供にとっては海や川。オトナにはネオン街や競馬・競輪・パチンコ。法律で禁じられていないが、嵌まり込むと自己破産。

紀の市 宇野 幹子

姑の来る日は掃除機もくたひれる

(評)普段はサボっている掃除も、口うるさい姑が来るともなれば隅々まで頑張らざるを得ない。掃除機も「姑襲来日」は大変だ。

長野県 丸山 健三
人の世を水際で見る芹なすな

(評)鳥獣のみならず山川草木すべてに魂が宿っている。芹やナズナの涼やかな目に、人の営みはどのように映っているのだろうか。

鳥取市 前田 楓花

いつべんも命を賭けたことがない

(評)「命がけで」「身命を賭して」等と口では言うが、そこまでやったことはない。本当に賭けていたら、とつに失くしている。

三田市 福田 好文

酒飲みは麻酔効かぬと脅される

(評)いや、脅してはさなく事実。メスの激痛に耐えるか、酒を控えるか、思案のしどころである。と脅しても飲兵衛には効かない。

豊中市 松尾美智代

体中治してほしい撫仏

(評)病気のところを撫でると治してくれろという寶頭盧さん。頭から足まで体中悪いから、全部撫でさせてもらわんといかん。

川西市 山口 不動

田植機が二台出ている日曜日

(評)日曜日しか田植えが出来ない兼業農家が増えている。傍目にはのんびりした風景に見えるが、ご当人の苦勞は並大抵ではない。

三田市 今西 廣子

川柳に追われ病院後回し

(評)急を要する症状ではなく、月に一度の

検診ぐらいなら川柳優先。その元氣を持続して、病院優先に進まぬようお願いしたい。

松山市 栗田 忠士

川柳は普段着がいい下駄でいい

米子市 生田 和之

夜半に詠む駄句は大方没になり

倉吉市 岡崎美知江

没句でも想いが光り捨てられず

大阪府 野田 栄呼

もの忘れブレーキ握る作句熱

神戸市 松井 文香

抜けた句が想定外に闊歩する

青森市 守田 啓子

踏まれたら蓬のような香を放つ

豊橋市 藤田 千休

自転車荷台へ斜陽 急がなきゃ

シドニー 坂上のり子

師と親がお尻を叩くオール3

長電話うんそうへえーでお付き合

嫁の悪口書いた日記はもう捨てろ

香南市 桑名 孝雄

ユニクロと百貨うちの御用達

三田市 上田ひとみ

免許証まだアッシーの八十五

かつこ良くバーカウンター座りたい

ひとり旅なんて素敵な響きでしょ

ああこんなドラマみたいな日もあって

弘前市 今 愁女
無言でも買物できる世の中に

三田市 多田 雅高
出生は神社に詣り死はお寺

芦屋市 竹山千賀子
亡夫の靴出してそうつと足入れる

加西市 中川 修
恐山死んだベツトも呼び寄せる

大阪市 谷口 義
スルツとかんさいスルツとおばあさん

枚方市 松原 保
十二年歩けば変る出合う人

岡山市 藤成 操江
体重は増えたようだが背は縮む

岡山県 吉道あかね
病名は加齢歩けばいいらしい

貝塚市 丹下 凱夫
牛肉の握り鮓には馴染めない

岡山市 丹下 凱夫
愛想笑いにあいそわらいを返してる

大阪市 平井美智子
遊んでる時がホントの顔である

大阪市 平井美智子
夏草に負けてたまるかビール飲む

松江市 石橋 芳山
モアイ像のように街路樹暮れている

松江市 石橋 芳山
嵩高いお世辞土産に持たされる

池田市 上山 堅坊
逃げじゃない明日のためだと飲むお酒

堺市 矢倉 五月
掠り傷ぐらいなら効く発泡酒

高槻市 初代 正彦
僕だつて酔えばズバリと言いまつせ

大阪市 井丸 昌紀
ラーメンで締めくくるから瘦せられず

米子市 後藤美恵子
二日酔い酒には何の罪もない

橿原市 安土 理恵
少子化は種なしフルツの仕返し

鳥取市 田中天翔
死ぬまでに一度夏やせてみたい

和歌山市 古久保和子
息潜め拉致の解決待っている

和歌山市 古久保和子
めぐみさん親子のハグが是非見たい

和歌山市 古久保和子
骨切りをしたい男と湯引き鮓

和歌山市 古久保和子
干からびた昆布になって猫帰る

神戸市 徳留 節
シーツひるがえり青空したがる

神戸市 徳留 節
夕焼けにおいらの影は真っ黒け

三田市 上垣キヨミ
下手までも譲ってくれた父のバター

八尾市 高杉 千歩
郵便の赤いバイクに恋をする

堺市 遠山 唯教
太ったネ言わなくても知っている

大阪府 米澤 俣子
山頂に三角点が凜とある

豊中市 藤井 則彦
他人ごとじゃない終活の適齢期

大阪市 津守 柳伸
無理矢理に誘われてから好きになり

佐賀県 真島久美子
可も不可もなくひとり身の置きどころ

米子市 竹村紀の治
ヒマラヤの塩で自己満足をする

京都府 高島 啓子
恋人と言われない日のシャツを着る

京都府 高島 啓子
オレオレも知っているのか電話来ぬ

京都府 高島 啓子
昼の酒こむら返りという仕置き

大阪市 榎本日の出
境内にマンション建てている神社

大阪市 榎本日の出
問い合わせ電話録音すると言う

大阪市 榎本日の出
美味しくて安いが長い列が厭

鳥取市 福西 茶子
笑いいわ笑わなければ良く目立つ

老人会まさかの人の隠し芸

河内長野市

村上 直樹

土下座するかたちで捜すコンタクト

島取市

倉益 一瑠

我が儘な妻だ三日も物言わぬ

唐津市

山口 高明

足の裏指圧しながら聞く法話

奈良市

大久保真澄

こんなによ素つぴん見せてくれた女

大阪市

江島谷勝弘

クマモンが世界制覇をするのかも

熊本市

杉野 羅天

増えている癌より怖い認知症

米子市

中原 章子

休診日だから出掛けるところがない

堺市

村上 玄也

生きているだけで肩こり目の疲れ

大阪市

栃尾 奏子

怒り肩の妻にひたすら付いて行く

田辺市

岡本 昇

体じゅうのネジをゆるめて昼寝中

奈良県

渡辺 富子

法事すみ孫も帰った草取りだ

つくば市

嶋本 喬

八十に見えぬとベテン師のお世辞

島取市

永原 昌鼓

顔よりも頭が歳を隠せない

西宮市

片山 忠

桃色のウサギが群の中にいる

大阪市

藤田 武人

吹けばとぶ恋ですひとついかがです

篠山市

酒井 真由

真っ白なノートに恋を滑らせる

青森県

松山 芳生

本命へ目力入れるアイライン

香芝市

大内 朝子

美人だとほめられた人盗み見る

東京都

川本真理子

強引でも美人の横に座りたい

橋本市

石田 隆彦

老樹でも恋の一つもしてみたい

神戸市

山根 弘子

振られたらあんな男と思いたくない

大阪市

古今堂蕉子

愛情はまだあるビール冷えている

弘前市

福士 慕情

楽しそうに暮らしてますが火の車

大阪市

柴本ばつは

カラオケにエコーがあつて救われる

三田市

堀 正和

リフォームのチラシに夢を膨らます

島取市

岸本 孝子

死ぬ覚悟あるが五輪は観てみたい

堺市

加島 由一

千秋楽の三日前から見るテレビ

京都市

榎本 宏子

あれからも地震対策していない

西宮市

牧渕富喜子

自販機で抵抗もなく水を買う

倉吉市

牧野 芳光

眉を引く紅さすわたし生き返る

東大阪市

北村 賢子

ハルカスで日本占領した気分

枚方市

丹後屋 肇

大阪のおんな大きい方を取る

河内長野市

山岡富美子

伸び切った輪ゴムが後期高齢者

札幌市

三浦 強一

変な空いつべんに夫もぎり取る

島取市

大前 安子

夫逝きてひとり芝居も五年目に

唐津市

吉富 節子

長生きのお蔭で行けるお葬式

松江市

中筋 弘充

パソコンのトラブル泣く子より苦手

岡山市

永見 心咲

お前もかそうかと老いを笑い合う

藤井寺市

鈴木いさお

欲しいものの欲しがりながら生きるのだ

三田市

久保田千代

鉢穴を抜けて密通する根っこ

島取市

夏目 一粹

贅沢だった粗食だった独りの膳

尼崎市

春城 年代

勝ち一つ負けは三つのマイベース
太田扶美代

藤井寺市
唐津市 仁部 四郎

礼状の表は自筆定年日

大阪市 笠嶋 惠美

花はいい無言の対話してくれる

大和郡山市 坊農 柳弘

ともすれば独り善がりのクールビズ

芦屋市 黒田 能子

一病を持ってる人が元氣そう

米子市 成田 雨奇

題忘れ今日の散歩は歩くだけ

西宮市 緒方美津子

仏とは川を隔てたまががいい

河内長野市 松岡 篤

散髪はボチより安いとこです

東かがわ市 川崎ひかり

子育てが終わり話題に四苦八苦

三田市 北野 哲男

言い遣す香餐拝辞家族葬

大阪府 桑田ゆきの

通夜の座へ螢火一つ纏い付く

鳥取市 岸本 宏章

「何食べる」「なんでもいい」で日が過ぎる

河内長野市 徳口 正子

一年が早いがちゃんと老いている

姫路市 古川 奮水

尾瀬ヶ原歳がだんだん遠くする

和歌山市 楠見 章子
おひとり様せめて味噌汁音たてて

弘前市 吉川ひとし

高齢者伸びたラーメンより増える

和歌山市 土屋起世子

年会費納めて行かぬ老人会

塩竈市 木田比呂朗

あれこれと妻も指示語が多くなり

羽曳野市 徳山みつこ

外を掃く互いに悲ない会釈

鳥取市 吉田 弘子

空に雲私に五欲切れぬ仲

三原市 鴨田 昭紀

ほどほどにエコー効かせている美談

岡山県 田中 恵

雨蛙が布団は入れて行けと言う

河内長野市 坂上 淳司

アイラブユーと言われないまま五十年

宝塚市 田中 章子

よく見れば一円玉も凝っている

大阪市 太田としお

想い出は税務署さんも手が出せず

神戸市 白川 淑子

未来より今日一日が命がけ

茨木市 藤井 正雄

トラブルを器用に包む最古参

三田市 足立つな子

挨拶ができれば万事うまくいく

鳥取市 谷口回春子
美味しい酒飲む日を胸に手術台

河内長野市 谷 久美子

梅干を母に負けじと漬けてみる

尼崎市 市坪 武臣

レジャーシートと食べたらいにぎり飯

大阪市 津村志華子

星空を見たくて姉と山の宿

四条畷市 吉岡 修

ピクツと来た浮子とわくわく会話する

高知市 小川てるみ

ちよっかいを出して小猫にひっつかれ

大阪市 伏見 雅明

朝刊は先ずチラシから目を通す

鳥取県 岩崎 和子

衣替え早くやり過ぎシャツを出す

河内長野市 梶原 弘光

蟻だって2割サボっているらしい

生駒市 飛水ふりこ

相性が悪く構える丁寧語

藤井寺市 肥山 一文

定年後隠れる所なくなった

防府市 坂本 加代

イベントで土日賑わう田舎町

奈良県 安福 和夫

つばめにも口開け餌待つ子らがいる

大阪市 吉内タカ子

腕時計げんき思い出はなさない

共選欄

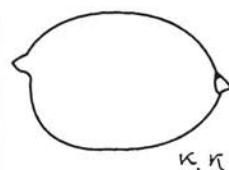
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 394名)



「世渡り」竹治 ちかし 選

世渡りは下手でも君がいてくれる
ライバルと共に学んだ処世術
口八丁手八丁とで世を渡る
世渡りの風に合掌して生きる
切札がないまま渡る手を探す
三猿の教えひとつそり世を渡る
世渡りへ仮病も使う処世術
友よりも世渡り下手で生き残り
無を悟る世渡りもあり遍路笠
外面は仲良し夫婦演じてる
お面つけ鬼と仲良く世を渡る
世渡りの奥義極めたケセラセラ
時に応じ仮面付け替え世を渡る
社交術にも直球と変化球
不器用で迂回しながら生きている

松江市	相見	柳歩
雲南市	菅田かつ子	
米子市	後藤	宏之
長野県	丸山	健三
弘前市	稲見	則彦
島取県	石谷美恵子	
島取市	永原	昌鼓
大阪市	笠嶋	恵美
八尾市	宮西	弥生
島取市	池澤	大鯨
大阪市	坂	裕之
香南市	桑名	孝雄
堺市	村上	玄也
枚方市	海老池	洋
和歌山市	堀	富美子

「世渡り」大内 朝子 選

世渡りの一步を印す呱呱の声
世渡りが下手で胃薬もち歩く
あの世でもお世辞はちゃんと言うつもり
ITで世渡りこれも時代の子
世渡りを心得ているかすみ草
本音では世間渡れぬ人の壁
下積みで覚えた世渡りのイロハ
世渡りは時には耳も目も塞ぎ
くもり空少しよいしで晴れもよう
世渡りに嘘も時には潤滑油
状況に合わせてカメレオンになる
世渡りの上手な嫁に逆らわぬ
あるがまま生きておりますお月さま
世渡りのためにいやでも振る尻尾
真っ直ぐを通した跡が背にある

米子市	後藤美恵子
大阪市	大西
豊中市	藤井
寝屋川市	龍島
尼崎市	春城
橋本市	石田
三原市	鴨田
羽曳野市	藤原
倉敷市	安東
豊中市	水野
京都市	高島
大阪市	神夏磯典子
篠山市	酒井
高槻市	原
松山市	栗田
	忠士
	真由
	洋志
	啓子
	黒兎
	モモ
	大子
	昭紀
	隆彦
	恵子
	年代

世渡りのうまい男が未だ独り
叩かれて身につけました低姿勢
能天気世をスイスイと生きている
世渡りの上手い人には付いて行く
軽石は軽石なりの役を持つ
しなやかに揺らいでいても芯はある
世渡りのうまいおひとの傘の下
白黒の旗を持たない処世術
迷惑を掛けないように世を渡る
涙より笑顔を武器に世を渡る
世渡りは上手くはないが裏もない
三猿になつて賢く世を渡る
聞き流す術も覚えて世を渡る
ブライドを捨てて気ままに世を渡る
世渡りは上手に転ぶこと覚え
変わり身の早さを武器に世を渡る
馬鹿になる術がいまだに使えない
凡人の凡人らしく生きている
妻や子のために飲んでる苦い酒
フイリング合つて二人の世を渡る
世渡りの極意教えてくれた酒
世渡りのコツ知つたころ秋の風
泥臭くしたたか者で生き延びる

紀の川市 北山 絹子
高槻市 片山かずお
奈良市 辻内げんえい
玉野市 片岡 富子
三田市 北野 哲男
大阪市 近藤 正
八尾市 村上ミツ子
神戸市 山崎 武彦
鳥取市 西川 和子
河内長野市 木見谷孝代
篠山市 二階 幸子
河内長野市 谷 久美子
和歌山市 喜田 准一
奈良市 岩本 浩二
大阪市 榎本日の出
横浜市 菊地 政勝
西予市 黒田 茂代
紀の川市 辻内 次根
大阪市 川端 一步
鳥取県 細田 裕花
松江市 三島 崧丘
八尾市 内海 幸生
高槻市 杉本 義昭

価値観の違いを妻と分かち合い
世渡りが下手で一枚きりの舌
外面は仲良し夫婦演じてる
ひよつとことおかめ夫婦の綱渡り
時によりグレーゾーンも処生術
口先で世渡りしてるから怖い
苦もあれば楽もあるさと世を渡る
誠実に生きて何にもこわくない
すんだことよくよせずに世を渡る
世渡りの下手が掴んだ信用度
愛の舟ふたりに漕いで渡り切る
かすり傷の数なら人に負けません
世渡りの苦労話に花が咲く
ほいほいとグーチョキパーで渡る人
原石が採まれて丸く生き残る
時々尻尾を見せて世を渡る
世渡りに長けた男へ俄か雨
犬掻きで沈まのように泳いでる
世渡りも無類方角音痴です
負け組の中でのびのび生きている
働いて世渡りうまいキリギリス
身の丈に合った夢見て前を向く
仏にも鬼にも出合い世を渡る

広島市 岸本 清
貝塚市 吉道あかね
鳥取市 池澤 大鯨
三田市 上垣キヨミ
堺市 矢倉 五月
川西市 西内 朋月
明石市 桃谷 和郎
鳥取市 春木圭一郎
長岡京市 山田 葉子
高知市 小川てるみ
大阪府 初山 隆盛
大阪市 立蔵 信子
米子市 加藤 正二
富田林市 関 よしみ
米子市 竹村紀の治
鳥根県 伊藤 寿美
和歌山市 磯部 義雄
大阪市 佐藤 忠昭
東大阪市 北村 賢子
尼崎市 長浜 美籠
西脇市 七反田純子
堺市 内藤 憲彦
八尾市 山根 妙子

一寸狭い大人になって世を渡る
世渡りのうまいお方の裏表

あやふやに生きて世渡り上手くなる

世の中の空気をうまく読み分ける

世渡りの上手い人にも敵味方

世渡りがうまい女の裏をよむ

大勢の赴くままに風見鶏

泳法はどうあれこの世渡り切る

神さまを信じ世間の風をよむ

あの世でもお世辞はちゃんと言うつもり

世渡りの下手も上手も共に老い

時々尻尾を見せて世を渡る

四分六で押さえてばかりいる本音

世渡りの上手な人の影を踏む

自然体ゆらりゆらりと生きている

身のたけに合った歩幅で転ばない

負け組の中でのびのび生きている

世渡りの途中で拾う神に会う

世渡りを心得ているかすみ草

秀句

世渡りのうまさを入れる闘斗袋

保護色になってこの世をすり抜ける

握手してまだ一票は決めてない

大阪市 大治 重信
出雲市 岸 桂子

札幌市 小沢 淳

池田市 栗田 久子

尼崎市 藤岡 りこ

出雲市 小白金房子

河内長野市 村上 直樹

鳥取市 岸本 宏章

青森県 松山 芳生

豊中市 藤井 則彦

篠山市 酒井 真由

島根県 伊藤 寿美

松原市 森松まつお

三田市 久保田千代

大阪府 神野千恵子

大阪市 升成 好

尼崎市 長浜 美籠

西宮市 牧瀬富喜子

尼崎市 春城 年代

橿原市 居谷真理子

和歌山市 古久保和子

松江市 小川 注湖

ありがとう一言添えている暮らし
軽石は軽石なりの役を持つ

本音吐く癖で世渡り踏み外す

世渡りの途中で拾う神に会う

叩かれて身につけました低姿勢

オットット此の世毎日綱渡り

世渡りの上手の手から漏れる水

人間の森を巧みに渡る靴

世渡りの上手な蝶が飛んでいる

しなやかに揺らいでいても芯はある

若い日の汗黄昏に効いてくる

世渡りの下手な仲間で過疎守る

保護色になってこの世をすり抜ける

世渡りの下手な遺伝子持たされる

溺れずに耐えて人生泳ぎ切る

世渡りのコツを浮き雲から学ぶ

日日感謝今日を明日の糧にする

世渡りの下手な父だが世界一

無を悟る世渡りもあり遍路笠

秀句

神さまを信じ世間の風をよむ

笑い皺刻んで母の処生術

両の手でいただいてますちさい幸

富田林市 中井 アキ
三田市 北野 哲男

八尾市 内海 幸生

西宮市 牧瀬富喜子

高槻市 片山かずお

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 上田 紀子

富田林市 山野 寿之

大洲市 花岡 順子

大阪市 近藤 正

海南市 堂上 泰女

西宮市 秋元 てる

和歌山市 古久保和子

弘前市 福士 慕情

三田市 久保田千代

京都市 都倉 求芽

大阪市 小谷 集一

芦屋市 黒田 能子

八尾市 宮西 弥生

青森県 松山 芳生

紀の川市 宇野 幹子

弘前市 高瀬 霜石

「脳」

岩 佐 ダン吉 選
(投句 207名)



だんじりと脳空っぽにして走る
瘦せなくていい脳だけがダイエツト
重すぎる脳持て余し横になる
脳死だと言われた友の手が温い
国民を洗脳する気秘密保護
右ばかり目掛けて進む脳もある
いつの間にみんな洗脳されるなよ
八月六日脳へしつかり刻み込む
恋をする脳はぼつとピンク色
三食と昼寝で脳は上機嫌
ヘソクリをしているうちは無事な脳
ビビビッと脳天をつくみすゝの詩
脳みその部品メールでさがしてる
脳味噌を使い過ぎとは言わせない
脳トレのつもりメモなしお買い物
情熱がいっぱい脳が暴れ出す
涼風に逢うとやさしくなる脳波
からつばの頭で指揮をする辛さ
脳みそに汗掻いた跡あるやろか
未開封の部分もあると脳が言う

貝塚市	石田ひろ子	河内長野市	黒岩	靖博	河内長野市	石田	隆彦
大阪市	坂	大阪市	高杉	力	高知市	梶原	弘光
防府市	坂本	加代	小澤	幸泉	神戸市	山田	婦美子
松江市	中筋	弘充	福井	菜摘	河内長野市	梶原	弘光
奈良県	渡辺	富子	石田	隆彦	橋本市	石田	隆彦
鳥取県	竹信	照彦					
鳥取市	春木圭一郎						
藤井寺市	鈴木いさお						
香芝市	大内	朝子					
倉吉市	山中	康子					
大山市	関本	かつ子					
松江市	三島	湫丘					
大阪市	奥村	五月					

いつまでも私でいたい脳細胞
考えても出て来ぬ脳へ酒を足す
ぐっすり眠って落とす脳の錆
好きな人嫌いな人に分ける脳
ほんやりで良かった呆けが目立たない
すぐサボる私の脳の司令塔

脳に風入れて世間の動き見る
冴えた脳ちよつと雄弁すぎないか
書かないと忘れ書いたら見忘れる
少しぐらい脳の誤作動許される
頑固なのは脳が動いてないし
忘却のお陰で脳がパンクせぬ

佳

猫背にはならぬ脳味噌軽いから
ダイエツトしたら脳味噌弱り出し
謝罪会見脳ミソはまだ懲りてない
反戦歌何度反芻したか脳
脳死判定認める勇氣なんてない

人

生まれつき花はきれいと思う脳

地

九条の雄叫び脳に叩き込む

天

脳の皺あふれて顔に刻まれる

軸

脳天に刻む私のヒロシマ忌

東大阪市	北村	賢子	鳥取市	福西	茶子
四條畷市	吉岡	修	三田市	野口	晶子
羽曳野市	徳山みつこ		堺市	内藤	憲彦
三田市	今西	廣子	海南市	堂上	泰女
神戸市	白川	淑子	弘前市	高瀬	霜石
三田市	上垣キヨミ		堺市	矢倉	五月
和歌山市	松尾	和香	大阪市	津村志華子	
和歌山市	土屋起世子		三田市	北野	哲男
奈良市	大久保真澄				
海南市	小谷	小雪			
八尾市	宮崎シマ子				
松山市	栗田	忠士			

「ミーティング」

(投句 195名)

渡 辺 富 子 選



ミーティング気合いの声で幕開く
激論の渦が巻いてるミーティング
物言わぬ会議くち火を切るさくら
炒り豆のよう女子会のミーティング
霞ヶ関の会議にかすみまよつてる
咳ひとつ流れを変えるミーティング
酒の出るミーティングならどこへでも
パンコンとハイとイエエのミーティング
釣り宿で仕掛け自慢の釣り天狗
決め球がないまま終るミーティング
ミーティング今日の気分はハイヒール
後出しでいいとこ取りの意見出す
隅からの一言会を引きしめる
逆転劇効を奏したミーティング
ミーティング官房長官笑わない
付和雷同かたちばかりのミーティング
神さまもミーティングする神無月
家族会議夫はつきり斬られてる
議論沸騰社運を賭けたミーティング
御開きになってポンポン出る本音

八尾市 宮西 弥生
和歌山市 喜田 准一
明石市 桃谷 和郎
大阪府 米澤 俊子
東大阪市 北村 賢子
鳥取市 夏目 一粋
堺市 矢倉 五月
池田市 上山 堅坊
河内長野市 坂上 淳司
横濱市 菊地 政勝
豊中市 池田 純子
堺市 奥 時雄
大阪市 奥村 五月
和歌山市 福井 菜摘
唐津市 仁部 四郎
堺市 遠山 唯教
鳥取市 岸本 宏章
大阪市 柴本ばつは
札幌市 三浦 強一
大山市 金子美千代

奥の間で声を殺した打合せ
家族会議父さんいつも蚊帳の外
酒席待つ時間で手打ちする会議
結局は元へ戻ったミーティング
なでしこを見事に咲かすミーティング
輪をといて持ち場に散っていく背中
密談になった小部屋のミーティング
ミーティング済んで戦士の貌になる
婚活に利用されてるミーティング
喪が明けて絆の重い話し合い
ミーティングの度にテンション下がる部下
最後にはエイエイオーのミーティング

佳

人

地

天

軸

胃薬を3錠飲んで出る会議
時どきは北風も吹くミーティング
十二神将信者来る前ミーティング
ミーティングあしたへ喝を入れている
盛んらし機密費囓る夜の会
復興のきざし会議が加速する
鬼の役決まって終るミーティング
三角が四角になったミーティング
世界平和願ひ神様勢揃い

三原市 鴨田 昭紀
奈良市 米田 恭昌
札幌市 小沢 淳
弘前市 福士 慕情
岡山市 永見 心咲
東京都 川本真理子
紀の川市 宇野 幹子
西宮市 片山 忠
八尾市 村上ミツ子
富田林市 山野 寿之
堺市 村上 玄也
四条畷市 吉岡 修
弘前市 高瀬 霜石
松江市 三島 淞丘
富田林市 関 よしみ
箕面市 出口セツ子
羽曳野市 徳山みつこ
青森県 松山 芳生
和歌山市 土屋起世子
姫路市 古川 奮水

「おまけ」

(投句 203名)

原 田 すみ子 選



扇風機のおまけに付いてきた団扇
 バツイチのデート子連れというおまけ
 気は心一つまみ足す量り売り
 お話におまけが付いている噂
 玉手箱これは大人のおまけです
 買い洩り時間をかせぎおまけ待つ
 部品だと見抜かれていたその睫毛
 キャラメルに付いてたコレが五万円
 一匹のおまけの金魚だけ元氣
 副作用先に出てきた飲み薬
 せせらぎの音も貴船のおしながき
 貸した金少しぐらいいは色付けよ
 どのカゴも値引きシールの夕ごはん
 えび天の衣おまけが多過ぎる
 失敗談父の話はおまけ付き
 完封へ三振の数おまけ付き
 一休みお茶のコップに茶柱が
 焼酎のおまけへ口を持ってゆく
 突然の雷雨が置いていった虹
 三角は先生くれたおまけです

藤井寺市	鈴木いさお
和歌山市	福井 菜摘
三田市	北野 哲男
和歌山市	北原 昭枝
佐賀県	真島久美子
京都府	榎本 宏子
堺市	矢倉 五月
大阪府	板尾 奏子
大阪府	米澤 俣子
三田市	堀 正和
高槻市	原 洋志
大阪府	江島谷勝弘
羽曳野市	徳山みつこ
弘前市	今 愁女
大阪市	柴本ばつは
大田市	中居 善信
小野市	藤原 泰宏
香南市	桑名 孝雄
榎原市	居谷真理子
弘前市	稲見 則彦

紙風船夢ふくらんだ置き葉
 道尋ねふる里自慢聞いている
 元気で歳割りのにおまけつき
 気がつけば男とことん大掃除
 長生きへ神はおまけをつけ過ぎる
 美人っていいなおまけを貰うてはる
 健康で美人で声のでかい妻
 法話寺におまけに郭公遠く鳴く
 食べ過ぎたおまけが溜まる腹まわり
 増税に便乗値上げまでおまけ
 小包に長寿お守り添える母
 人気とりのおまけの握手難招く
 住
 神様のおまけかも盲腸がある
 補欠でも入れば同じ子に勧め
 この椅子へ美人の秘書が付いてます
 談合の負け苦慮する天下り
 よっちゃんのおまけのようにして行く
 人
 おとうとの分まで兄は叱られる
 地
 店長はおまけパートが主戦力
 天
 おまけのはなしで主語になったグリコ
 軸
 穴馬をつい応援のおまけ好き

茨木市	藤井 正雄
和歌山市	土屋起世子
南あわじ市	萩原 狸月
大阪府	榎本日の出
明石市	桃谷 和郎
香芝市	大内 朝子
羽曳野市	吉村久仁雄
大阪府	桑田ゆきの
貝塚市	吉道あかね
河内長野市	坂上 淳司
三田市	尾崎 一子
河内長野市	木見谷孝代
和歌山市	柏原 夕胡
河内長野市	渡邊 修
鳥取県	斉尾くにこ
高槻市	富田 美義
青森市	守田 啓子
唐津市	山口 高明
堺市	内藤 憲彦
青森県	松山 芳生

初め教室

題 — しつこい

山口 光 久

推敲というのは句に限ったことではなく、文章でも同じことがいえるのです。

【添削】

原ガマ口はしつこい口に開けられる (蘭) 洋子

「……口」「……口」と言葉遊びのような感じがします。止めるようにしましょう。

言葉遊びは駄洒落も厳禁です。

添しつこさに財布が負けて瘦せこける

原勧誘の電話決つて声美人 (中) 修

句としてはいいのですが、題の「しつこい」が感じ取れないのが残念です。

添勧誘のしつこい電話声美人

原出来事をしつこく追及いやな癖 開子

「出来事」では漠然として掴み所がないです。具体的な事実が欲しいです。

添過ちをしつこく責めるいやな癖

原すつぴんにしつこく打込む化粧水道子

中八になっています。リズムも悪いです。

添素颜美人しつこく化粧せずに済む

原運悪くしつこい病に採りつかれ 勝治

「採りつかれ」が気になりました。一般的に「採る」は採取、採用など、摘み採る、

運び取ることに使うようです。

添運悪くしつこい病に取りつかれ

原天井からクルクルテープハエを採る (村) 恵子

「クルクルテープ」では分かりにくい。ずばり蠅取紙としたほうがいい。題の「しつこい」も感じられないです。

添蠅取紙しつこいハエをばつと捕る

原しつこい勧誘に思わず激怒す (株) 玲子

9・8の十七音字でよく纏まっています。が、リズムが良くないです。

添勧誘のしつこさついに激怒する

原ライバルのしつこい演技燃えあがる ミヨノ

添ライバルのしつこい演技板につく

原ゴミ出す日しつこいカラス知恵を出す 安子

添ゴミ出し日しつこいカラスじつと待つ

原座り込み泣いて欲しがり買わされる 亜希子

添座り込み泣いて欲しがり駄々こねる

原年重ねしつこい料理好まない 照代

添歳重ねしつこい料理受け付けぬ

原食事会しつこい病さようなら 冷子

添食事会しつこい病押し退けて

原押し目買いしつこく買って大損に 風花

添押し目買いしつこく買って悔いはない

原しつこさに愛のハートも枯れてゆく 弘子

添しつこさに愛するころ枯れてゆく

原セールのしつこさ財布も固くなる (細) 節子

添セールのしつこさ財布怒りだす

原出発まで止まる事ない発車ベル ひとし

添動き出すまでは止まない発車ベル

原演奏会しつこく練習暗譜です

添くどい練習演奏会は暗譜です

原一言がしつこいと言う反抗期

添一言がしつこすぎると反抗期

原妻の責めうん十年もさかのぼる

添妻の責めうん十年の過去はじめる

原頭ひねりしつこく投句考へる

添頭ひねりしつこく投句腕試し

原隣家から夜毎ピアノに悩まされ

添お隣の夜毎のピアノに鬱になる

原子供にはしつこく躰世の為に

添子供にはしつこく躰身のために

原電気消せしつこく云って我が忘れ

添電気消せしつこく言うが上の空

原母の足袋しつこい汚れ洗った日

添母の足袋しつこい汚れ鼻につく

原日長縁緑り言多くなる齢

添春の日長縁り言多くなる齢

【少しの修正で良くなる句】

原酒飲みはしつこく同じ話をする

添酒飲みはしつこく同じ話をする

原しつこい味も疲れた体しゃんとする

添しつこい味に疲れた体しゃんとする

原あつさりを生かす濃い味京老舗

登子

弥生

友子

こずえ

義雄

加代

たけ代

恵子

恭子

温子

つな子

絹枝

添あつさりを生かす濃い味京料理

原いつからかしつこい味にグッドバイ

添いつからかしつこい味へ嫁の知恵

原質問をしつこく飛ばし嫌がられ

添質問をしつこく飛ばし嫌われる

【入選句】

しつこい友挨拶だけでさようなら

嫌がつて逃げる子を追うしつこい子

説教も暗記する程聞いた僕

しつこいなあ葉わたしを離さない

しつこさに悲鳴を上げるスキャンダル

シェフ替り味のしつこさ復活か

しつこさに流石に負けた兜脱ぐ

雑踏の香りいつまでついてくる

叱られてでもでもママの後を追う

新聞のサブリのページもういいよ

お説教しつこいあまり逆効果

無視してもしつこくやって来るメール

七十肩しつこく右手苦しめる

しつこさが嫌で居留守をする電話

しつこさでいつも負けてる恐妻家

思い出はしつこくファウルした野球

旅に出る風にしつこくさそわれて

完熟のトマトしつこく陽を浴びる

しつこさに爺の財布が買うおもちゃ

孔一

国和

山久子

のり子

晶子

ひろ子

忠士

喬

凱柳

志津子

齊宏子

洋一

律子

くどくどと返事するまで付き纏う

念押しはしつこすぎると嫌われる

しつこい人ジョークとばして距離をおく

無農薬しつこいぐらい虫がつき

しつこさに負けてつき合う孫の釣り

ストーカーされてみたいねマドンナに

しつこさもねばり強さも極まで

【佳句】

洋食が続いて茶漬欲しくなる

ポトポトと蛇口しつこく愚痴を言う

おねだりは一年越しのネックレス

籍入れるまではしつこくプレゼント

苦勞性しつこく念を押している

【今月の推せん句】

あつざりと御免と言えば済むものを

「御免なさい」「ありがとう」は、あつざり

と言えないです。それが言えたら平穩無事。

しつこいのは他人か自分か。元をたどれば

しつこいのは自分か自分か。元をたどれば

しつこい味にこっそり水を飲む同居

嫁のしつこい味をじつと我慢し、咽を潤

す水を飲んでいる姑。同居の悲哀かも。

【私の句】

しつこい爺と言われないよう心する

惠

忠貞

紀美恵

モモ

治子

紀雄

文香

利子

和之

満知子

武人

昭枝

正子

川柳塔鑑賞

同人吟 村上玄也

— 7月号から

毎月の川柳塔誌を手にとると、投句の誌面は先ず自分の句を確かめ、その後友人や同じ句会の仲間の句を探し、後は流し読みしてしまうのが常です。

今回鑑賞を依頼されて時間をかけて一句一句丁寧に読んでみて、たくさんの素晴らしい句に出会うことが出来ました。その中から自分の今の暮らしや、今までの経験に照らして共感を覚えた句を取り上げさせていただきます。

深読みをすると怖さに突き当たる

亀岡 哲子

本当は大したことでもないのに、ふと深く考え過ぎてしまうと、どんな悪い方へと思考が進んでとんでもない恐ろしい事を想像してしまうことがあります。まさに深読みをし過ぎた結果の怖ろしさです。

あいまいな返事の意味はようわかる

安土 理恵

質問をされてはつきり答えられない。自

分にも経験のあることです。返事をあいまいにして口を濁していることで答えは察せられるという。いちいち穿っては聞き質さないと言う心配りなのでしょう。

温度差は一筆箋で来た返事

森山 盛桜

手紙を出した方は強い意志を持って何かを訴えたのですが、返って来たのは一筆箋で気の無い返事。何だか肩すかしを食ったような落胆を感じさせるのです。

あの人のコマーシャルならほんとかな

高瀬 霜石

CMに使っているタレントの影響力は実に大きいようです。視聴者は宣伝をしようとする商品とタレントを重ねあわせて見るので、あの人が宣伝してるのなら大丈夫だと勝手に判断してしまいます。

図書館を賢人らしい貌で出る

松山 芳生

任侠物の映画を観た若者が肩を怒らせて

映画館を出てくるように、図書館から出てくる時にはいかにも難しい本を読んできたと言う顔付になるのかも知れません。

アドバイスは要らない聞いて欲しいだけ

秋元 てる

胸の内を誰かに聞いて貰いたい。ただそれだけで、あれこれ忠告めいた言葉は要らない。聞いて貰うだけで気持ちが悪く着くのです。

足枷がとれた時にはもう飛べぬ

江見 見清

会社勤めに限らず仕事をしている間は何かと自由にならないものです。定年になってようやく自由を得たと思った頃には、今度は身体が自由が利かなくなっていて、折角これからは自分の好きなことがやれると思いきや、そうは上手くいかないと言う人間の哀れです。

よう辞めんくせに会社をこき下ろす

奥 時雄

自分の仕事を棚に上げて、悪いのは会社だ、上司だときき下ろすのですが、そんなに嫌なら辞めたらと言うと、そうはいかないのが宮仕えの辛さ。周囲に愚痴を振りまくのが精一杯の抵抗なのでしょう。

良い薬になったと言つておく火傷

鴨谷瑠美子

不注意で失敗をしてしまった負け惜しみをこう言つて、自分自身にも納得させているのです。

また一つ薬をふやす処方箋

堀 正和

齡をとるにつれて、いろいろ病氣が増えます。人間ドックも行くたびに病名が追加されて行きます。掛け付け医もどこか新たに身体の不調を訴えたと、その都度、薬を増やしてくれます。お蔭で毎食後煩張るように薬を飲まなくてはならぬ羽目になるのです。

相槌がくすりになつてゐる介護

福井 菜摘

介護とはフィジカルなサポートは勿論ですが、それ以上にメンタルな面が重要で要介護者の話をしっかり聞いてあげることが、何よりの薬になるんだそうです。

楽しくしてゐるのではない散歩

早川 遡行

運動をしないといふ主治医からうるさく言われます。少なくとも一日に三十分は散歩を勧められ、義務のように歩いているもの

ですから楽しいはずはありません。

シュレッダーにかけた髪の毛も切つた

居谷真理子

失恋されたのでしょうか。ラブレターも写真も全部シュレッダーにかけて、髪の毛も切つてと、思い出になるものは綺麗さっぱり消して新しい一歩を踏み出そうと言ふ意気込みです。

記憶にはないが日記にある事実

岸本 清

物忘れが酷くなつて、自分の行動にすらそんなことがあつたかなと思ふことがあります。しかし日記にはしっかりと記録されているので、こちらの方が間違いないのでしょう。

はち切れる熟女を乗せたバスツアー

宇野 幹子

世の女性方はお元気です。ましてや熟年層の女性は・・・最近には熟女の女子会なるものもあるそうで、まさにち切れるばかりのご婦人方の旅の様子が窺われます。

健保証割り勘負けをして元気

山田 耕治

若い頃には毎月給料から差し引かれる保険料が高く割に合わないとはやいていま

したが、この歳になつてどうやら今までの元を取りもどしている感じですよ。句のように割り勘負けしてるといふのは誠に喜ばしく結構なことですよ。健康に勝るものはありません。

失敗が財産ならばたんとある

金子美千代

失敗は成功のもとと言いますが、凡人にとっては失敗は重なるだけで、そこから何も学びとれないのが何とも菌痒い話です。

燃えながら沈む夕日もわたくし

大内 朝子

川柳への情熱でしょうか、或いは恋かもしれせん。夕日が沈みゆくように最期まで赤々と燃えていふという強い心意氣を感じさせます。

年号も三つ変わると生きにくい

井上 森生

大正ロマンの時代から昭和前期の混乱期、戦争からの復興期、高度成長とその後に続いたバブルの崩壊。そして今や失われた二十年を経ようやく立ち直ろうとしている日本ですが、それぞれの時代に生きている大きな戸惑いを感じられ、ご苦労をされてこられたのだと拝察いたします。

水煙抄鑑賞

— 7月号から

籠島 恵子

哀しみが来たのは句読点あたり

真島 久美子

この句を読んで嗚咽にも似たものがある
みあげてきました。その時は悲しんでいる
ところでは無く、こらえていたものが
溢れ出たように思いました。

引き際で男の価値を決められる

藤田 千休

男女平等は、男には分が悪そうだ。恰
好いところを見せても、家族を泣かせて
いるかもしれない。

重ね合う心だんだん温くなる

小川 イセ

長く続いた絆、お会いするたび愛おし
くなってくる。病氣ばかりしていると、
なおのこと、いいことばかり積んでおき
たくなってくる。掛け合う言葉もお互い
やさしくなっている。

棒切れを手当たり次第杖にする

津村 律子

棒切れと言わず掛けられる言葉や、心
遣いなど、嬉しい日々の糧であり、杖に
なっている。

五百羅漢男ばかりも森しい

土井 輝恵

そう言われれば、そうですよね。気が
付きませんでした。難しいことはさて置
き、もっと賑やかになるのでは。

ただいまをみようが刻んで待ってます

栃尾 奏子

みようが、ショウガ、大根おろし、ス
ダチ等、下手法料理をこれらで取り繕っ
ているのは私。季節感が好きです。

妻の留守もらったネクタイしめてみる

北澤 稠民

ちよつと笑ってしまいました。女の人
なら誰も覚えがあるはずですが、男の方
となると、ドラマになりそうな…。

夕焼けという答えがやと出る

工藤 千代子

本当は認めたくない事も、妥協したり
納得したりしているうちに、見えてしま

うものがある。

百名山わが大山も凜と在り

近藤 秋星

「ふるさとに富士に負けない山がある」
作者のお名前も憶えていませんが、大き
な賞を頂いた句でした。ふるさとへの思
いは同じと思いました。

行ける時行こう命が燃える間に

坂上 のり子

元氣でも行く気が起らない事には、前
に進めません。前向きさにあやかりたく
思います。

たくさんいい句に出会いました。

のどかに過ぎてゆく小さな幸せ

株元 玲子

四面楚歌川の流れが速くなる

鴨田 昭紀

クツシヨンの位置がとつても大事です

上田 ひとみ

一枚の紙が石より重くなる

高山 清子

傷ついた言葉の上を飛びこえる

楠原 富香

民族の詩歌 (26)

—『軍歌』について

三好 専平

へ此処はお国を何百里

離れて遠き満州の

75 75

へ勝つてくるぞと勇ましく

誓つて家を出たからは

75 75

へ海の男の軍艦勤務

月火水木金金

77 77

へ行くぞ行こうぞがんとやるぞ

大和魂伊達じゃない

75 75

2010年「俳人九条の会」で、小沢昭

一は朗々と歌った。亡くなる三年前である。

幸せなことに私はその時の彼の歌を聞くこ

とができた。金子兜太も同席していた。ちゃきちゃきの江戸っ子で終戦の四月に海兵隊より除隊後、焼け跡を見て、それが彼の芸の原風景となった。

スプーン一杯の砂糖に幸せを感じた彼。

私より四つ年上、軍国少年であった。

一条さゆりから大道芸や的屋などの啖呵にいたるまで、放浪芸に魅かれ庶民一筋に生きた。

また、幼い時から父の川柳に親しみ父の柳号をそのまま「変哲」と俳号にし、四十以上の俳歴を持つ。入船停扇橋を宗匠にして永六輔など「やなぎ句会」を発足させたのである。

最近、九条の会の発起人の何人かがなくなった。小田実、加藤周一、井上ひさし、藤本義一など。しかしこの草の根運動はますます盛んになっている。「戦争は悪だ」と歌った宮柊二の庶民精神は受け継がれていると言っている。2014年二月「建国記念の日」に小森陽氏の九条を守れ、という講演を聞いた。

私にとっても軍靴は懐かしいと同時に憤

どおろしい。私を軍国少年に仕立て上げ、天皇のために命をささげることを本懐とさせていたのだ。戦後の民主主義さえ信じられずに、ドブロクを飲んで、質上げデモに、勤務評定反対のデモにと明け暮れる日々であった。歌声喫茶で、カチューシャに恋をし、酒に酔っては、同期の桜を歌った。

高校の教師となったが、朝鮮戦争景気で、教え子たちの初任給やボーナスは私の何倍もあった。このちぐはぐな世の中で、公務員のストライキ権は剥奪されてゆく。日の丸掲揚は強行され、内紛のためもあり、打ち砕かれてゆく労働運動を傍観していた。さて、四千句にのぼる変哲氏の句より少し

満州に生まれて生きて猫柳
貧乏ゆすり嫌う女房と長き夜
遊女墓誰が活けたか猫じやらし
孤独にも慣れて尾を振る金魚玉
ひざ痛やおでんで酒の似合う年齢

(俳句で綴る「変哲半生記」2012・岩波書店)



「不甲斐ない…」を川柳にぶつける

前号では他人から受ける不愉快なあれこれを作品に昇華した例を取り上げました。今回は、自分自身を省みて不甲斐ないことや情けないことを正直に表した句を見直します。

誰しも、「目標を持ってしっかりと生きてゆきたい」とは思っているでしょうが、それはたまに立ち止まって反省したときの覚悟であり、ずっと意識しているわけではありません。普段はボンヤリしたり迷ったり、無駄な時間を過ごしていることが多いものです。そして、川柳の題材としては、立派な覚悟などは自己満足であり、読者としては面白くもなく白けるだけです。一方、不甲斐ない自分をさらけ出したものは、みんな似たようなものですのでここに届きます。

出たものの今日一日をどう過ごす

片山かずお

公園の椅子に切られた首を干す

澤田 和重

冷めた目で人の流れを見て無職

中居 善信

盛り場の易者に浪費咎められ

石田 隆彦

そういえば昨日もここで転んだな

井丸 昌紀

日頃は川柳やボランテアなどで忙しくしている人でも、たまには所在なく時間を持て余すときがあります。右のような内容はあまり自慢できることではなく、他人には知られたくありませんが、それが「多面体である自分の一面」であるのは事実ですから、正直に表明すると面白い句になります。文芸に取り組むということは、「勇気を持って自分の恥ずかしいところをさらけ出す」ことに他なりません。

書き出してみればさもし欲ばかり
敗因をつねに他人の所為にする
ケチくさいそんな自分が許せない
融通無碍いや核心が僕に無い

永田ふき子
伏見 雅明
笠嶋 惠美
吉村久仁雄

ボツクリと逝くほど善人でもないか

山口 高明

先ほどの5句は、自分の行動や姿を客観的に眺めて詠っていますが、右のように自分のところを見詰めた句も、「ああ私も一緒!」と共感をもって迎えられる。

傲慢にならない心情や不甲斐ない姿を述べるのは、自分に自信のある人しか出来ないことです。自信のない人は弱点を隠そうとするので、このような句は作れないのです。もちろん、右のような心情も先ほどと同じように、多面体の一面に過ぎず、そのことは読者も充分に承知しています。

櫛掛けしたが体が動かない

小谷 集一

お洒落して行くあてもなし鏡拭く

畑中 節子

ウエストの緩さ睡魔に襲われる

木本 朱夏

雨の日は鼻毛を抜いてごろ寝する

三島 淞丘

読みかけの本を落として今日終わる

山口 不動

冒頭に挙げた5句は外出先のことですが、右は自宅における自分の姿を自嘲気味に表現しています。本欄No.37の「ひとりを楽しむ」において、「川柳作家は一人に強く、一人を楽しむ」と述べました。右それぞれ、所在なくしている自分を眺めて面白がっていますが、それが余裕であり強さであることは言うまでもありません。拡大せず縮小せず、ありのままの自分を正直に表現するのは簡単なようで難しいものですが、それが川柳の基本であり要諦でもあります。

「無印笑品」

高瀬 霜 石 著

板垣 孝 志

酒飲めぬ人と何から話そうか

霜石さんに初めてお会いしたのは国民文化祭静岡大会の前の晩、酒の席だったのだが、どちらも人見知りをする性格？出雲弁のズーズー弁育ちの私も、筋金入りの津軽言葉は解りかねて、ご挨拶だけした記憶がある。

エーゴよりちと難しい津軽弁

英語ではなくエーゴ、文章の中にも訛りを入れる手法と気遣いは只者ではない。その気遣いと川柳の眼は誰もが見逃しやうい個所にも及ぶ。

図書館で会う爺さんは同級生

見渡せば凶器だらけの台所
父さんは平社員だが正社員
早起きをすれば晩酌まで長い

映画と酒とユーモアが大好きな作者の

サービス精神が、句集のあちこちに鑲められている。

ひとり食うカレーステテコにこぼす
せめてラクダのバッチだったが目立たずにすんだのに・・・

口だけは閉じて死にたいものである
漫画ちびまる子ちゃんいさんは口が開いたままだったので、お祭りで使う手拭いで縦にくぐられた。有名な話。

点滅をはじめたぼくのバツテリー
前頭葉に毎日起きている雪崩
わたくしは多分全身トコである
全身にイエロー・カード貼っている

やや飲みすぎのお身体には自覚症状。
健康管理にも目が行き届いておられる様子である。出来ることなら

肝臓も妻もびつくりする禁酒
よりも休肝日程度がよろしいのでは？

時が過ぎると意味不明になりがちな時事川柳の中で必ずや生き残る秀作。

10万年たったら開けていい 祠

第三次世界大戦まで生きる
草食系男子急増国家危機

歌手の新沼謙治の歌に「津軽恋女」がある。この歌の中に（雪）の文字が

四十九回も出てくる。北国と雪を離しては語れない。

雪国や美人の腕も太くなる

雪・計報・雪・計報・雪・計報・雪

何百年・何千年も昔から長いながい冬を埋もれて過ごして来た人々は、立ち向かって勝てぬ相手に対して、ただただ黙って耐える術を身につけた。

やさしさの本質は耐えることにあるのだろうか？

自殺なら自由 安楽死はお縄

「ダレニモイイマセンカラ ワタシはロシテクダサイ」老人ホームや医療現場の片隅には、悲痛な呻きも混じる。安楽死をさせた医師を訴えたのは、誰だ。

略奪の歴史の果ての美術館

銃と力で分捕った戦利品。こんな恥ずかしいものを自慢そうに並べる美術館。心でものを観る作家の本領が伺える。

笑って読み飛ばしそうな句の中にも、深い悲しみや風刺がさりげなく忍ばせてある。そして本当のユーモアは哀しみの中にある。

たいていの答は空に書いてある

霜 石

『麻生路郎読本』余滴 (22)

「矢車」と路郎作品 ④

榊原道夫

「矢車」二一号（明治43年12月）に、川

上眉愁（後の三太郎）が「現代川柳作家の勞働及其價值」を発表している。自然主義の影響を受け、古川柳とは違って個性的主觀の句を目指すという思いが述べられた文章である。後半部分を挙げておく。適宜ルビを振った。（以下同じ）

（若い川柳作家たる僕等は遠く彼等と離れて新しい異なつた徑路を取つて行く。僕等は皆正直である。故に自己の生活、周圍、感じの外は之を歌ふことを欲しない。彼等川柳作家の如き其國古來からの思想に支配せられて居て教訓と傳習とを放れる事の出來ない類性的主觀の句や、藝術的價值の上から見て頗る貧弱な興味中心の技巧の句で満足することが出來ない。空々しい幼稚な其の勞働には到底馬鹿々々しくて耐へ得られない。即ち僕等の川柳は自然主義的表象

詩に發展するのである。

自然主義的表象詩とは自己の生活、周圍、及び感じに驚異の眼を向けて懷疑と生慾の刺戟とを歌ふのである。此の事に就ては他日之を發表するが、簡単に云へば從來の形式によつて個性的主觀の句を作る事である。之は何れ多少の異論を拜聽する時もあるうが僕等は勇猛直進して此新思潮より更に新思潮を生んで遂には文壇に新しい時代を創設して行く心算である。（四三、一〇、三〇）

文中に「此の事に就ては他日之を發表するが」とあるが、三太郎は、次号の二二号（明治44年1月）で、「私の觀念と川柳に對する主張及作品」と題して、自分の川柳に對する思いを情熱的に語っている。約三千字の長い文章なので、前半は要約しながら紹介し、結びの部分は全文挙げておく。

人の生存は生まれたときから死の掌中にあるといえる。そのような一生に名譽や成功を求めて努力しても何の甲斐もない。私は、ただ「生きて居られる丈」生きてゐる。そのような私には、生きる樂しみを味わうことができないので、岩野泡鳴（自然主義文學者）の所謂「永へにも生に醉」うには、何かの慰藉にすぎらなければならず、私にとつては、それが文學であつた。酒と女によつて刹那々々を生に酔い、その悲しき思ひ出を川柳に歌つたのである。

ところが、その川柳があまりに稚拙で、川柳作家は愚劣であつた。皮肉、滑稽、洒落などを要素にしている穿ちとか軽味などは、人生などに何のまともな考へもなかつた時代のもので、それを今でも信奉している古句耽美者は愚かである。また、写生派の客觀的川柳は、人生に没交渉で本能の聲がない。また、小説のようなことを一七字にまとめる一派がある。筋の面白い芝居的川柳で雑誌では最も盛んであるが、自己の感情の出ていないくだらない川柳である。

（私は私の川柳が、最も藝術的價值のある、又當然川柳の至るべき道であると思つて居る。私の川柳は酒の苦味と女に對する

享樂の味だ。自己の内部の強い色彩の、充實した感觸を現はして居る。誦し終つて心の底の奥に、Somethingの一角が深く刻ま

れて、現實の苦痛を最も痛切に、現はしたものと、希ふて居る。此等の感じを現はして、

私は慰めて行くのである。何か強い刺激を受けた跡の様に、眞の實感を其の儘、客觀を離れて、純乎とした自己生活の内部を、忌憚なく歌ふのである。だから私の川柳は、從來の川柳の範圍……古句的、寫生、客觀

の技巧、……を超越して居るのは勿論、他の小説、詩歌をも私の川柳の領分に入り來つて、私の川柳と同じ効果を收むる事を許さない。而して他の文藝と並行し得る事を信じて居る。茲に至つて明治に於ける、私の川柳は、敢て川柳史にのみに非ず……偉大なる價值を生ずるのである。……*闇の盃盤闇を盛りて、我は底なき闇に沈む、斯くて夢より夢を浮び、永へにも生に醉はん。

(一九一〇、一二、七)

*これは、岩野泡鳴の新体詩集「闇の盃盤」(明治四十一年四月)所収の「闇の盃盤」からの引用。「闇の盃盤」の後半部は、「酒のかをりに泡のいのち／甘き歡樂ねむり誘ふ／闇の盃盤闇に盛り

て／われは底なき闇に沈む／かくて夢より夢を浮び／とこしなへにも生に醉はん

個性的主觀の句を目指そうとしていた當時、通俗的なイメージのある川柳の名称を改めてはどうかということが話題になった時期があった。「矢車」一九号(明治四十一年十月)の「川柳改名の議」(紫痴郎)の要点をまとめておく。

八月二十四、横浜毎電川柳会の席上で、川柳改名の議が起こり、具体的な議案はなかったが、改名案は満場一致で可決した。我らの唱える短詩は、芸術の一つで人生のある思想を詠うことを主としているから「想句」がいいと思う。想は理想にも思想にも連想にも通じ、人を想い我を想い生を想う意にも通じるのである。

紫痴郎は、他によい名称があれば、意見を寄せてほしいと頼んでいる。「矢車」同号では、「矢車」社友近藤京魚が、「寸鉄人を殺す」の意味から「寸句」と呼びたいと言ひ、二〇号では、同じく社友の禿鶯が、「時代詩」と呼びたいと言っている。それらに

対して紫痴郎は、二二号「再び川柳改名の議」で、疑問を呈している。

「寸句」については、川柳は「寸鉄人を殺す」という範圍にとどまるものではない。「時代詩」については、川柳に限らず、すべての詩を「時代詩」と呼べるのではない。また、「短句」という名称は、わざわざ「短」の字を付けなくてもよいし、「玄妙詩」という名称は、短い詩だという意味が含まれていない、などの疑問を述べ、次のようにまとめている。

「今日の川柳なるもの、性質を視るに、一般詩界と異く物象を明示するを天職と心得た高蹈派の時代は過ぎて象徴的十七文字を以て或る思想を暗示せんとする傾向となつたのであります。かゝる傾向を有する今日の川柳の性質を思ふときは「日夜斷る事なき吾人の妄念」と言ふ文字が甚だ適合して居るやうに感じて止まないものであります、ソコで私は一歩進めて川柳は吾人の日夜斷る事なき妄念を短き詩形即ち句に現した短詩であると云ふに何んの憚る所があらうかと半ば斷定的に考へ傾たのであります。(中略)故に更に力有「有力」か)な意味ある文字をお唱ひ(「へ」か)になる

方が現れる迄は私の従前の考なる「想句」なる文字を以て今迄の命名中の勝者と甚だなめげな事ではあるが思つて居るのであります。

紫痴郎は、「想句」という名称に自信を持っていたようだが、「矢車」誌上で採用されることはなかった。

「矢車」二二二号（明治44年1月）から二四号（同年3月）までの作品の中から、筆者がチェックした句を挙げておく。

二二二号

霸氣に滿つ友の行衛や海赤し 紫痴郎
あひびきの女に銀のなやましと 眉愁
とある街に看板描くさま見て在ぬ 青明
日南の窓の擦^ひの眠たうなりぬ 同

二三三号

列び歩く知らぬ女の青い肩掛 五葉
物足らぬ日曜なりし哉灯を點す 水府
我がまゝを言ひつゝのりたる後の火鉢 青明
天水桶に幼なかりし顔を思ふ 荷十
眞赤な林檎もてば冷めたく 同

二四四号

その媚ふるし繪端書やの娘 聴鼓
怖ろしい工場の蔭の赤い月 破魔杖

二五号（明治44年4月20日）は、二周年記念創作号で、一七名参加している。紫痴郎、青明、五葉、半文錢、荷十、水府などの作品は、一頁二段組みで三二句から三五句掲載されている。路郎もこの号から参加し一七句発表しているが、路郎作品を紹介する前に、他の人の作品を挙げておく。

眼のない魚となり海の底へとも思ふ

紫痴郎

春の野に牛追ふ娘を戀して見たい 鹿鳴庵
便りない汽笛が遠く鳴つてゐる 五葉

音淋し一秒一分一時間 半文錢

堪へ難し野に入り森を出て又野 同

造花にキツスするも小さき吾が戀 竹馬

また今朝も新聞の來てゐるが悲し 荷十

懷手して花見る我的細き影 同

羽織吊る影につくゝ身のやつれ 水府

我れ一人立つ踏切に昼の月 綠天

「矢車」二五号（明治44年4月）で、六極庵（紫痴郎の号）が「御兩所へ」と題した文章で、当時の詩歌雑誌である「創作」二卷四号、明治44年4月1日発行「誌上」の若山牧水の文章を紹介している。「矢車」の作品が当時の有名歌人にも注目されていた

ことが知れる。その部分を、「創作」（国立国会図書館所蔵）から引用する。後ろから七行目の「僕は思つた」までが「矢車」での引用。その後の部分も載せておく。「創作」の編集兼発行者は、「若山牧水」（昭和31年・角川書店）の著者である佐藤利吉。牧水が引用している句は「矢車」二三三号（明治44年2月号）に掲載されたもの。矢車で用字を（ ）内に示す。

「机邊より」

牧水生

▽「矢車」といふ川柳の雑誌が下谷から出てゐる。川柳のことは少しも知らないが、これは極（こ）く新しい心を持つた人達の間で出来てゐる雑誌かと思はるる、中々面白い句がある、二三を挙げて見れば、

偶とわれ（我）を忘れて唄ふ*喇叭節

（五葉）

欠伸してさと（覺）る淋しい自己の影（同）

煙草ばかりす（喫）つて友達歸りけり（同）

よし町を流るる（ ）三味のなつかしさ

（眉愁）

ペン止めて淋し安治河口の笛（水府）

物足らぬ日曜なりしかな（哉）灯を點す

（同）

君はまた僕の嫌ひなゴム雪駄 (青明)

何時の日の二時か止まりし儘 (まゝ) の
時計 (ウオツチ) (同)

我が儘 (まゝ) を云 (言) ひつりのりたる
後の火鉢 (同)

など尚ほ他にも多い。

▽此等を読みながら偶と考へた、土岐君の歌の呪い所はこれと同じぢあないかと。讀んで残つた感じは實によく似てゐる。そして却つて斯ういふ形式で行つた方が三十一文字のろく／＼した形より遙かに中の材料に適當して居り、遙かに藝術品の匂ひがしはせぬかと僕は思つた。斷つておくが斯ういふねらひ所を輕視したりなどして斯ういふのでは夢更らない。現に僕自身も昔から斯ういふ所によく手を出して居る、また哀果労働者から答ふるのにもきまりの悪い位い氣障な皮肉 (?) を云はれるのが恐いから御丁寧に斷つておく。(二月二十七日夜)

*喇叭節は、演歌師の添田啞蟬坊 (一八七二—一九四四) 作。明治38年末から39年にかけて大流行した。

前回の余摘に記したように、明治42年4月に「葉柳」が終刊した後、路郎はしばらく

く川柳から遠ざかつていたようだ。明治43年3月、路郎 (満21歳) は大阪高商本科を卒業し、同年8月14日 (日)、関西川柳社例会に千松の名で出席する。同年10月8日 (土)、関西川柳社句会の帰りに水府と初めて話をする。44年3月19日 (日) には、路郎が間借りしていた下宿で、十五銭の肉鍋を取り、「足」百句会を開くほどの仲になっていた。そうして、「矢車」二五号 (二周年記念創作号、明治44年4月) から、路郎も「矢車」に参加するようになった。

街の色

麻生路郎

輕き快感くすり湯の匂ふ晝

粉煙草に寢醒の朝のうら悲し

打ちあけもせず淋しげな友の顔

蠟涙に捨湯に匂ふ夜の色

日曜の朝の日ざしの強くあかるき

譯もなく壁にもたれて雨を聴く

いつの頃よりか淋しき顔となりぬ嫁き

し姉

雨の色黄昏の色悲しき日

何かなし繼母恨む日の若かりき

忙しそに話して姉の歸りけり

鈍色の空に吐息の色思ふ

何か言ふらしい女の顔を凝視め

日曜の黄昏をまた齒が痛む

暗い室が淋しくていゝ街の色

遅き朝を盥の水に深く脂

足のほとび湯槽の午の眠たうなりぬ

留守を待つ室に日の射す磨硝子

筆者がチェックした句は (譯もなく) (鈍色の) (日曜の) (暗い室が) の四句。心情を表す形容詞「悲し」「淋し」などが、ストレートに用いられた句が多い。(暗い室) の句も「淋し」を用いているが、「いゝ」に意外性を感じてチェックした。

「訂正とお詫び」

前回の余摘に、(二二号 (明治43年12月) では、新川柳は課題吟を掲載しているが、二二号 (明治44年1月) 以後、雑吟のみの掲載となる) と言いたが、二三号 (明治44年2月) では、新川柳の中に課題吟も掲載している。二四号 (明治44年3月) では、新川柳と課題吟を別の項目にしている。二五号は二周年記念創作号で、雑吟のタイトルの下に、(創作) と入れており、「新川柳」の文字が消える。この号以降、雑吟は(創作) として発表される。訂正してお詫びしてお。

(次回に続く)

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。
- ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
- ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を受賞しない。
- ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には受賞しない。
- ⑤ 六賞の選考委員は、その任期中は賞の対象としない。
- ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、下記の通り定める。
- ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
- ⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句中から主幹が決定するものとする。
- ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

(備考)

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成二十四年から実施するものとする。

二賞選考規定

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選者は主幹・理事長・副主席・副理事長・編集長とする。各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(5点)、第二席(4点)、第三席(3点)、第四席(2点)、第五席(1点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 【4】≡ブロック (11) ≡選者数
【東日本】(2)北海道・東北・関東・信越・北陸・東海
【近畿A】(4) 大阪
【近畿B】(2) 滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
【西日本】(3) 中国・四国・九州・沖縄・海外 合計13名
- ⑤ 地方関係の選者は、適宜交代制を取り、均衡をはかることにする。
川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

平成二十六年年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

小島 蘭幸・西出 楓楽・川上 大輪・新家 完司
河内 月子・木本 朱夏・鶴田 遠野

第二次選者（十三名）

本社関係（二名）

小島 蘭幸・西出 楓楽

地方関係 【4】 ≡ ブロック (11) ≡ 選者数

【東日本】(2) 北海道・東北・関東・信越・北陸・東海

菊地 政勝・三浦 強一

【近畿A】(4) 大阪

池 森子・前 たもつ・宮西 弥生・山岡富美子

【近畿B】(2) 滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山

西口いわゑ・米田 恭昌

【西日本】(3) 中国・四国・九州・沖縄・海外

川崎ひかり・川本 畔・鈴木 公弘

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選
択して応募下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔
賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間
違いのないようお願いします。

平成二十六年年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 竹治ちかし 大内 朝子

一路賞 北野 哲男 小川てるみ

各地柳壇賞 村上 玄也 松本 文子

本社七月句会

◇七月七日(月) 午後一時
アウイーナ大坂

席題「次」 新家 完司 選

次世代へつなぐ路郎の志

子育て期自分二の次三の次

次なのに前の患者の長話

次々に意見は出るが金はず

次のギャグなかなか出ない一発屋

バレンティンダメならエルドレッド打つ

繰上げのまさかを待っている次点

河馬がいい次に生まれてくる時は

次次とジャブを繰り出すきつい妻

次世代へ老いが守っている棚田

記者会見次は泣かずにいたします

ワアワアと泣いている議員次はダメ

全没に腕を磨いて次回こそ

次の手は何か手強い隣国よ

安倍さんの次を決めた方がよい

次の世も一緒に今を言うておく

しんどいから長にはならず次でいる

友達を次次消している名簿

二次会があるから顔を出す句会

今のとこ二次会までは付き合える

取りあえず飲もう話は二の次だ

まずビール次は熱燗締めは耐

目くばせをした者で行く三次会

この次は俺が奢るとそれっきり

次の世も朝な夕なに飲みまくる
あわて者次発の電車とび乗った
この次は許さないよとまた許す

次世代に渡す道路は舗装する

次は無いこの人と決め五十年

せっかくや次も使おう千羽鶴

孫うまれ二の次になる身の回り

シャボン玉次つぎ消えるお友達

七夕や次に住む星ありますか

次の手をかくして居ます夫には

次の世もその次の世も是非おこ

次の世は違う女を妻にする

気をつける次に結婚する時は

佳

この次も人間だとは限らない

次の方どうぞエンマが呼びびです

別れたら次の人などもういない

笹飾り次もあなたと添うと書く

次の世も妻と一緒に笑いたい

人

また明日へ傘の雫を切っておく

地

次のオペまでの時間を楽しもう

天

杖の先次あたるのは吉だろう

軸

次の日のことなど知らぬ三次会

次

玄也

克子

則彦

あや子

直樹

無限

満作

無

まつお

朱夏

万紗子

雅尚

朋月

瑠美子

哲子

としお

桃花

大輪

恵美子

朱夏

萌子

義

武臣

弘光

勝弘

菜月

六點

哲子

寿之

扶美代

恭昌

唯教

喜八郎

安造

紀雄

賢子

たもつ

正雄

弘光

桃花

篤

靖博

妙子

直樹

楓葉

朱夏

朱夏

次

朱夏

次

朱夏

次

朱夏

次

朱夏

次

兼題 「見渡す」 山岡富美子 選

敏治	兼題「見渡す」	山岡富美子	選
美智子	祥月命日先師を慕う顔ばかり	みつ子	
あや子	ハルカスの展望台はトンボの眼	行兵衛	
蕉子	祖父父母葬り見渡せば枯野	保州	
ばっは	天の川はるか会いたい人がいる	と一な	
正雄	茫茫と広野踏み出せねばならぬ	真理子	
美羽	眺めてるだけでは済まぬ高齢化	千代	
堅坊	見渡せば虎の監督ばかりなり	哲夫	
武臣	あこがれを抱けば視野が広くなる	喜八郎	
武彦	見渡せばまだ働ける高齢者	葉子	
万紗子	見渡すとみんなお利口そうに見え	かずお	
哲子	見渡してやっぱ隅の席に行く	まつお	
紀華	見渡せばおひとりさまの観覧車	かずお	
すゞ代	桂浜から世界見渡してた竜馬	加お里	
ばっは	見渡せば年金受給者ばかりなり	玄也	
賢子	昭和史を捲れば一面の焼野	義	
弘風	船渡御の熱気見渡す天満橋	扶美代	
キヨミ	隅に居て寡黙なドンが目を配る	直樹	
日の出	見渡してどんぐりだけとみた不覚	(失)五月	
惠美子	前後ろ見渡し後継者を探す	耕治	
	見渡せば男ばかりの混浴湯	善純	
	ハルカスから見れば大阪味気なし	ばっは	
	見渡せば整骨院が増えていた	瑠美子	
	見渡せば道は明日へ真つしぐら	日の出	

世の流れ隅に座れば見渡せる
敵か味方か前後左右の数をよむ
見渡せばみんなそこそこ評論家
思い切り吠えて望観しています
見渡せばハトを蹴散らすタカの群れ
ハルカスが浪速の火の見やぐら役
いくさの愚わる歴史を見渡せば
あの頃と見渡すかぎり変りはて
俯瞰して探す地球の病むところ
見渡せばわたし一人の大都会
50階ぐらゐで見えぬ近未来
見渡すと独りじゃないと思いたい

兼題「ばらばら」 両川 無限 選

反論が破れかぶれになっている
リビングに家族揃ったことがない
ばらばらの意見リトマス紙をくぐる
オルゴールラジオもバラされたまんま
ばらばらがひとつになってゆくまつり
ばらばらの色を集めて虹きれい
保育園立つ子座る子横向く子
ばらばらに逃げて隠れてまあだだよ
朝食に家族揃ったことが無い
ばらばらのユニホーム着て草野球
ばらばらをついにさせた父の骨
ババゴルフママはエステでボクは塾

見渡せば前も後も風ばかり
見渡してゆつくり食べるあんこ餅
見渡せば枯野わたしの絵は未完
見渡せばマチュピチュに似た千枚田
家の中ゼーんぶ妻のお気に入り

三代代思い思いに朝を食う
ばらばらの口を封じたのは諭吉
一つ屋根ポップス演歌シューベルト
ジクソーパズルばらばらにせず飾つて
政策はばらばらだけど数が要る
引き裂いても愛の磁力に勝てません
ツアーガイド旗一本で客東ね
ばらばらの家族を母が取り仕切る
完璧を求めてハートばらばらに
口ぐちに酒だビールだ焼酎だ
分解をしたが元には戻せない
乱立の野党に欲しいまとめ役
めいめいがスマホしながら食事会
ばらばらの客席前座修業中
右脳左脳ばらばらになる物忘れ
ばらばらに散つても根づくこぼれ種
ばらばらの家族まとめたガン告知
まだ夢に見る落ちてくる焼夷弾
分解掃除ばらばらまでは出来るほく
どの辞書が正解なのか送り仮名
消しゴムのカスばらばらと散る微罪
ばらばらの記憶つないで書く自伝
ジグソーパズル私の脳を弄ぶ
祭典が終るとたたむ仮舞台
ばらばらな個性を包むユニフォーム

佳
ジグソーパズル解けたら森を出てみよう
両の手をこぼれていったのは愛か
ばらばらを超える積み荷の紐の位置
パズル一片行方不明のまま夕陽
それぞれの特徴生かす五本指

人
ふり向けばわたしひとりのカーニバル

哲男
雅明
富美子
敏治
篤
進
黒兎
かずお
美羽
誠
弘光
篤
克己
楓
誠一
宏造
勝弘
敏治
明子
幸雀
美智代
寿之
克子
すみ子

完次
玄也
弘光
扶美代
朝子
真理子
正雄
とーな
六
六
耕治
キヨミ
六
点
葉子
喜八郎
よしみ
朱夏
宏造
裕之
喜八郎
舞夢

地
見渡すと小さな幸が笑つてた

昌代

天
ひたすらに生きてばらばら食べこぼす

軸
見渡すと味方はみんな消えていた

朋月

軸
ばらばらの不協和音はまだ序曲

兼題「涼しい」 植野美津江 選

風鈴の富山の仲間涼を呼ぶ
冷めんを始めましたとお品書き
涼しいと今年も植えるゴーヤ苗
ひまわりよ涼しいはなししませんか
千枚田抜けて涼しい里の風
草むしり終えてクラー有り難い
年金日涼しい顔で孫が来る
パワースポット背筋に涼しさが走る
フルコース鰻でわいわい暑気払い
閑議では涼しい顔の自衛論
花莫盛でまどろんでいるロスタイム
花子いまスカイブルーの季を過る
王様は涼しげ裸とは知らず
何もかも彼も無くし涼しくなりました
コンビニがあると涼んでいく夏日
歳時記が悲鳴あげてる夏に電
汗かいてかいて涼しくなりましょう
かき氷焦りも喉で間延びする
涼しげに浴衣着こなす恋してる
掛け布団一枚欲しい夏の夏
軒のない家に風鈴やつと吊り
責任はないと涼しい顔でいう
美しい国で涼しくなるモラル
さりげなく人事が僕の背たたく

智彦 英旺 よしみ 惠美子 たもつ 千代 紀雄 美龍 直樹 唯教 富美子 哲夫 幸雀 舞夢 まつお 武彦 大輪 正雄 克己 哲子 唯教 和夫 武彦

極楽の余り風吹く茅の輪から
ムームーという涼しさの虜です
丸刈りにするとクールな眉になる
紀伊国屋の涼風借りて待ち合わせ
星空と風鈴ひびきあっている
断捨離にやつと涼しい四畳半
夫のいないところがとにかく涼しい
あばら家を前後左右に風が抜け
風通しよい通帳をひとつ持つ
好調なときは涼しい風が吹く
こたわりが消えたかとても涼しい目
ネコに教わる涼しい風の通り道
そんなこと言うたか鼻毛抜いている
佳
欲捨ててからは涼しい顔になる
おはようの声が涼しい土手の道
涼しい顔をしている悪さしてきたな
摩周湖の風送りますカモメール
涼しい目をしているほうが鬼だった
人
原発ノー今年の涼も洪団扇
地
吊しのぶ待つひとがあり涼をよぶ
天
疑いを持たぬ涼しい目に負ける
軸
死ぬの生きるの涼しい顔できたふたり

楓楽 五月 蘭幸 義子 完司 敏治 義茂 富美子 光久 喜八郎 かずお とーな 保州 耕治 大輪 耕治 信子 淳司 惠美子 誠一

兼題「未練」 小島 蘭幸 選

W杯未練残さずゴミ拾い
元カレのアドレス削除出来ぬまま
かと言って人間やめる気はないが
あの笑くば未練ないと嘘になる
とつくりの底を出て行かない未練
未練抱く傘のしずくが乾かない
未練などないが昭和は懐かしい
花柄の小箱に入れておく未練
五欲まだあり未練がましく生きている
母残し父のケムリが揺れている
断捨離と未練にゆれている傘寿
まなうらにへばりついているのは未練
切り捨てたはずの尻尾が付いてくる
ストーカーする程未練ありません
ふり向かぬ背中を消えるまで見つめ
発車ベルが別れの瞬間を作る
もう少し待って未練が乾くまで
小引出しに入るくらいにした未練
未練またつもの七夕さまは雨
唇を噛む傷痕が残るまで
振り向いた未練心が闇になる
初恋の思い出徴ることがない
独り飲む肴は古い恋話
逆縁の忌日に蜚来て灯る
大酒をくらい未練はたち切った

克己 いさお 保州 万紗子 楓楽 克己 求芽 能子 恭昌 美津子 美羽 克己 正春 見清 信子 義 是こべ 無限 喜八郎 寿子 弘一 かずお 哲男 月子

未練などないと嘆息を切る未練
残り火は夕陽の赫に負けました
あだし野にぼつと螢が飛ぶ未練
Sサイズだった捨てずに取っている
未練には長いリボンが付いている
追いかけて来てよ喧嘩をした後は
握られた心のままで生きている
鳴き切った蟬は未練を残さない
大嫌いという前置きにある未練
二次会を途中で抜けて行く未練
この世には未練はないと言う元氣
茹すぎたほうれん草にある未練

佳

もういいか忘れていいか白い雲
封筒の上さ迷っている未練
右はひだりに左はみぎにある未練
面影をおいかけている雨の坂
ふる里を通過未練は見せられぬ

人

未練というぬめりほぐしている手櫛
満潮になると未練がやって来る

地

想いを絶ち切れぬ水引草が咲く
私の土台になっていた未練

天

森中恵美子

義子 直樹
蕉子
朱夏
信子 義
真理子
大輪
文代
まつお
和夫
朱夏

すゞ代
扶美代
美津江
富美子
瑠美子
あきこ
奏子

句会 燦 燦

6月句会を読む

の井 うえ いい とん
井 上 一 筒

化け方の下手な狸にハイ拍手

真理子

キツネとタヌキとムジナが寄って化け方のコンペをした。ふくよか美女に変身したタヌキの早業が勝ったかと思われたが、尻尾を仕舞い忘れていた話。昨今のSTAP劇場を連想させる。

不謹慎な拍手を心の中でする

求芽

近所在住のいつもの憎々しいばあさんが、UVカットの傘差してツンと澄まして通りかかる。その時、何に躰いたのかドサリとその場に倒れた。後ろに従っていたじいさんも同時にその上に倒れ込んだあの日。笑ったのか笑わなかったのか、拍手したのか、しなかったのか。日記には書いてない。

八方へ備える多面体の美女

洋

単に、八方美人を句にしただけではなく、全身にLEDの色光をまとったヤマタノオロチのようなもののイメージかとも考えてみたが、それでは「美女」とも言えず。やはり昔ながらの多方面美人のことなのか。

辞世の句は用意してます花吹雪

朱夏

「風さそふ花よりもなほわれはまた・」は浅野内匠頭。あまり知られていないのは、葛飾北斎の「ひと魂でゆく気散じや夏原」。掲句作者の辞世を聞くのは今から約40年後のこと。

中国と西瓜の種の飛ばし合い

完司

「小日本は踏みつけておけ」と毛語録にあるのかも知れぬ。梅干の種噛み割った歯は何処インプラントにウン百万を掛けて、結局失敗だった人がいる。拍手は下から石段が長い

見清

金毘羅さんのご存知石段駕籠、上り365段が5300円。

お世なお世

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

耕せば瑞穂の国だ土地はある
何かあるいつもより妻優しすぎ
我酔っ払うゆえに我有り
天来の才能あれば苦勞せず
あすも有るあしたも有るという油断
被災地へ鬼の小さな愛がある
憲法は不戦の誓い書いて有る
どこにでもあるが粗末にできぬ水
仕事さえ有れば老け込む歳でない
追伸に愛有る言葉書いておく
帯解いて気の緩みたる夜半となり
兵児帯が軽い噂をたてたがる
寂聴の法話私の緑地帯
名文句つい手がのびる本の帯
堅い意志お金積んでも解かぬ帯
百万円の帯封切った事がない
裏のうら読まれて帯がはずせない
力士のまわし究極の男帯

一步 直子 昌紀 公平 靖子 勝弘 黒兎 克己 篤信 重信 美龍 妙子 五月 日の出 昭

見てみたい帯のかかった札束を
携帯を上手に使い知識える
義父の談オールナイトで夜が明ける
苦勞さえオール美化する歳になる
子供の目オールマイティババとママ
渦巻にオール腕を試される
孫曾孫オールスターの祝事
したたかに生きて全てを許し合う
目に見える物が総てじゃないんです
母の花壇オールシーズン花盛り
さり気なく席立つ人にありがたう
声かけをしてくれる元気です
思いやり七分見返り三分 微々
知らぬふりしていることも思いやり
清潔な下着をいつも用意する

和歌山三幸川柳会

武本

中卒が国を興した上野駅
輪の中で溶けて無色になつて
お花見の真ん中にある車椅子
喜怒哀楽すべて詰まった皺の中
真ん中のハソが拗ねたり甘い
真ん中にあるべきへそがないです
真夜中の蛇口が鬼を眠らせぬ
中ぶらりんどうも主役がとまらず
中に立つ柱光っている同居
ハイハイと背中を向けて返事する
大勢の中のひとりで旗を振る
日本人の中流意識下落する

恵子 順子 廣子 安代 満知子 舞蹴 半銭 柳弘 克博 桃花 福貴子 美世子 千歩 舞夢 芳香 碧報 寛 起世子 ひろ香 富香 当代 宏夫 和子 絹子 みね 幸子 昭枝 弘子

みほとけの茶碗時にはパンジュース
母さんの茶碗はいつも遠慮気味
極上の茶碗で食べている茶粥
羨せぬ親子揃って片手食い
春色の茶碗で食べる豆ご飯
百均で買った茶碗で猫まんま
洋中華お茶碗籠ですわっている
お茶碗が重くなるまで書かぬ遺書
味はさて茶碗自慢は堂に入る
欲という罫にはまってる素直
両耳を有め素直な喉仏
何とも素直廻りつづけている地球
脱皮して素直になった反抗期
美辞麗句並べ素直さ欠いている
子の世話になつて素直が板につく
歩のままで素直に生きてきた誇り
まっすぐ聞いて悩んでいる素直
長生きを素直に祝う年となる
素直な自分鏡の中に住んでいる
決心は深いため息ついでから
ため息を捨ててリセットする明日
安倍さんにもため息をつく暇がない
ため息を今日も燃えないゴミに出す

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

歩くこと忘れていない車イス
半世紀歩幅の合わせぬのも夫婦
歩く気満満靴二足買いました
ふるさとを歩く裸足になつてみた

章子 寿彦 美枝子 竜 桂香 次根 イセ 昇 彦弘 幹子 碧 俣子 義雄 准一 かず子 菜摘 美羽 義泰 美子 純子 久 保州 千代美 敬子 慶子 蘭幸

切り株が休んでおいきと言ってくれ
人を愛して歩き続ける花の下
あと少し歩けば見える虹だった
風邪予防乾布まさつのこちよさ
また小石蹴ってる心乾いてる
その言葉心の乾きなごませる
ありがとう心の乾きに滲みてゆく
心まで乾かぬようにお経よむ
ささくれた自我の乾きを癒す寺
くやしきはいつも男の字に負ける
男だったらな雨の日雪の日の仕草
「男だろ」言って育てて悔がある
世も変り昭和男子が愛おしく
お目当ては花より男子ウフフフ
嘘つけぬ男の伸びぬ棒グラフ
国寶も男同士の酒を注ぐ
父の基地整列してる野菜達
勝氣だった幼馴染が弱氣吐く
流れ星いのちの燃える音がする
五月晴遊びごろのイヤリング
初夏の風感じて洗濯物を干し

松露川柳会(鳥取)

山本

正光報

大売出し幟立てても客まばら
長男の勇壮幟ながかせる
交通の安全願う幟立てて
武者絵には幟ながかせ矢と刀
このほりおよび五月の風物詩
大相撲幟太鼓で客集め

比呂子
寛

静風
栄恵

力

半徳
淑子

房子
弘子

規代
笑子

輝恵
汎美

幸子
昭紀

節生
歩美

厚子
あゆみ

栄香
史子

紅白の幟神社の笛太鼓
神父さん幟を見ても別の顔

川柳塔なら

坊農

柳弘報

麦畑消えて居場所のない雲雀
一線を守る線引きよく変わる
中韓と不仲の底にある領土
山焼きで火付けしている消防士
一気呑み男の意地もこの程度
平和です男が化粧してござる
不出世の悲しい酒で貰い泣き
最近のママさん姿に色っぽい
善玉菌守り続けている達者
道楽で男を磨く木偶の坊
近頃は判断出来ぬ自分の字
力まずに守りあつて老夫婦
どん底を知った男の深い嫉
挫折して男マゲマを溜めていく
健全な家庭を守る主婦力
年金のベースを守り恙無し
男って母のぬくみをふところに
母さんを見守っている昼の月
人間を見守っている昼の月
段畑の鍬をはげますあげひばり
一円の硬貨がいばり出す財布
酒やめて近頃急に老けはった
饒舌なスマホを友に夜を明かす
この男は増税前の値でどうぞ
辛かったやつと終った花粉症

正光
雄々

眞澄
甚之市

史郎
賛郎

博一
萌子

喜太郎
次郎

紀雄
弘風

ばっは
寿之

貫一
保子

將文
ふりこ

怜依子
辰雄

成子
比呂志

恭昌
富子

修弘
勝弘

石橋芳山選

あなたには選ぶ権利はありません
無理ですよ象は窓から入れない
いい予感玉子の黄身が二つ出る
何となくリッチな響きおとりよせ
包帯を取ると無いかも指の先
黄泉の国どんな景色が楽しみや
腹へこになると本気で考える
雨が降り皆が喜ぶ運動会
うれしくて昼から飲んでおりますの
このまんま平泳ぎではだめですか

佳句地十選

(7月号から)

徳山 みつこ 選

へべれけに酔って天地を裏返す
無理ですよ象は窓から入れない
人間も家もつかい棒がいる
転ばぬよう両手はいつも開けてある
父ちゃんを担いで走るお母ちゃん
大根もゴボウも今日はよく走る
火の川を越えても風は捲えない
からからの心に沁みるありがと
順風に浸り折りが雑になる
青空へ両手広げて同化する

(矢)五月

賢子

舞蹴
喜八郎

更紗
澄空

美ッ千
和夫

弘一
久子

シルク
ひとみ

松丘
喜八郎

芳光
万紗子

清
きよし

日の出
武彦

五月
賢子

聞き役の位置で親父の正誤表
ちらかして歩く男の背を守る
恋する君がしつかり守る春の宵
がっかりが哀しい最近の鏡
最近のニュース晩酌まじくする
益荒男が漫画の中で巣をつくる
傷ばかり負うて男の自尊心
復興の風向き知っているひばり
饒舌なひばりが黙る再稼働
不器用な男抱きたくなる母性

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

散らば散れ散って葉桜みどり萌ゆ
咲く花も散る花もいま花時計
散る花に目も呉れないで吞んでいる
散り際もきれいでいたい紅をさす
私の断片が散る子が二人
永遠に散らない星の屑になる
満塁でうずうずする四番打者
喉の奥うずうずすへん虫住み着いた
韓国船救助のニュースうずうずす
うずうずと出番まだかとどびん口
うずうずは未来を生きるバスポート
内緒話聞いてうずうずしゃべりたい
うずうずと待った母は鳥が先
鮎瀬うずうずしだす解禁日
マドンナの賀状復活クラス会
友達か恋人なのか微妙です
自尊心微妙に揺らしする悪事

柳弘 真理子 惠美子 理恵 いさお 完次 順啓 弥生 良一 朝子 照彦 幹啓 紀の治 龍枝 三津子 石花菜 悦子 紀美恵 貴恵 滋 道子 公恵 重忠 美利 野蒜 美利

＃、微妙な音が掴めない
堅物を砕けば味は離乳食
時事を避け天気予報とスポーツ欄
時廻りデイ・サービスでデートする
時々松坂牛のおもてなし
ネジ巻けば昭和の時計ふりこ振る
かみさんを時に大いにたてまつる
タイオウイカ時空を超えて身を曝す
其の時が来たら万歳して逝くよ
音速で飛び去る今の今
ドリッブコーヒー時が優雅に落ちてくる
ゆつくりと時が私をうめていく

川柳さざやま(兵庫)

北澤 桐民報

おはようの笑顔がくれた潤滑油
転んでも大地と握手した気分
父の背の無言今頃効いて来る
ぼちぼちと集大成にからかぬば
叩かれて男の顔になつてゆく
じわじわと素顔になつていく預金
片付けた部屋に新茶の香りたつ
じわじわと延長戦に追いつめる
古里の寺でお布施をはずんたく
顔がきくこじれた話もすんなりと
親の顔必死で追つて授乳前
じわじわと味がしみ込むおでん鍋
人生の整理はつぽつ大仕事

高知川柳社

小川てるみ報

芳山 くにこ 岳人 耕治 清 久芽代 玲坊 美代子 節子 完司 芳光 美知江 純子 美紗子 哲男 稠民 真由 多美子 開子 可住 かほる 幸子 照代 美智子 美香

器から愛が溢れる母の味
横糸の強さに弱い我が器
丁度いい器で水がこぼれない
懐の浅い器が背伸びする
大皿に日中韓の盛り合わせ

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

隠すなよ俺は痛だと知っている
機嫌よく三途の川を渡りたい
こ早ように切り札切つたのが誤算
恋かしらなんて冗談言わないで
こ早ように出たと思えば飲み会だ
バレバレだ自分で心読んで見る
原発差し止め司法の威信見せました
こ早ように帰れと野良の蛙鳴く
ママごとで我が家の様子バレバレだ
恋かしら父ちゃん死んで七回忌
忘れぬようメモした紙をまたさがす
小早ように嫁いだ娘すぐ戻る
指輪など無いけどダイヤモンド婚
艶事は死ぬまで隠し通してよ
連日の美食バレバレあのお腹
土下座した日からめつきり静かです
来客へバレバレ孫がみな喋り
恋かしらデート商法かもしれん
恋かしら昨夜も君の夢を見た
恋かしらちよっと気になる人がいる
小早ように逃げて災難免れる
活気ある街の匂いを嗅ぎに行く

千鳥 哲史 和広 てるみ 陸宏 洋々 金祥 無限 凱柳 一瑤 隆浩 節子 茶人 清帆 清信 かつよ 昌鼓 善夫 美恵子 あしび 秋月 主一郎 麗

横文字に老人力が匙を投げ

バレバレのプレセントでも気を許す

土下座する程悪い事していない

蛙のような土下座するから許そうか

休日は今日もお出かた恋かしら

恋かしらそんなトキメキ待ってます

小作料までくだささい土下座して

契約書いいさな文字にダマされた

バレバレも笑い飛ばせぬ老夫婦

ついでとは余り嬉しくない言葉

つかい棒になれたらいいね夫婦坂

梅雨間近でてる坊主荷が重い

求めると遠くに逃げる青い鳥

(方言)「こ早よう」は少し早めの意

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

誰だつてふと寂しさを感じます

遠い日の秘密が洩れた悪い酒

母の声ふと風運び消えていく

新緑の中でやさしい陽を浴びる

見立して医者が寡黙になる不安

浮き浮きと出かけた後の忘れ物

賞よりもただ一言のありがとう

賞受けたおんな大きくまばゆく

賞よりも景品が欲しかった

野暮ですかバチンコ競馬やりません

上役の野暮な態度がやる気消す

お似合いの席に割り込む野暮な人

私には賞味期限はありません

気がつけば眉間に皺を寄せている

回春子

地佳平

文香

重忠

行男

房江

蟹郎

弘康

孝二

美佐枝

雅女

天翔

一粹

盛松

咲和

(西)和子

いさお

弘子

すみれ

八重

蟹郎

実満

照彦

恒司

完司

思いきり抱きしめてやる賞ひとつ

ミステイク悩んでしまう記載洩れ

わたし消えふと物丈の部屋思ふ

病める手に持たせてあげる努力賞

耳元の内緒話が洩れている

隠したい話が洩れる旨い酒

満開の桜に心うきうき賞

南大阪柳会

津守

柳伸報

間抜け面してハッカラーとは意外

かしこい子一途に進む世のこわさ

寝たふりでもめ事さける古狸

親見れば子供かしこいはずがない

皆が皆かしこい人では困ります

記念日の憲法出して読み返す

殺したり殺されたくないから九条

憲法を変えてナチスの顔になり

憲法をひねくり回すのは昭和

憲法の解釈変える悪い人

96条びくともしい厚い壁

さらさらと光る九条持つ誇り

憲法の原点八月十五日

憲法は国の矜持だブライドだ

国会は憲法守るところやで

九条の解釈曲げることおらん

たまに来る孫には甘いおじいちゃん

ふる里へ甘えに還る五連休

弟は甘え上手で逃げ上手

生活の知恵で甘える里がえり

富久江

かおる

孔美子

みさ子

京

満

茶子

東風

タカ子

実

直子

昌紀

庸佑

シマ子

弘泰

修

いさお

祥昭

歌留多

集一

忠昭

勝弘

克己

柳石子

恭昌

篤

柳伸

観客の数に甘えるタイガース

病み上がり今がチャンスと甘えてる

おさな子は褒めて甘えてやり育つ

職人の腕は甘えを許さない

狭い家笑いが外にもれていく

許されぬ狭い心をもてあます

狭い路地花いっばい禁止澄んだ空

吊り橋は追い越し禁止澄んだ空

畳一帖あればゆつくり寝られます

狭い路地花いっばいの吹き溜り

こだわりがひとつ思考を狭くする

リベンジに新たな分野トライする

リベンジに挑む男の力瘤

宇宙からのリベンジきつといつか来る

八尾市民川柳会(大阪)土田

欣之報

維新の会失楽園の匂いする

残り香の中にわたしを置いて来る

君の愛信じて渡る虹の橋

とまどいを繕うゆつたりの笑顔

諦めも愛のかたちと知る老後

挽ぎ取った桃の匂いは淡い恋

半分は捨て身の覚悟火よ水よ

現実を遥か遥かにファンタジー

地球儀の裏から悲鳴火の匂い

白いバラ君の匂いに染められて

情熱が女走らす火の匂い

過去形に変えた拉致という熟語

魂が乾いて虹が掴めない

和雄

更紗

ルイ子

楓

百合子

なぎさ

とーな

たもつ

志華子

栄子

弘子

正春

ばっは

紀雄

慶子

賀世子

恵

耀一

清

森子

寿峰

寿男

安男

高鷲

朋男

常男

人間の喜怒哀楽を百羅漢

富柳会(大阪)

吉田

千華報

欣之

ピカピカの靴で待ってる桃さくら

はたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

森子

娑婆離れ独り倉庫で暮らしたい
断捨離で胸も倉庫もすっきりと
蔵はいい百年ぐらい眠れそう

佐一

そう言えば倉庫も俺も愚直なり
ノスタルジアへ回収されてゆく土蔵

保州

薄水溶けたら会いにゆくつもり
幸せてこんな小さな種でした

わが人生訂正印のてんこ盛り
矢印に案内された隠れ宿

幹治

徘徊の親父に鈴は付けられず
うろろにまじめに合わす万歩計

あきこ

爆発の予測は出来ぬ青い空
自分史を飾る表の顔がない

消印にどこを旅かと地図開く
同窓会印象にない人がいる

順子

うろろしながらストレス抜いている
戻れない道をうろろする迷い

夕胡

どつぷりと黒につかつて黒洗う
科学者も手には負えない恋病

泣き笑い長い一生老静か
イクジイに長い一日孫帰る

美智代

うろろの証拠ボツケに残される

秀子

化学の部類か妻の厚化粧
必要にされてますかと猫に聞く

巻かれるに一番長いものは妻
わざわざと行かず近くの桜花

長一

うろろの証拠ボツケに残される

泰女

顔洗ろて出直して来い都構想
死ぬ日まで女でいたい髪洗う

浅い読みわざわざ寝た子起こしてる
遠回りしても立ち寄る道の駅

桂子

必要とされてハートに灯がとる
得意技三つ四つあって平でいる

小雪

世の中を影が操る裏事情
怒りさえ消えた無心の皿洗い

何の夢幼児の笑み千万年
おせっかいな風が耳打ちもめさせる

柳童

被災地を狙う泥棒許せない
不摂生静かに命狙ってる

陽子報

柚子の香が灰汁を洗った仕舞風呂
表では表の貌で勝負する

折角の手紙も梨の礫とは
六年後ファンファレ聞くことは無理

守啓

花屋には捜さなくても四季がある
ゆるやかな結び目の中泳いでる

純宏

大小を言わせぬ母の半分こ
球体が好き裏も表も無いからね

おせっかいな風が耳打ちもめさせる
折角の手紙も梨の礫とは

郁子

現実を何であらうと受け止める
虫くいセーターお気に入りばかり

みどり

今年こそ足を洗って真つ当に
わが子しか眼中にないモンスター

泥水を運の気品が包み込む
泥被る覚悟男の底力

勝輝

喪の仕事大切な人唄びつつ
性分かりードのままに踊れない

栄子

少しずつ君に染まってく命
粉末に愛一匙のさしすそ

泥遊び母に叱られ仁王立ち
泥塗ってエステの顔を撫でている

寿子

矢面に立つた時から一人旅
合格へくつろぎ雲と一休み

あゆみ

時々胸に棲み込むモンスター
天平の闇を溶かしていく化学

もう一度艶めきたくて泥を塗る
同居人ふと笑わなくなった朝

紀子

列島を時速二キロの花の旅
生まじめに生きて火種は何もない

章子

鉄腕アトム昭和が生んだ科学の子
新人があつと言う間にモンスター

幾度もショック重ねて強かに
骨埋める積もりが首を告げられる

富美子

生きのびる明日へ手を貸し手を借りる

美恵子

他人の罪洗い出してはいけません
日本全国洗濯日和ですかしこ

平坦な道で足を踏み外す

和香

英子

安子

七朗

清

紀久子

准一

美香

恵

よりこ

ほのか

信子

真青

嘉子

よりこ

ほのか

信子

真青

よりこ

よりこ

ほのか

信子

真青

よりこ

よりこ

ほのか

信子

真青

被災地の一步のあゆみ小さくて
喜寿が来て時の流れが矢のごとく
暗闇を切り裂く旅の中にいる
狙い通り目薬落ちてホッとする
食べなさい寝なさい旅は続いている
計量器要らない指のひとつまみ
節くれた指温泉に連れて行く

はびきの市民川柳会(大阪 永田 章司 報)

汗はもう出ないこととやりました
まだ雫の切れない傘とわたくしと
バーゲンに軽い財布が揺れている
迷ったら楽な方とる古希の知恵
相合傘男は半分濡れている
後六日傘寿の坂が我を待つ
断りをはっきりされたプロボーズ
平和です九条があるわが母国
天秤の重さで決めたゴールイン
バス電車傘を何本忘れたか
眼鏡なし確かめたいよ妻の顔
サバサバとした性格で潔い
相合傘したい相手が見つからず
お財布がさばさばしてるスカラカン
スカンタコひと言放ちサバサバと
母の日のお花今年も咲きました
完敗にさはさは敗者インタビュ
異状無し聞いてさはさはした気分
晴雨兼用これ一本で生きている
困ったら母の遺影の前に居る

みち子 澄子 和代 華蓮 遊子 敦子 公弘
ダン吉 美代子 さくら 登志子 敏
久仁子 高鷲 千鶴子 フジ かつ美 美喜 雄太 悦子 シルク ヨシ枝 喜久子 いさお 庸佑 みつこ ちづる

細事には口出しをせぬ出来た人

川柳花の輪(大阪) 岡本 章司 報

ゴールです最後の力笑みうかべ
生きぬいた戦後の母の力こぶ
古里便り幼馴染の国訛り
弱気なババにママ自力で元気づけ
コンクリのすき間に咲いたすみれ草
誤字ばかりたまにきた子の頼み文
親となり生きる力を試される
拝啓も前略もなく金おくれ
埋もれた愛が息づく年賀状
白寿まで力尽きずにひた走る
隣国の我欲力で押していくる

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎 報

鏡との笑顔合戦朝がきた
戦中は花よりダンゴで生きのびた
もう先が見えて来ました酒の量
数かぞえ夜の体操繰り返し
妬心もところまですしき我を恥ず
日替わりのサラダで父へベジタブル

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也 報

子育ての頃を今でも思い出す
ツバメ来て寝たきりの母なぐさめる
戦争を知らない子らがはしゃいでる
おっちゃんが逝きおばちゃん生きると
ふるさとは満天星が怖いほど

章司 薫報 やすの 克衛 昭好 一幸 敬子 泰子 あや乃 薫 鬼 勇太郎 みちる 松風 節子 蜂郎 高実 高明 四郎 雅明 敏治 清 ばっは

毎日が危険と向かう齡となり
つまらん寝言のような浪花節
介護終え友はようやく輝いた
ナマズの背なびル群と原発と
表札の文字も輝く新所帯
欲の皮儲け話にすぐ響く
冠雪の富士引き立てる陽が昇る
ゆつくりと起きゆつくりと腰伸ばす
イケメンを夫に持つというリスク
突然にプロボーズされうろたえる
イケメンにどきまぎとする癖がある
誉められて輝いている子の笑顔
たわむれの恋を本気にさすワイン
流星の輝きだった僕の恋
追伸の熱愛くどく長くなる
空の旅どきまぎさせる乱気流
母となる日妻は一層輝いて
指輪よりキラキラしてた母の汗
一周忌すませ輝きだした妻
輝いたあとかすてきた笑い皺
金儲けできると老いにくる電話
輝いてはるな良い恋してはるな
大根がヌードになって光り出す
あとわずか危ない橋は渡らない
妻に酌されて思わず噎せかえる
つらいけどネクタイ背広夏過ごす
あの人の輝き奥さんのお蔭

川柳塔まつえ吟社(島根) 相見 柳歩 報

注湖 日の出 わこう ヨシ枝 みつこ 澄空 素頓馬 光 和幸 倅子 八千代 扶美代 かりん 和夫 時雄 清晋 好夢 誠一 世紀子 由一 唯教 五月 としお 朋月 愿 健吾 玄也

白髪でもまだ赤を着て闊歩する
丸刈りの小学生に夏が来た

母子家庭男に勝る東ね髪

寂しさは理髪店から始まった

髪染めて白寿の祝い紅をひく

すれちがう髪の香りに負けている

髪切って思いも切って傘の中

キューティクルくると束ね母の顔

屋久島の縄文杉は孤独だよ

古代文字愛の形がストリート

古代から女性上位の家系です

古代から胴長だった中筋家

スサノオは大じゃをたおしゆう気あり

早苗揺れ天の一滴待っている

夢枕たまには立つてよ亡父母さん

待つていた花の色にはうそはない

待つては慣れたそれでも好きだから

縁結び神も時々待ちぼうけ

太陽がぼちぼち届くころです

ぼちぼちと使いなさいと言う預金

ぼちぼちと切った尻尾が生えてくる

ぼちぼちとカルテに合わせ投句する

ぼちぼちと分かつてもらえ足の裏

ぼちぼちの葉味でつるりお素麺

娘を想うぼちぼち葉菜が熟れるころ

地団駄を踏んでエンジン掛けている

エンジンオフ今充電の昼寝中

おっぱいがふたつエンジンよくかかる

昌枝 知恵子 桂子 青帆 ちえこ 柳歩 美智子 輝山 熊四郎 弘充 紗季 草庵 哲子 邦代 ゆき 寿代 芳山 久絵 雪代 澄子 民子 とも子 幸代 千里 博子 浜丘

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

然り気なく笑顔を交わす散歩道

どんまいだ百迄生ける金はある

8%のせいで財布布重いの

まち針を打った男を待っている

男運逃げたまんまで戻らない

針千本果たせぬままの手の温み

ちぐはぐな言い訳嘘が見えかくれ

ちぐはぐな母の話を継ぎ合わせる

ちぐはぐな道も夫と一緒になら

心こめ今日の針縫い終える

ちぐはぐな返事で返す思い遣り

おはようとの人にでも私から

伊勢出雲記の世界が蘇り

吉凶はどうあれ明日はきつと来る

子が被告針の筵に座る母

Tシャツの腕にキラリとロレックス

結構な御手前ですと茶器を誉め

初恋の疼きが残る里の橋

挨拶もまともにしないけど近所

音もなく今日という日が逃げてゆく

肝心なときにはおらぬ私です

原爆を詠びて貰わな終わらない

若い女浴衣にミユール履いてはる

なるようになると思えば気が軽い

幻に終わったスタップの砂像

ねずみより船長先に逃げ出した

極楽への挨拶料に積むお布施

高志 武彦 榮子 弘風 あさ子 倫麗 志華子 典子 杵香 千恵子 ルイ子 懸笹 野鶴 克己 実 柳弘 克己 修 洋志 勝弘 堅坊 賢子 朝子 満作 和夫 直樹

原発ノ一地裁判決拍手する

追いつめたゴキブリ羽根がありました

逃げる児を追いまくってるバスタオル

縫うよりもくろうしている糸通し

生き抜いた自信で余生光り出す

節電に値上げ六月の猛暑

九条の光に勝る武器はない

梅雨空に休暇もらった洗濯機

川柳大阪

森松まつお報

気に入らんそんなら何もしてあげぬ

寒そうなそんなら肩でも抱いたろか

子の叫び聞かずスマホで遊ぶママ

満員電車あなたの足が乗ってます

ときどきは叫んでいますバカヤロ

消費税一〇%あかん声あげる

失恋の慟哭くるむ観覧車

弱点を晒すと怖いものはない

人間の弱みを包み込む夕陽

弱音吐く前に家族の顔浮かぶ

自慢した嫁入り荷物邪魔になり

定年後妻の荷物になった僕

銀メダル次は金だという荷物

W杯荷物にそつと縁起もの

親心にもつにならぬ聞きなさい

手荷物にカメラと地図のひとり旅

過積載若い命を沈ませた

うなぎ登り死語は嫌です泣けてくる

この暖かさ気象異変うたがいの

一歩 郁夫 美智子 義昭 求芽 正 五月 公平 まつお 堅坊 万紗子 勝弘 美世子 義子 朝子 柳弘 善純 紀雄 五月 一歩 信醉 珠生 蕉子 和 功

血流の流れゴモクを取り除く

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

割烹着の裏面白出来ぬ汚点
裏のウラかいて僅差で切り抜ける
さんざんな一日めげず裏返す
眼裏の故郷に休耕田はない
良いと言う景気判断裏がある
人生も酒ものんびり裏通り
駅裏の雑多好きで足が向き
ごそこそと行く路地裏の秘密基地
買物籠税分が重くなる
いちにちをきれいにたたむ乱れ籠
幸せそうなお前も俺も籠の鳥
恋人と芝生が好きなのバスケット
買物に籠は要らないカードだけ
人間のエゴが生み出す籠の鳥
札束に虐げられて生きてきた
札束も非常袋に入れておく
札束がややこしい事連れて来る
札束と愛を秤にかけてみる
虐げられた胃も肝臓も悲鳴上げ
定年後は妻に虐げられている
中国の強引どこまでも主張
イスラムの女子に教育与えない
虐待を手助けをする武器輸出
ひまわりの映画で泣いたウクライナ
小遣いもろくに渡さず送り出す

信子 朝子 ひろ子 朝子 久生 乃明 正己 克己 廣子 明子 敏子 壽峰 和雄 信二 保州 浩二 秀夫 堅坊 直子 英夫 桃花 哲男 すみ子 祥昭 キキ

司

騒ぐ子は放り出そうという怖さ
いじめんといじめられるという怖さ
動物はヒトの虐待真似しない
傷ついている児大人をきずつける
この国を貶めていく物狂い
父の日に母は仲間と飲み会に
咲くと切られるバラの復讐棘を持つ
母さんは銃を撃てとは育てぬぞ
自衛権八月の日は拒否をする

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

追風に乗ったつもりが逆風に
スイッチがすぐに入らぬ二日酔
図に乗って妻に命令するうかつ
泥水を素足喜ぶ三歳児
原子炉を閉じる技術が今ほしい
一言があればあれよと大事に
誓いあった未来が消えた冬の駅
おねだりが得意と言うがこれも技
青空を返してくれと渡り鳥
形見分け父の顔した腕時計
技に凝り価格が合わず売れ残る
ごさぶりホイ妻におませ光る技
妻の手のひら気持ちいい乗り心地
ベビーカー乗っているのは王子さま
禁酒三日もうべつとりと汗をかく
断家はマクラで客を引き寄せる
ありがとう素直に言えぬなんでやろ
妻の愚痴溢れべつとり染みついた

千代 武彦 盛夫 秋果 ひとみ 宏造 武臣 浩司 千賀子 茂 紀華 弘子 美津子 章子 忠 正和 一徳 宏造 美智子 ひろし シマ子 忠昭 鈍甲 たもつ とーな 篤夫 穩夫

技競う五輪観れるかその日まで
程の良い間合いとる技母ゆすり
人としてたまたま生まれ生かされる
気晴らしに路線変更するリュック
本当はファインプレーも出来夫
べつとりと残す足跡現在地
家族の胃護って特技膳に盛る
スイッチオン今日も戦争はじまった
戻せない糸を手繰ったばかりに
満開のつじに元気をもらう朝
生中を飲むととたんに喋りだす
脳みそのスイッチ感度落ちて
初めての世界が見えた父の肩
六月がべつとり滲むクールビズ
べらんめえ技は教えぬ持つていけ
泥バックべつとり塗って毒を抜く
熟年の坂にべつとり汗が沁み

岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

トンネルを出たら漁火見えてきた
九号線驛馳山トンネルすばらしい
組織から離れていまは好好爺
組織から離れて気付く弱い我
雲などを眺め他人のお葬式
麻雀は終わりに少し浮けばよい
言い訳をすればするほど灰汁が浮く
父ちゃんの浮いた話を蜂が刺す
睡蓮の浮いて梅雨入らしくなる
歳月が浮き草土地に根付かせる

たぬ 節子 蟹郎 圭一 完司 天翔 忠良 清帆 重忠 比志 直 哲男 勝弘 朋子 恭子 歳子 キヨミ 淑子 晶子 美籠 りこ わこ じろう

浮き沈みよくぞ生きたと振り返る
 浮いている空気読めないお坊ちゃん
 苦節十年やつと秀句がふと浮かぶ
 落ちこみも友の言葉でよみがえる
 野暮だとは知りつつ叱る他人の子
 昨日まで他人事だった認知症
 正装の席夫婦でも他人めく
 他人から貰うなさは倍温い

葛子 幸安 一粹 和子 茶子 幸子 弘子 美恵子

ローズ川柳会(兵庫)

亀岡

哲子報

新婚さん幸せ気分溢れてる

藍

好きなだけ寝て居てそれを喜ばれ
 七十年戦を知らぬ国に住む
 はんやりの記憶に欲しいスベアキ
 エンピツを削っている幸せな時間
 外は工事アイス舐めてる幸せ度

てる みつ子 哲子 年子 義子

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

天と地を結んだ父の肩車
 落日へ父は無言で手を合わす
 父の日も独りでビール飲んでる
 父の日だとせめて気づいてはしかった
 父の日にステッキ届き息を呑み
 まあバイ父の位牌に酒をつぎ
 呱呱の声やつたぜ今日からはババだ
 子どもは私に似てかみな普通
 子どもには背中で語る父がいる
 散骨に決めて気楽に生きる道
 お気楽な生き方をする潔さ

龍一 葵子 英夫 扶美代 清之 悦子 いさお 勝弘 キーキー 喜代子 雄太

長柳会(大阪)

坂上 淳司報

気楽だろ立つてりゃいいさ田の案山子
 憲法を気楽にいじること勿れ
 手ぶらで行き来出来る仲です宝です
 カンパスにならない様に四股を踏む
 小遣いをくれる爺じが二人いる
 願わくば世界平和と小遣いと
 小遣い帳つけてたお下げ髪だった
 要るときに小遣いくれる妻が好き
 年金から孫の小遣いひねり出す
 ヤバイけど良い小遣いになるバイト
 生みの親育ての親へのお小遣い
 旨いなあ小遣いで飲む安い酒
 好きな物買いなと十万妻にやる
 小遣いが足らぬ足らぬも呆けるまで

絹枝 みつこ 婦美枝 信二 紀雄 美代子 六点 瑠美子 武人 フジ子 光男 弥生 愿 まつお 一步

ラッシュ時はバンザイ痴漢ではないぞ
 全没の寸前天はにくいなあ
 川床の涼も味覚よ鮎の香も
 がん検診疑い晴れて赤のれん
 疑つてみたさきりない粋な人
 外食は偽装疑う癖が出来
 物産展試食が過ぎて味覚飛ぶ
 偽善者が汗も見せずに嘘をつき
 四季折折旬の味覚でおもてなし
 食い意地が張って味覚は惚けてない
 葬式もネクタイなしでクールビズ
 午前様妻が笑顔で待っている

淳司 弘光 芳野 明信 もこ 篤 修 靖博 久美子 克三 ひろこ 正博

九条に鉛の雲が垂れ込める
 今度こそ信じさせてね母さんに
 憲法を曲げる政治が肌寒い
 青い空性善説を疑わず
 絶滅の危機だうなぎの味を追う
 タフな胃が初夏の味覚を追いかける
 豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

(藤) 隆彦 正彦 直樹 正美 輝子 孝代 庸佑 比ろ志 美佐子 幹治 千恵子 武彦 健二 美津子 歌留多 徹 幸子 堅坊 弘之 紀華 美龍 則彦 葉子 靖鬼 巴子

さり気なく水向け本心模索する
 高僧の衣の袖にある浄土
 私の子育てた妻の決めセリフ
 告白の機会待つてる赤い傘
 こんど会えたらいつしょにあそぶ流れ星
 めし時や夫が怒鳴るコマシヤル
 いらつしやいませ笑顔の使い分けをする
 単身の赴任を拒み平で終う
 女性にも機会均等道しるべ
 Wカップごときにくらし乱されぬ
 芍薬も牡丹も美女の顔で咲く
 ブルータスお前も同じ総入れ歯
 夏の彩みたくて傘を折りたたむ
 あばら屋で暑さ寒さに逆らわず
 月夜の晩の不思議な話しましょうか
 極楽の席が空くまでチャンス待つ
 煮え切らぬ男に見切りつけてきた
 どちらさまと妻に訊く日も遠くない
 羽衣を着て天空を浮遊する
 どっちゃでもええから早く長い列
 父の日を機会に息子酒交わす

ここのチャンスになると乾く喉 正彦
年金にボーナスあればと夢に見る (呂) 玲子
ウインカー遅いケータイやめんかい 耕治
今という今がチャンスと気付かねば 久子
逆らえず背伸びもできず日が暮れる 見清
たい焼きはどちら側から食べようか 茂
逆らつてみても私の掌 千鶴子
千羽鶴飛び立つ時はきつとくる 求芽
どなたでも素直にそしてありがとう ヨシエ
絶好のチャンスのがさぬカメラの目 美智子
しなやかにチャンスの方神顔を出す (永) 玲子
キャベツむいて答えさがしているところ きらり

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

神仏を信じなくても生きられる 弘一
大阪の元氣支える町工場 祥昭
シャッターを閉じた商店続く街 銀杏
影だつてたまに離れてあげたから 修
元氣流刺青い地球にもどりたい 朝子
命ある限り自分を信じよう 賢子
泥付きの大根に付いてきた詛り 高鷺
宴会じゃタレントはだし かくし芸 忠央
無料なら何でも見ます絵画展 さち子
浪速つ子たかじん節がやつは好き 弘風
八十年私の足に感謝状 かすみ
家庭円満妻の元氣に支えられ 薫
シャッターの閉鎖住い街の鬱 壽峰
譲れない話致死量超えている 仁
父ちゃんが逝つてますます母元氣 仁清

子の夢を消して駄菓子屋店閉じる 麗
子信じ母の日待つが忘れられ 尚世
献血に腕をまくっている枯れ木 郁夫
活気ある人から元氣盗んでる 美智子
元氣なく今日もとほとは一句読む 秀雄
どの風も信じられない風見鶏 洋
愛された記憶の中の星まつり 柳弘
信すれば三段跳びで子は伸びる 博泉
子の言い分つぶらな瞞信じよう ルイ子
立ち位置を間違えたまま立っている 恵子

きやらほく川柳会(鳥取)竹村紀の治報

眠らずに青春歌うヒゲの顔 幹啓
そよ風に日ざしがあたり息をつぐ 登美枝
ソフクリームなめなめ歩くのが好きだ 多美子
路地裏の名も無い花が凜と咲く 雨奇
八十路越え喜怒哀楽の日日送る あやこ
つまづいて万策もない自尊心 ひろこ
リモンがもの言わぬから見つからぬ 喜周
心配をかけて子供は育ちます 宏之
週一度友とくつろぐ箱の中 ひろし
地球にも寿命があると知った今 鶴子
語り合うよき友ありて時忘れ 壽々子
待つていた花も私も光り向く 初枝
脇道を逸れオアシスへ辿りつく 恵子
日野川の伏流水を飲んでいる 紀の治
早緑に染まる五月の肺二つ 蘭
閑だから病探して病んでいる 千代

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

瑞枝 未延子
ほほ笑みのトップの友を風除けに
こんもりと茂るあたりに父の石
世渡りの流れのままにきた長寿 志華子
表には姿見せずには糸を引く 捷也
人畜無害そんな自分に飽きてくる 正雄
若竹が知っているのから近寄らぬ 希久子
性格を知っているから近寄らぬ 蕉子
今更に変らぬ性を道づれに 恭昌
性格不一致とバツ三の慣れた文字 富子
妻の性格アジサイに似て七変化 善之
僕のくせ良いも悪いもほっといて 理恵
素直にはなれぬわたしも振花も 舞夢
昔ダンディ今は老体支えてる 弘子
性格に隔たりあるが惹かれてる 眞澄
たいていは何とかなると思つてる 千歩
倍にしてお返ししてくるお隣さん 満作
白杖に氣遣い歩く介助犬 げんせい
ステッキを挙げて叱つた亡父の顔 みつ子
ステッキよりもやさしい人の腕がいい 照子
濃い緑木もれ日浴びて友といふ 浩二
中・韓・露獲つた獲物は放さない すみ子
梅雨晴れ間主婦は頭も忙しい 義
またの名を後期高齢者とも言う 知之
鯛の粗炊安いけれど味がよく 楓楽
ありがたや年相応に老いてゆく 日の出
叱られて本当の愛を感じ取り 公平
娘来る認知のテスト始まるよ

席譲つて呉れた男子にあめあげる
有難み恩着せられてチャラになる
水田でT P P T P Pとサギが鳴く

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

腰くだけみたいにな妻とバス旅行

次々と反りが合わぬと辞める趣味

じゃませんといて女の春を気まま旅

左遷地で我が世の春と背伸びする

親の気ままに今日も嫌いな塾通い

解釈は気ままにまかす第九条

我儘を許してくれた妻が近く

ハーフかな目鼻パッチリ長い足

お茶漬のもとと半分で昼がすみ

半分に出來ぬ寂しさ一人っ子

人生の残り半分修復期

コンビニは散歩コースに入ってる

コンビニで値切る勇氣はありません

雨宿り粘り切らずに傘を買う

コンビニに集う孤独な蛸たち

艱難も二人で背負えば荷は軽い

ふるりの潮風運ば一夜干し

春風に運ばれて來た綿帽子

京菓子と一緒に届く京都弁

アベノミクス物事うまく行くのかな

六文銭なくて渡れぬ三途川

運が來たいよいよ私の出番です

大敗にぞろぞろ帰る競馬場

船沈みぞろぞろ出てきた官憲着

和朋幸晶雅恭茂宣婦美子

和朋幸晶雅恭茂宣婦美子

ぞろぞろと蜜に群がる永田町
ぞろぞろと園児よろこぶ縄電車
嫌な事ぞろぞろ出てくる老後です
首かしげ蟻の行列見てる犬
ノキョーにどこか似ているサポーター
青竹が撓るわたしも若かった
サッカーに浮かれてる間に可決され
いざこざの絶えない地球嫌になる
バスを待つ間に顔が日焼けする
なんとなくいい感じですよ君の側
父の日にこれ見よがしの赤い丸

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

句会より人が集まるスタジアム

母の日は賑やか父の日は静か

いつせいに平和を歌う田の蛙

雑草の繁みの中にある葉

目立たないように対角線にいる

いびつさも表情になる味になる

両親の愛のかげから出て来ている

単純なわたし画数ならば一

つべこべぬかすな戦争は放棄だ

意地悪な掟が多いのは女

手の中の祝辞が汗を掻いている

多い目に赤飯盛っておすそ分け

青春の記憶の街が消えている

大宇宙で小さな欠片月ですね

一日が行だけの日記帳

墓石で負けさせた額五千円

健二 つな子 喜久子 光江 哲夫 順子 雅尚 歳子 ひとみ 祐康

雄大 けいこ

普段着になつて世間を広くする
聞く耳はないが愚痴言う口はある
妻失明老いのドラマが始まった
折角の心づくしが多過ぎる
元同僚なぜか多い認知症
記憶する名前は書いて覚え込む
青春のどの街角も寒かった

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

後悔をして反省を繰り返す

反省へみどりの風が心地いい

健康な人に病名付ける医者

誤算続きの人生だから面白い

価値観がゴミか宝か仕分けする

平凡に今日という日が暮れてゆく

ごめんねの一言あれば許すのに

三度目の反省胡椒振っておく

反省の姿が堂に入っている

想い出に程よいヴェール掛けておく

前回の反省ふまえて今日無口

妥協する道もさくつて拗ねている

反省の燃えカス残る火消しつば

虹色の風が吹いてるうれしい日

しんがりにつき見えてきたものがある

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

革カバンいつも論吉が潜んでる

健診に適量と書く酒タバコ

母の日も今は母越す年となり

風露 由紀子 重忠 鈴野 すみゑ 仁美 完司

光久 武彦 洋一

洋一

紫陽花の雨滴が映す万華鏡

時間だけあつてお金がない気まま

仕事バカ気儘にさせてくれた妻

家くらい少し気儘を許してよ

散り際に一花咲かす心意気

深よみをしすぎてベンが走らない

人前で歌うの苦手昔から

しゃばん玉盡れいと言われすく消える

妻の留守気儘に飲める至福の日

生き様に赤信号のない私

一瞬も一生もある五七五

逝つた子は涙の泉おいたまま

デモの国サッカーボールもけりにくい

シミシミもこれ一本で嘘でしょう

定年後ガイド片手に一人旅

ちよんはれのうそをついてるににくいひと

二枚舌何度切つても生えてくる

参観日答えぬまま手を高く

車椅子絆の和音背に響く

サロンプラスはしさらばのシースルー

ブラジルでサンバに乗ってキックオフ

ぞろぞろと先祖供養の彼岸の日

観光地ぞろぞろ旗につれられて

近くまで来たときやさしい父の嘘

言い訳は出来ぬぞろぞろ出る証換

梅雨晴れ間あじさいだつて深呼吸

天上の迦陵頻伽を聴く皐月

京都塔の会(京都)

樹本

宏子報

求芽

目に若葉水琴窟の音をきく

お静かに水琴窟がささやくよ

あれはどここれはどうした二人住む

全没の句会が続く不整脈

ひとひらの夢がキラキラ乱反射

逃げみちをあけて問うてる母の位置

灯籠は苔涼庭の見張り役

英会話習い始めた稲荷さん

水琴窟のせせらぎの音今もなお

雨の稲荷もエエモンやろと言うキツネ

水琴窟と石灯籠のおもてなし

イヤリングスベアを失くし眠る箱

孫の輪にいつもスベアの役がくる

スベアでもそのうちにとる鬼の首

乱暴に見えて底には人情味

エースにもコントロールの乱れる日

百倍も面白くする乱打戦

乱雑に積んだ枯れ草から花芽

おばあさんになつても問題児である

是非を問う華は黙つて考える

問わず語りに本心までもボロリ吐く

アンケート何で年齢問うのです

許せるか自問自答を繰り返す

アニメソング日本の未来問うている

電気代か命かを問う再稼働

勝ち名乗り髪を乱れも誇らしげ

まだ行ける僕にはやる気のスベア分

脳味噌のスベアがあれば欲しいもの

乱筆で御免と書いた字が自慢

突然に美人酒乱へ裏返る

光子

宏子

美津子

千代

哲子

義子

千枝子

公子

紀華

かずお

益子

悦子

輝美

美佐子

ふりこ

啓子

英旺

紀子

義子

弘之

則彦

順子

すみ子

葉子

義昭

保子

森子

朝子

欣之

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

九十年ぶり気温を上げた北海道

上がるのは物価血圧体脂肪

消費税三五八と十迄も

牛飼つて牛を殺して牛を喰う

味わいは塩一振りのプロの業

美味いのは賞味期限の二日後だ

チマキ巻く親子の鯉が空を舞う

旬の味すいか食べ過ぎ水ぶくれ

磯で割りつるりと食べる牡蠣の味

句会出てしみじみ佳句に浸りたい

若き日の刻を味わう祭りの日

窓開けて世間の風で輪が和む

渡る世間鬼も仏も背にのせて

自分流通せば世間狭くなり

気がつけば世間話が愚痴の山

世の中へ返すご恩が多過ぎる

世間体ばかり気にして狭く住む

つまらない世間が詰まる福袋

よちよちでよいいつまでも歩けば

よちよちと歩いた記憶誰もない

よちよちの子も借金を背負つて

ヨチヨチと歩いていたアスリート

よちよちと真つ先向かう母の胸

ボケたつてよちよちだつて飲みに出る

物価上庶民いじめて景気よし

川柳みちのく(青森)

稲見

則彦報

照彦報

龍枝

瑞子

悠子

石花菜

貞子

鬼一

英子

紀美恵

重忠

和子

美知江

雄大

由紀子

智恵子

風露

茶子

美ツ千

野蒜

玲坊

康子

醉芙蓉

萩江

祐子

完彦

照彦

霜石

お月さま勘違いって楽しいね

モーツァルト眠り姫たち連れてくる

抱き枕よりはギターの抱き具合

一人でも青空抱いて生きて行く

防波堤越えて人家も見失う

運動会膝すりむいて一等賞

孫ひとりと応援団は十二人

血圧が一気に上がるヨーイドン

それとなくスリーサイズを聞かれてる

それとなく手が伸びて行く吟醸酒

いろいろと愚痴をお酒がなだめてる

人生いろいろ探しのまだ見つからず

いろいろな荷物背おって遍路道

ホームレスまだ人生は捨ててない

老いてなおくちびるに煩惱がある

耳打ちをされて人間取り戻す

起きなさい午前六時の咳払い

パス無言路線の秘密知っている

千の窓千のドラマを演じてる

勝って泣き負けて次への石を積む

ボーよりも夢二がいと黒い猫

「いらっしやい」人よりも猫が出る

機械化で猫の手などは借りられず

猫の目に観察されているヒト科

血統書付で外には出れぬ猫

独酌で右手が余る猫を撫で

フオークダンス死者も生者も輪になつて

男子校フオークダンスは夢の夢

しあわせのリズムいざなう民舞踊

予定表フオークダンスと太書きし

和香子

綾子

一花

一湖

呑舟

小とみ

一呑

洋子

初枝

ひとし

きよし

柳子

美鈴

五楽庵

黙人

姦

規子

隆樹

慕情

芳生

則彦

雅城

井蛙

ふさあ

龍馬

花峯

氏加子

龍人

花匠

つとむ

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

めちや嬉し皆んな出かけて一人なの

エゴイズム通して生きて四面楚歌

人生をめちゃめちゃにした好い女

唸るほどあると公言するシニア

めっちゃうれしい体いっばい表わす兄

ぼつくりと逝きたいけれど今はいや

骨董品値段を聞いて唸ってる

めっちゃうちゃな内紛抱える世界地図

雷神の後は私と虹が待つ

ほどほどの雨で草木がよみがえる

何時までの寿命か大事に今を生く

いつからか待つのが好きになった老母

海峡に舟往き来して潮唸る

世界遺産昔の人は偉かった

窓を打つ雨のかたちになる心

文楽座唸り納めの三太夫

信用が命こつこつ生きて行く

帰国してめっちゃうまい白ごはん

命にはスベアが無いと酒止める

ヤドカリは身の丈を知り衣替え

秘湯につかり命洗濯する至福

雨が降る二人で入る傘一つ

唸るほど金があるのにけちん坊

充分ですあなたに出会えただけで

駆けようか少し待とうか通り雨

残金を余命で割ってする暮し

若い日の山彦を聞くクラス会

反省会ゆつくり酒を飲みましょう

しわしわの皮膚の血を吸い蚊も疲れ
いい雨だ今日は充電しておこう
首ひねり吹き込む命一行詩

ノリ効いたシャツが遺る気を見せつける

船長が最初に逃げていく命

命綱妻に預けて飲んでいる

白熊が唸る地球が熱すぎる

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

簡単にイエスと言われ思案する

主婦からの脱出パネを弾ませる

瘦せたいし美味しそうだしまた思案

即答は軽すぎますよ間が大事

老歌手に赤いネクタイよく似合い

ほいほいと貰ったチョコは高くつき

捨て難く思案に余る古書の山

全紙面核ゼロ弾む朝がくる

表情と十指が弾む手話二人

思案事いっばいあった古帳簿

ペンギンはシックな服で古遊会

ちよんとした弾みに夫婦五十年

付焼酎シックに遠い修業中

思案尽き下駄を天まで蹴り上げる

ウインダーの前でロダンになる私

ハムレットの気分で行きつ戻りつし

母さんが弾めばみんな乗ってくる

シックです服装でなく生き方が

破れジーンズやめて婚活ワンピース

だんだんと心弾んで君に逢う

妻留守の僕なんとなく弾む

見清

耕治

キヨミ

美龍

朋月

かずお

ダン吉

蛙城

香代

和美

喜久子

喜代志

幸子

信二

ダン吉

隆昭

大輔

忠太

弘子

英夫

ひろ子

房恵

枉子

益男

みつ江

康信

義泰

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 ねやがわ	17日(日) 14時締切 疲れる・ビジネス・拙い・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	17日(日) 14時締切 以外・尾・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	18日(月) 13時40分締切 脇役・削る・まだまだ・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曽根駅・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	19日(火) 13時30分締切 紙・レンタル・許す とことん・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	22日(金) 10時開場 売る・予定・渴く・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
岸 和 田 川 柳 会	23日(土) 14時締切 土産・競う・ぐったり・ガラス	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	23日(土) 12時30分開場 面・老い・気	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 和歌山市役所西隣 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
八尾市民 川 柳 会	24日(日) 14時開場 八尾市民川柳大会	7月号=121ページ参照
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日) 14時締切 土・浴びる・ざわざわ・適当	陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日) 13時30分開場 ミラクル・蒸発・なるほど	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	25日(月) 18時開場 駅・参った・そこそこ・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	25日(月) 14時締切 ブザー・吉・強い	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松 露 川 柳 会	25日(月) 19時30分締切 夏・公害・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光
川 柳 塔 すみよし	30日(土) 14時15分締切 愚痴・クール・比べる	住吉区民センター 〒558-0054 大阪府住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 さ か い	第32回 夜市川柳大会 7月31日	7月号＝121ページ参照
城 北 川 柳 会	2日(土) 14時締切 無理・絡む・やっと・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	2日(土) 14時締切 喝・仰ぐ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 川 柳 会	2日(土) 14時締切 飛ぶ・いみじくも・鮮やか	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 な ら	6日(水) 14時締切 探す・顔・時計	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき 川 柳 会	8日(金) 14時締切 諦める・雀・一滴・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	9日(土) 13時45分締切 港・降る・重い・ほとほと	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳大阪	9日(土) 14時締切 ほどほど・色・退屈	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9日(土) 14時10分締切 兼 題＝町内・ユーモア・くわえる 課題吟＝そして	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫
川 柳 塔 打 吹	9日(土) 14時締切 欲・洗う・うっとり	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
西宮北口 川 柳 会	11日(月) 14時締切 煙・汲む・ぼたり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池10-18-104 福島弘子
川 柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 追う・立派・のほほん・自由吟	尼崎女性センター・テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
ほたる 川 柳 同 好 会	12日(火) 13時30分締切 樹・丸い・印象吟	豊中市立鯉池公民館 阪急・モノレール 鯉池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 みちのく	16日(土) 17時締切 青空・おたおた・思う	弘前市榊屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 稲見則彦

第38回 全日本川柳2014年 富山大会 選考結果

(当日 627名/事前 1,800名/ジュニア 12,004名)

高校生・一般の部

文部科学大臣賞

寺巡る度に鱗を置いてくる

鳥取 政岡未延子

参議院議長賞

木簡のかすかな文字がしゃべり出す

奈良 西川 國治

川柳大賞

吊り革にコピー人間ぶら下がる

山口 田中 博美

大会賞

内紛の国に生まれた子の命

宮城 仁多見千絵

徘徊の母風船と出て行った

東京 辻 直子

吹き込んだいのち紙ふうせん弾む

静岡 岡 水品 団石

生き過ぎることも苦勞とくすりのむ

山口 竹本チエ子

大痛み止めこんなに残し逝った母

富山 金崎 健一

わたくしの中で発酵してる黒

佐賀 真島久美子

風船を追いかけて自由人になる

島根 石橋 芳山

九条のコピーしつかり取っておく

山形 中川 晴海

黒光りするほど生きて生きて死ぬ

鳥取 藤原 鬼桜

吊り橋の揺れへくすりかてばなせぬ

広島 高橋 鬼焼

幻灯も終わるお浄土にかえろう

長崎 小田 八宝

小学生・中学生の部

富山県知事賞

ふうせんはゆめをのせたらおもくなる

高知 高岡第一小2 廣澤 耀士

富山市長賞

カラフルな色になじめぬ黒の意地

青森 佐井中2 船越 桃佳

富山県教育長賞

じゅ業中えん筆たちがおどってる

広島 佐方小4 日高 空

北日本新聞社社長賞

カラフルなふうせんみたいほくたちも

富山 鶴坂小5 増沢 駿希

全日本川柳協会賞

悪口が君の風船割りにいく

富山 大沢野小6 小森 望月

がようしにゆめをかいたらはみだした

山口 多磨小4 陶 智美

教育新聞社賞

かき氷今日の気分はメロンかな

岩手 城北小4 吉田 脩悦

日本人やつぱり黒だかみの色

富山 大久保小6 清水 瑛美

日が落ちて黒に染まってゆく自然

山口 田万川中2 須郷 賢

(ゴシックは本社同人)

残暑お見舞申し上げます

あかつき川柳会

(鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かす(会則))

◆「あかつき」(月刊 300円)

〈会報〉

◆(助大阪保育運動センター)

◆毎月②金 13時開場

〈旬会〉

宮崎	塩満	山本	松本	前田	西川	鈴木	杉谷	阪井	加山	江島	荒川	岩佐	近藤	森村	川端
シマ子	敏	昌代	千鶴子	紀雄	ひろし	いさお	和雄	美世子	勝久	勝弘	鈍甲	ダン吉	美正	美花	一歩

残暑お見舞申し上げます

大阪川柳人クラブ

会員一同

会長 礒野いさむ

副会長 板尾 岳人

板野 美子

幹事長 竹森 雀舎

事務局 伊達 郁夫

会計 中川 隆充

残暑お見舞

申し上げます

熊本川柳会

高野 宵草

永田 俊子

岩切 康子

柳界展望

★第38回全日本川柳20

14年富山大会は6月29

日に開催。事前投句一八

〇〇名、当日参加者六二

七名。同人成績。

文部科学大臣賞

政岡未延子

寺巡る度に鱗を置いて

くる

大会賞

石橋 芳山

風船を追いかけて自由人

になる

▽出 版△

◇東奥日報創刊125周年記

念企画・東奥文芸叢書川

柳句集『無印笑品』著者

高瀬霜石。B6判132頁、

一二〇〇円＋税。

◇合同句集『もくせい』

B6判226頁、豊中もくせ

い川柳会（会長・江見見

清）発刊。序文・西出楓楽。

▽ご芳志御礼△

○植野美津江さん（番傘

同人）より、路郎忌句会

に際しご芳志拝受。

▽新誌友紹介△

高槻市

新井つね湖

紹介者

片山かずお

山鹿市

柳田 白沙

紹介者

前田 幸子

大阪市

桑原すゝ代

紹介者

山本希久子

▽住所変更△

常任理事会

7月7日(月)

①新理事・常任理事の推

薦②二賞選者③第20回川

柳塔まつり関連④大阪川

柳大会⑤定例確認事項⑥

各部報告事項⑦その他

次回8月7日(木)AM10時

▽削 除△

新 同 人 紹 介

1月号 P122中段22行目

↓美人の湯妻はなかなか

出てこない。本人申し出

により削除

▽お詫びして訂正△

7月号 P106上段23行

目、欲のない人ほど貯ま

るなんでやろ 紀乃↓紀

子。P107下段19行目、川

柳塔まつえ吟社（鳥取）

↓島根。

清 水 英 旺

楓楽・かずお・宏子・弘之推薦

辻 村 ヒ ロ

岳人・直樹・富美子・淳司推薦

北 澤 稠 民

可住・哲男推薦

松 井 文 香

楓楽・みつ子・能子・光久推薦

能 勢 利 子

楓楽・みつ子・いわゑ・光久推薦

梅 澤 盛 夫

楓楽・みつ子・能子・光久推薦

第12回 おかやま県民文化祭分野別フェスティバル

第8回 岡山県川柳大会

と き 9月7日(日)

開 場 午前9時30分 開会 午後1時

締 切 午前11時30分

と ころ 浅口市市民会館金光(大ホール)

課 題 (各題2句)

「 艶 」	江尻 容子	選
「 観 」	木口 公遊	選
「 字 」	草地 豊子	選
「 海 」	福力 明良	選
「 涙 」	荻野 浩子	選
「 酒 」	新家 完司	選
「 鍵 」	清水かおり	選
「 番 」	江畑 哲男	選

参加料 2,000円(弁当・記念品・大会誌呈)

*ご祝儀拝辞

お問い合わせ

〒719-0104 岡山県浅口市金光町古見新田1325-10

北川 拓治 TEL 0865(42)6039

主 催 岡山県川柳協会

富田林市民文化祭

富柳会 第64回 川柳大会

と き 9月27日(土) 正午 開場

(昼食は済ませてお越し下さい)

と ころ 富田林すばるホール

(電話 0721-25-0222)

(近鉄長野線 川西駅下車 徒歩8分)

課題と選者 各題2句 席題なし

「てのひら」	渡辺 富子	選
「 端 」	嶋澤喜八郎	選
「振 舞」	みぎわはな	選
「盗 む」	井上 一筒	選
「 根 」	河内 天笑	選
「半 分」	池 森子	選

出句締切 午後1時

会 費 1000円(お茶・発表誌呈)

懇親宴 4000円(当日受付)

お問合せ 池 森子(電話0721-25-0603)

主 催 富柳会・富田林市他

第22回 和歌山県川柳大会

日 時 9月27日(土) 10時半開場

出句締切 12時 開会 13時

句会終了予定 16時15分頃

場 所 和歌山県JAビル 11階(TEL 073-426-8100)

JR和歌山駅表口から向かって左側 徒歩2分

参加費 2000円(事前投句料 1000円・当日

参加費 1000円 記念品・発表誌呈)

※ 昼食は各自お済ませください

事前投句・兼題及び選者 各題2句(雑詠は1句)

欠席予定者も事前投句は投句可。出席予定

者も事前投句は投句してください。

柳 話「川柳マガジンからみた川柳と川柳界」

松岡 恭子氏

事前投句「雑 詠」和歌山県川柳協会会員結社代表 選

事前投句「姿 勢」汐崎 光 選

兼 題「野 菜」磯部 義雄 選

兼 題「節 る」馬場 明子 選

兼 題「橋」桑原 道夫 選

兼 題「ドラマ」岩田 明子 選

兼 題「まだ」川上 大輪 選

事前投句 8月20日(水) 必着

※投句料1000円。なお、当日出席者は会場

にて1000円を納付のこと

※欠席投句が出来るのは事前投句と雑詠の

みで、兼題は当日出席者のみ可。

投句先・問合せ先 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子方

主 催 和歌山県川柳協会

第37回 神戸川柳大会

日 時 10月18日(土) 開場 午前10時

場 所 兵庫県民会館 9F 大ホール

神戸市中央区下山手通4-16-3

(JR元町駅・阪神元町駅から北へ10分)

兼 題(各題2句・欠席投句拝辞・未発表句)

「椅 子」	西田 斎柳	選
「洗 う」	辰巳 和子	選
「 糸 」	中野 六助	選
「傾 く」	高田美代子	選
「 裏 」	渡辺 信也	選
「悩 む」	前川千津子	選
「雑 詠」	濱邊稲佐嶽	選

会 費 2000円 各題秀句に賞呈

事前応募の部

課 題(各題1句・未発表に限る)

「誓 う」	大森 一甲	選
「 蛭 」	平山 繁夫	選
「許 す」	赤井 花城	選

応募要領 所定用紙・原稿用紙・便箋1枚に句を列記

投句料 1000円(郵便小為替)

締 切 8月5日(火) 当日消印有効

投句先 〒670-0884 姫路市城北本町9-15

濱邊稲佐嶽 宛 TEL 090-3721-9295

主 催 神戸川柳協会

編集後記

★古手紙 この世のことは

編集後記

違い、造語やらで編集人
を戸惑わせることも。川
上三太郎は「句はわが子」
と説きました。作品は分

このような
(薰風)

★川柳さっぽろ6月号巻
頭言は主幹岡崎宇氏の筆
になる。毎月受け取られ
る郵便物に対するご苦勞
うと、私は思います。

を綴らわている。「投句用紙に○印がないこと。課題の混入、切手の貼り」

★六月号編集後記を読まれた方から「梶井基次郎の墓はどこにあるか」と

忘れ、料金不足……」な
お尋ねがあった。ネット
どに触れ「一重の封筒の
で検索してみると大阪市
方が中の確認が楽なので
中央区の常国寺とある。

助かる」と結ばれている。私も事務所で投句の整理をしたことがある。その経験から「封筒は一重がよい」には大いに納得。

七月のある朝、地下鉄谷町九丁目下車歩くこと一〇分。基次郎の小さな墓には干からびて黒くなったレモンが2個。最

★これまで度々お願いし近どなたのお参りもな
ましたが、投句は濃い筆
記用具で、文字は楷書で
かつた様子が見てとれ
る。

今一度辞書でご確認ください。「なんて失礼な、文字くらい知ってるよ」と不愉快に思われるでしょうか。ところが意外な勘

★夏の日差しに耐えてい
るお墓を洗い、レモンと
お線香を手向けた。三一
歳で逝った作家が眠るに
は少し寂しい墓所だ。特

「よく見れば・・・」

「よく見ればなすな花咲く垣根かな」これは芭蕉の句であるが、芭蕉は人目もつかないペンペン草がチャンと咲いているのを見て、いたく感動したに違いない。さてこの『よく見れば』という言葉であるが、常日頃慣れきって、うつかりするといふ見過ごしがちな自然の風物や他人の善意について、もう一度じっくり見直し、大切に

確かによく見れば私たちの周りには今まで見過ごしていたパートナーや、心温まるニュースが思いの外あることに改めて気付き、これまで兎角不満を抱いていた平凡な日常が、何とドラマ性に富んだときめきに満ちたステージであることがよくわかり、作句のモチーフにも悩まずに済むのである。

(原 洋志)

しようということを示唆している
と思う。

原 洋志

ひとこと

別のゆかりがあるわけではないが、何となくこころ惹かれるものがある。本社学生会場からそう遠くはない。次の機会にはお花を持ってお参りしよう。基次郎に似合う花はなんだらう。『檸檬』を読み返しながら考えてみたい。(朱夏)

かなづかいに直し、漢字もかなも改変、読みやすくなっている。時代小説ファンにとっては川柳で江戸の情景も楽しめ、なおかつ勉強になる、まさに一石二鳥の魅力的な連載になっている。

○誕生から墓場までの人の一生を縦糸という事

な句が出てくるか期待が一杯。

○小説『天主信長』（著者上田秀人）は上巻・下巻でなく表・裏というののが面白い。本能寺の変の話で、今ドラマで人気の黒田勘兵衛も絡んで読み応えがある。乱の後に信長の首が見つかったいな

(朱夏)

○俳風柳多留二篇研究で、取り上げ婆走るで始まり、毎回、句の解説に「こんな解釈もあるのか」と納得させられる。興味ある方は一読を（まつお）

い謎が、読み進むうちに「こんな解釈もあるのか」と納得させられる。興味のある方は一読を・・・

(まっお)

二賞選考

応募用紙

○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）
--------------	---------------

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

締切 8月10日(日) 必着

- ◎ 下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
- ◎ 裏ページの要項を読んで応募してください。

地名

姓·雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成25年9月号から平成26年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日(日)必着のこと

④ P 98・P 99を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)

地名

市都
道府
県
道
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「パン」(8月15日締切)

10月号発表

古久保和子 選 —— 共選 —— 牧野 芳光 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

10月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 西出楓楽選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄 (2句) 牧野芳光共選
古久保和子選

一路集 (3句) 松本知恵子選
「斜め」 岡本花匠選
「コビー」 山口節子選
「管理」 野口光久担当
「沈黙」 (3句) 山口光久担当

11月号

檸檬抄「黙る」
一路集「誘う」「ダブル」
「列」
初歩教室「プライド」

本社8月句会

とき 8月7日(木) 13時開場・13時40分締切
—開場時間・締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「薫風さんさん」

兼題「小銭」 松尾美智代選
「頼む」 山田耕治選
「ビール」 山崎武彦選
「互い」 小松原寿子選
「隙」 小島蘭幸選

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社9月句会
9日(火) 午後1時から
兼題「軸」「送る」「コスト」
「赤い」「梢」

第32年度 夜市川柳募集

第3回「化ける」 鴨谷瑠美子選
ハガキに3句 8月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料86円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一四年平成二十六年八月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七七九三三九〇番
振替 〇〇九八四二一九八四七九番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア(ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>